
Lost Days

陽炎煙羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Lost Days

【Nコード】

N5986S

【作者名】

陽炎煙羅

【あらすじ】

あなたは、幽霊だとか、鬼だとか、そういう異常で奇異な存在を信じているだろうか……。

……全く、何の冗談だ。心からそう言いたい。俺、巽野響輝は幼いころに姉を亡くした。なんのことはない。言い訳もしない。なぜなら、結果的に姉を殺したのは俺だからだ。……俺の引っ越し先は小さな街だ。都会でもなく、田舎でもない。ただ前いたところと違うのは、やたら絡んでくる隣家の少女と、夜の街を徘徊する異形のモノたちくらいだろうか……。人々の記憶に干渉し、感情と肉体を

喰らい、その痕跡は朝には消えている。しだいに日常と非日常は交わり、街は閉ざされる。閉ざされた街は化け物の巣窟と化する。人の身では奴らにはかなわない。でも、このくだらない盤上で蹂躪されるなんてことは、まっぴら御免だ。だからせめて、俺に笑顔を見せてくれたアイツだけは、助けたかった。助けたかった、のに……。

ダークファンタジー寄りの物語です。

そして少年は到着する … 1 (前書き)

初投稿になります。

更新は二日に一度くらいになると。

では、お楽しみいただけると幸いです。

そして少年は到着する … 1

あなたは人が死ぬところを見たことがあるだろうか。

俺の姉が死んだのは俺がまだ小学三年生の時だった。

その頃はまだ死というものに触れたことも考えたこともなかったため、全くもって現実感がなかった。何のことはない。姉はただ、行方不明になったのだ。

だが、俺はそれを聞いても何も感じなかった。
当たり前である。

姉を殺したのは俺からだ。

殺した……いや、死んだというべきか。

何にせよ、自分の目の前で人が死んだのだ。

全く、迷惑な話である……。

話は変わるが、あなたは幽霊やら妖怪やらを信じているだろうか。
存在するものなら出会ってみたいものだが、そもそも俺はそのような存在を信じてなどいない。

無論、俺だって昔は未確認飛行物体やUMAを特集したテレビ番組をわくわくしながら見ていたこともあったのだが、今となってはこの世はたまに現れる才のあるものが政治や国際問題を扱い、俺のような、比較的才能的には普通に属する人間はいつまで続くかわからない、次の瞬きのあとには終了するかもしれない、ひたすら続くつまらない日常を生きるだけなのだ、

と気づいてしまい、人生というものにうんざりすると同時に、まだ心のどこかでは、そういった、不可解で異常でとんでもない者たちの出現を待ち望んでいる自分もいたのである。

d e

目を開けると、大小さまざまな段ボール箱が見え、それと同時にトラックの立てる騒音が耳にはいつてきた。

時折訪れる揺れに体を任せ、ゆっくりと意識を戻していく。

『む……、起きたか』

頭の上のほうの段ボールの上で電子音声が鳴る。

しかし俺は無視した。理由は特にない。

『おい、また眠ろうとするな、話を聞け。というかせめて返事くらいしないか』

さて、今度はいい夢が見られるだろうか。

『聞け!』

「あーわかったわかった」

とりあえず手に持っていた文庫本を脇に降ろし、顔に被さっている帽子と一緒に置いた。

顔を上に向ける。

『全く、貴様は…』

電子音声が車内に響く。

「だけどな、ハーテッド。一つ言わせてもらうとだな……」

『言わせる気は毛頭無い』

「ああそっかい」

すぐその段ボール箱からケータイに似た形の端末を手取る。

一つ言わせてもらえば、人が揺れ動く車内で静かに本を読んでいたのに横でガチャガチャうるさかったのはお前であり、そのせいで俺は気分が悪くなったのだ。

……車内で本読めばそりや気分悪くなるか。

そう思い直し、改めて体を起こす。

『おい、響輝』

「ん？」

『暗いぞ』

「ああ。元々俺はネガティブでな」

『車内がだ』

「……」

……さて、そろそろ雑談はやめにして俺と俺の横でうるさい端末について語るとしよう。

そして少年は到着する … 2 (前書き)

まだまだ先は遠いです……。
シリアス

そして少年は到着する … 2

俺の名前は巽野響輝。 たつみやひびきと読ませる。

そして俺の横でひっくり返っているのは俺の親父とその仲間が子供のころから友達を一切作らなかった俺のために作ったプロトタイプの人工知能を内蔵した端末、試作品「hearted」。まだ一般販売するほどのものではないらしい。といっても俺がこいつを貰ってから既に五年近く経つため、もっと性能のいいやつが実用化しているらしいが。

「ところで、そろそろ龍ヶ峰市に入ったんじゃないか？」

『そうだな』

俺の引つ越し先は龍ヶ峰市という田舎でも都会でもない中途半端な街だ。北、東、南、西の四区に分かれている。

H I B I K I s i d e

「本当にありがとう。響輝君！」

二十分後、俺の目の前にはなぜか同世代の少女がいた。どうしてこうなった。一体全体何が起こったのか。

何の因果関係でこうなっているのか。人と関わりたくない俺に対する神の当て付けか。

話は十五分前に遡る。

前で運転していた母がふと外を見ると、こいつが横を通り過ぎようとしていたらしい。

何気なく通り過ぎようすると、こいつが何も無いのに転んだというのだ。それも派手に。

そこで心配性の母は今時大きなお世話にしかないというのに車を止め、そいつの家が俺が引つ越すところのすぐそばだと聞きだ

すと、ただでさえ段ボールと俺とで人口（？）密度の高いトラックに招き入れ、運ぼうというのである。

全く、何の冗談だ。とんだ迷惑だ。骨折り損のなんとやらである。

もうひとつ問題がある。

何というか、この目の前の生き物は俺とテンションおよびテンポが違うのだ。いや、違いすぎる。

一番重要なのはそもそも俺は明るくなく、こいつは明るいことだ。会話と空気に溝が生じる。

ああ、早くこいつと話す時間が終わってくれないものか。だれか標準テンションの高い奴、俺と代わってくれ…。

トラックは龍ヶ峰市の四つある内の一区、北区へと入り、そのさらに北端にある閑散とした住宅街で停まった。

積荷が運び出され、それと同時に俺と少女が降りる。

……あっちまだ名乗ってすらないぞ。

なんだか腰の辺りが重い。

ふと見ると腰に付けた端末から『おえっぷ……。ちっ揺れすぎだ』と聞こえた。

黙れ低能。お前にそんな感覚受信機能はないはずだ。

『ま、まあ……、なかなか力、良、よい家でハ、ないか』

『やめろ、なめらかな電子音声に重低音を混ぜるな』

そういえばこの前ハーテッドをアップグレードした時に親父が揺らしすぎるな、とかなんとか言ってたような気がする。まずったか。そう思いながら玄関の扉を開ける。

「ほんと、おしゃれでいい感じだね」

…… ちょっと待ってもらおうか。

「なぜ、お前がいる？」

なんで住人になるはずの俺より先に新家に上がっているんだ、この女は。

「なぜって……。 お隣さんなんだから、ちゃんとごあいさつしないといけないかな、と思って」

「…… は？」

お、お隣さん？ 今こいつお隣さんって言ったか？

「そうだよ、あなたは巽野。私は隣の戌海。わかった？」

少女は自分はお隣さんなんだからいいんだもーん的なことを言う
と、先にダイニングに行った俺の母のほうへ歩いて行った。

そして俺はいまだに玄関で突っ立っていた。

「…… さて。 ハーテッド」

『何だ』

「戌海を日本語訳してくれ」

『勘違いするな。 コンピューターは辞書ではない』

そうだろうとも。

「…… ああ、お前が俺のところに来てから俺の思うコンピューターの定義は崩れっぱなしだよ」

『妥当な意見だ』

しばし突っ立つ。 何やってんだろ俺。

『ちなみに、“いぬかい”だ』

暗殺された昔の首相がどうした。

『いや、“戌海”はそう読む、と言っている』

「犬でも飼ってそうだな」

『漢字が違っただろうが』

即座に突っ込まれた。

まあ、立ち話しても仕方あるまい。
とりあえず、二階の自室に行くとするか。

そして少年は到着する … 2 (後書き)

自分のタイピングの遅さに愕然とする今日この頃。
まあ気長に待ってくださいな。

そして少年は到着する … 3 (前書き)

この物語は基本主人公視点で進みます。たまに主点が変わります。

そして少年は到着する … 3

包み隠さず言おう。

…… 引越した初日は散々であった。

あの戌海とかいう奴がやっと帰ったと思ったら、今度は自分の家に来いと言うのだ。なんでも御馳走してくれるらしい。

だが断った。俺はこの選択を間違っていたとは思わない。

しかし、何も事情も知らない（いや……、母には、戌海が典型的な“良い子”に見えたに違いない）母にそれを知られてしまい、その後はどこぞの軍人も爆笑しそうな立てこもり作戦を俺が実行し、それは母が俺があゝの系統の、常に俺と炎と氷並みの温度差がある人間を苦手としている、というか嫌いであることをやっと思ひ出すまで（というか夜まで）続いたのである。

その上、俺は国立である龍ヶ峰高等学校に明日から通うのだが、そこにはその戌海も通っているのだ。

結果、俺はあゝのうるさいのと一緒に明日から登校することになったのである。

ともかく、今日一日いろいろありすぎて、俺はすぐに眠ってしまった……。

……とはいかず、なぜか眠れずに俺はハーテッドと話していた。

『眠れぬか』

「ああ」

そもそもお前には眠るなんて概念はなかるうに。気を使うなど何年も前から言っているだろうが。

『そうか、そんなにわくわくしているのか』

「ああ……ああ？」

『ところで、この街の夜風は生ぬるくて気持ち悪いな』

俺の渾身の返答が流された。まあそんなことはどうでもいい。

「それもそうだな。……窓閉めとくか」

面倒くさいが気分が悪いのはもつと不快だ。ゆっくりと立ち上がり、夜風に揺れるカーテンのほうへ歩く。

そして、カーテンを閉めようとした。……が、俺はその手を途中で止めていた。

『どうした』

ハーテッドが怪訝そうに訊く。

「何してるんだ？……あれ」

この新家にある窓の中でも比較的大きな俺の部屋の窓からは、生け垣と向かいの空き地の間にあるごくごく普通の道が見下ろせる。

少し離れたところに、電柱に取り付けられた蛍光灯が一つ。

その小さなスポットライトの中に、人影が見えた。

「何やってんだ、あんなところで……」

一瞬、人形かと思った。それほどまでに、その人影はひっそりと、音もたてず、身じろぎもせず、ただ、一点を見つめて立っていた。

振り向くと、ハーテッドは既に休眠してしまっていた。いや、休止状態というべきか。

しだいに目が慣れ、俺の目が人影の後ろになびく髪の毛をとらえた。

「女……？」

ハーテッドに言うでもなく、俺は独り、つぶやいた。

そして少年は到着する … 3 (後書き)

若干暗い空気が続きます。

そして少年は到着する … 4 (前書き)

パソコンが最近調子悪くて苦勞します。

そして少年は到着する … 4

どうやら今俺が見ているものは白いワンピースを着ているらしい。しかも、遠目に見ても明らかに痩せている。いや、痩せすぎだ。

ここから見たって短めのワンピースの裾から棒のような足が見える。

荷物らしきものは持っていない。両手をだらりとたらし、前かがみの姿勢で立っている。

いや、まあ確かに今のご時世であれば、夜道に人が立っているなんてことはありふれている。

だが、この風景には何故か違和感があった。

……いや、そもそも夜に女が一人、街灯に照らされて突っ立っている光景自体が、やはり不自然なのだろうか。

その時だった。街に一陣の風が吹き抜けた。

“それ”が身に着けていたワンピースが風に舞い、飛んで行った。俺は一瞬、こんな真夜中に人の裸を凝視してしまうことになるのかと心の中で頭を抱えたが、ワンピースが舞った先に残った身体を見て、そんな思案は吹き飛んだ。それはもう、あっちへ逝ってしまうレベルで。

「……………」

そこにあっただのは俺が常識として知る“肉体”ではなかった。

そこにあっただのは、……ただの、直立不動の、骨だった。

……ありえない。骨が立てるはずがない。

コレは見えてはいけない。見ては……いけない！

……頭でそう思いながらも、俺の体は窓際にとどまったままだった。

相手が骨だからよくはわからないが、“それ”のあってないような視線の先には、隣家があった。

隣家といっても戌海の側ではない。西側の少し離れた家だ。

確か、俺よりも二ヶ月ほど前にこの街へ引っ越してきた家族がいるはず。

“それ”はその家の二階をじっと見つめていた。

……間違いない。“それ”はその家を何かしらの理由をもって見つめているのだ。

そう、ただ、見つめている。

それだけのはずなのに、それが無性に怖かった。

ここにきてようやく体が窓から引き離された。

体が吹っ飛ぶようにベッドへ飛び込む。

「はあ……はあ……」

息が荒い。自分の鼓動が頭に響く。

眠っているハーテッドを叩き起こしたくなった。

……この状況をたった独りで見るのは……、あまりにも億劫だ。きつすぎる。

俺はすばやく起き上がって荒っぽくカーテンを閉め、再びベッドに飛び込んだ。

休眠している端末をぶっ叩く。

『うぐ……。何だ、いきなり』

文字通り叩き起されたハーテッドが不服そうにつぶやいたが、俺

の耳にその声は届いていなかった。

そして少年は到着する … 4（後書き）

よろしければ、感想や小説家になろう勝手にランキングへの投票などをして頂けると嬉しいです。

そして少年は到着する … 5 (前書き)

異常と正常の場面変換の難しさについて orz。

そして少年は到着する … 5

なぜ……、こんな真夜中に人が……いや人骨が……。

なぜ、“あれ”は身じろぎせずに隣家を見つめているのか……。

なぜ……

何故……

ナゼ……。

「なぜ……」という自分の声が脳内でエンドレスリピートを始める。
次第に前の街での記憶の一部がフラッシュバックを始める。

俺の手に握られた中華包丁。血の滴る俺の狂気な凶器。
目の前には血みどろの既にモノと化した……

「……馬鹿げてる」

「何が」

意味もなくつぶやけば、少しずつ心臓の鼓動が穏やかになっていった。
つた。

ゆつくりと立ち上がると、カーテンの端を握る。

少し迷い、思い切って開いた。

暗い道を見下ろす。

が、そこにはもう何も立っておらず、舗装された道路が淡い光に照らされてあるだけだった。

隣家のほうは相変わらず静まり返っている。

……当たり前か。こんな時間に起きているはずもない。

さて、冷静キャラが戻ってきたところで沈着に考えてみよう。

よく考えるとあれの髪の毛はただ頭部にへばりついているだけだ

った。

なんせ骨だからな。

全く、何の冗談だ。畜生め。

独りでぶつぶつ呟いている俺に、ハーテッドは何も云わない。

俺はやはり、あの二日間のせいでちょっとおかしくなってしまう
ているらしい。

あんな異常な事態を見ても、数分で平静を取り戻している。

……考えるのはやめよう。もうそろそろ狂いそうだ。

カーテンを閉め、再三、ベッドへ倒れこむ。

ハーテッドが『何なのだ、お前は……』と呟いた気がしたが、今
は眠りたかった。

そして少年は到着する … 5（後書き）

会話が少ないですね…。なんとかしないと。

しかし少年は苦悩する … 1（前書き）

日曜日はだるいですよね…。むしろ用事があつたほうが自分のためになるんじゃないかかと思ったりします。

しかし少年は苦悩する … 1

ジリリリリと鳴るのは目覚まし時計、一昔前だと黒電話だ。

ホーホケキョと鳴くのはウグイスで、

夜中にブイブイいわせるのは俗に言う暴走族である。

ではここで問題だ。

ピンポン……と鳴る物はなんだろうか。

無論、玄関のチャイムである。

では、引越してきた翌日の朝六時三十分にそれを鳴らしてくる
不届き者は誰だろう。

無論、あの五月蠅い奴である。

H I B I K I s i d e

正確には六時三十一分なのだが、細かいことはこの際どうでもいい。

1時間と30分前、俺は無情なる端末、ハーテッドに叩き起こされ、昨夜のことを延々と話させられた。

『無情とは何だ。我を叩き起こしておいて勝手に寝たのはどこの誰だというのだ』

端末の画面が紅く点滅する。やめろ、どこぞの怖い話か。

「だから、それは悪かった。マジで謝る」

『……まあ、いい。それで、この頭の中身がピーマンな響輝は昨夜見たものをどう解釈しているのだ？まさか、貴様ともあろう者が、幽霊……だとか思っているのではあるまいな』

「いや……。だがな、骨だぞ、骨……」

『おいおい、冒頭で信じてないと断言しているではないか』

「……お前、さてはまともに話進める気無いな？」

そして、しばらく言い争った後、予定通り、ハーテッドを俺のベルトに引っ掛け、俺は龍ヶ峰高等学校の制服を着ようとしていた。そこで、玄関のチャイムが鳴ったのだ。

「響輝ー！出てあげなさいー！」

母が呼ぶのが聞こえる。

「はいはい」

『“はい”は一回だ』

「もうお前うつさい。しばらく黙ってる」

いくつかの新品のノートと前から使っている筆箱を鞆に入れ、チャックを閉め、下に降りる。

……さて。我が新家には一階と二階を繋げる階段のすぐそばの壁に、インターホンからの声の主と会話できる受話器があるのだが。

受話器を手に取り、耳に当てる。

「あ、おはよう、響輝君。私だよー、戌海琴音」

素早く受話器を持ち換え、元の場所に戻す。

「ちよっ響……」

向こうには、「ガチャリ」と俺の返事が聞こえたことだろう。

弁当と朝食を貰いに、ダイニングへと足を進める。

一歩進むにつれ、ダイニングから話し声が聞こえてきた。

「どうもありがとございます！フレンチトーストまでいただいたちやって」

……。

……は？

おい待て。地球上の俺以外の時間、少し待ってくれ。

もちろん、そんなことできるはずもなく、ゆっくりとダイニングを覗くと、

「あら響輝。駄目じゃない、女の子を無視したりしちゃ。はい、これお弁当」

弁当を受け取り、鞆に入れていた俺は、あることに気付いた。

「母さん、俺のフレンチトースト……」

「あー。あんまりにも遅いから、琴音ちゃんにあげちゃった」
何……だと……。

「あ……あげちゃった?!」

「響輝君のお母さん、料理上手だねー」

戌海琴音がにつこり笑っている。

おい待て時間。勝手に俺を置いていくな。

というかお前、外にいなかったか？戌海琴音。

っていうか、お前コトネっていうのかよ。今の今まで知らなかったぞ。

それより、フレンチトーストは俺の大好物だぞ。勝手に食うなよ。

「どうしたの？」

戌海が訪ねてくる。

「いや……、もういい。何か突っ込みどころが多すぎてよくわからん」

『一体どうやって入った……?』

ハーテッドの呟く声が聞こえてきた。

しかし少年は苦悩する … 1（後書き）

まあ、休みがないと僕みたいなのはさっさと壊れてしまいそうですけど。

しかし少年は苦悩する … 2 (前書き)

キャラに個性を持たせるのは難しいですね。

しかし少年は苦悩する … 2

玄関の戸を開けると、五月の薫る風が顔をなでる。

「ねえ、何組になるのかな？響輝君は」

そんなの知らん。来てからのお楽しみにでもしとけ。

「ふーん……」

『少し眠りたいんだが……』

「……勝手にしろ」

一体何が原因で俺はこんなのと一緒に河原の土手道を歩いているのだろうか。

女子と河原を歩いて登校だなんて羨ましい、などと思うことなかれ。

俺にとっては苦手な人と仲良しこよししなきゃならんことの方が勘弁願いたい。

それが例え女であろうとも、だ。

隣のこいつはというと、何のわだかまりも無く笑っていやがる。全く、何の冗談だ。誰か教えてくれ……。

十二歳の時の、ハーテッドが来たあの日より今の自分はイライラしている。

家庭の事情に振り回されるのもうごめんだ。

そして俺は昨夜のことを思い出してなるものかと、過去を引っ張り出したりして頭を埋めているのだが。

「……ねえ」

……。

「ねー」

……。

「ねえったら！」

……どうやら俺の横の五月蠅いのは不服らしい。

「ねー、ハーテッド。何で響輝君……。怒ってるのかな」

『こういう奴だ。別に怒っているわけではあるまい』

我が無機的な友、よく云った。

「……むう。…ねえ、響輝君」

「……ん？」

とりあえず答えてみる。

「ちよつとハーテッド、借りてもいい？」

「まあ、構わないが……」

何をしようというんだ、この女は。……まあ、特に断る理由もない。

「ありがとう」

戌海琴音はそれだけ言うと、俺からハーテッドを受け取り、自分の通常歩行速度よりもゆっくり歩く俺を置いて、走って行った。

別に「走って行ってしまった」と言う気はない。

しかし少年は苦悩する … 3

さて、今俺は一人、河原の上の土手をゆっくりと歩いているわけだが。

いざ周りに人（若干名人工端末）が居なくなると静かになるもので、話している時……。まあ、戌海琴音のほぼ前衛的な会話だったが。……には聞こえなかった虫やら鳥のさえずりやらが俺の心を和ませてくれるのだが。

脳内では昨夜のワンピース骨女が路上に立っている風景がゆらゆらと浮かんでいる。

しばらく歩いていると、急に後ろで自転車のブレーキ音が聞こえた。

……妙な嫌な予感がする。

振り向くと、そこには背の高い色白の少女が自転車を跨いで立っていた。

「ねえ、君、隣に越してきた巽野君よね。」

「ああ……、はい」

……うわあ。

想定できる限りでは最悪の状況だ。まさかご当人に遭遇するとは俺の目の前で立っているのは松阪久美。戌海側とは反対の隣家に住む例の家族の長女だ。確か俺より一つ年上だったはず。

それをそうだと認識した瞬間、昨夜の風景がより鮮明に脳裏に映し出されたが、努めて顔に出ないようにした。

松阪久美は涼やかな目で俺を見ている。

そして、さらっとこうのたもった。

「昨日、窓からこっちの方を見てたでしょ」

「……！」

なっ……。あの時、隣家は完全に寝静まっていたと思ったのに……。
これでは俺が引越して早々深夜の隣家を窓から見つめる変人になつてしまうじゃないか。

冗談じゃない。

「……ああ、ええつと……、はい……」

我ながら情けない。普段ならこんな反応はしないはずがないのだが。

「あの時道に立っているあれ、見えた？」

「……はい」

「やっぱり……」

そう言つと、松阪久美は急に目線を逸らし、俺より少し速いくらのスピードで自転車を押して歩き始めた。

……ふむ。これはまずい。実にまずい。俺が流されている。流す側ではなく。

まあ、どうやら話はここで終わりらしい。

ああよかった。心からそう思う。

「……どうしたの？ いかないの？」

違ったか。まあ、そうだな。

いや分かっていたさ、畜生め。

どうやら歩きながら話そうということらしい。

断る理由もなく、俺は少しペースを上げて歩き始めた。

「……あれね、母なんだ」

またさざりと言いやがった。

こともなげにそう言う横顔を妙に遠く感じる。

「……お母さんがどうして？」

聞かずにはいらなかった。それほどまでに俺は動揺していたに違いない。

「母はね、死んだの。でもね、戻ってきた……。だから、家に入れないんだ」

今更だが俺はいまだに自分の見間違いであることを願っていた。情けない限りだ。

「それってまるで……」

…… まんま幽霊じゃないか。

「そうね。幽霊みたいって思うでしょ。……ううん、多分そういうものなんだ。だから、私には見えてるのに、私の父には見えてない。そこにいるのって指さしても、全然」

俺は立ち止まった。

彼女も自転車を停める。

しかし少年は苦悩する
… 4 (前書き)

旅行っていいですね。

しかし少年は苦悩する … 4

まじまじと松阪久美の顔を見て俺は思った。

こういう時、どういふ顔をしたらいいのか皆目見当もつかない。

……いや、そもそも前例がない。

「それって……、冗談だよな……？」

「うっん、マジな話よ。だって……あなたも見たんでしょう？ “あれ”を」

……仰る通りで。

湿気を帯びた川風が彼女の髪を揺らした。

そういえば、昨夜立っていた骨女と今日の前に立っている彼女が似ていないこともないなと思った。

まあ、比較対象が髪しかないが。

いや、それより、なぜ彼女が“あれ”を恐れていないのか不思議だった。

まさか……。

「もしかして、今夜も来るのか……？」

そう言った瞬間だった。

それまで笑っていた松阪久美の表情が一変した。

眉根を寄せて、川面を見つめ、しばし口を引き結んでいた。

……やばい、地雷を踏んだな。

「——怖い……」

「……」

ぼつりとつぶやく彼女を見ると、顔が青ざめていた。肩のあたりがわずかに震えているのがわかった。

「……。今夜は、窓の外を見ない方が、いいよ」

……何？

「……それってどういう……」

「絶対に、見ないでね」

そう言っていると、松阪久美はふいに手を振ると、俺に返答の隙を与え
ることもなく、自転車のペダルをこいで走り出した。

あの手の振りの意味が「また会おう」なのか「さようなら」なの
か、俺はまだ知りもしなかった。

K O T O N E s i d e

戌海琴音は困惑していた。

彼女は生まれたときからこの龍ヶ峰市に住んでおり、外といつて
も、東京や大阪ぐらいにしか行ったことがなかった。

それ故、街の「外」からこの街に移り住む人には非常に興味があ
るのだ。

一ヶ月にすぐ近くに岩手から松阪さんが引っ越してきた時にはす
ごくわくわくした。

琴音は東京より北には行ったことがなかったからだ。

そして、立て続けに今度は関東のあたりからお隣へ引っ越してく
る人がいるというのだ。

しかし、その家族が引っ越してくる日に両親から頼みごとをされ
たのだ。

その帰り、何も考えず（考えていたとすれば、どんな人が引っ越
してくるかってことくらいだろう）歩いていると、あることに気付
いたのだ。

道に迷ったのだと。生まれ育った街だというのに、情けないった
らありやしない。

そして、とりあえず歩き続ければいいと思ってふらふらしている
と、道で転んでしまったのだ。

そして、そこを巽野さんに通りかかれた、というわけだ。
引っ越してくるお隣さんとも偶然に出会えるとは！

……などと思っていたのだが。

ひとつだけ問題があった。

しかし少年は苦悩する … 4（後書き）

ただ、遠いと遠い分更新が遅れてしまいそうであれですけど。

そして少女は兆しに気付く … 1 (前書き)

ここからしばらく琴音のターンです。

そして少女は兆しに気付く … 1

問題の内容など、言うまでもない。

巽野響輝である。

何を思っているのか掴みにくく、無愛想。

琴音は自分ではなかなか人とのコミュニケーションが上手いと思っ
ていたのだが……。

何かこの少年は自分と違うのだ。

笑いかけてもほぼ無表情か面倒そうな顔をする。

会話している時も鬱陶しそうにされるし。自分としてはただ友好
な関係——すなわちは友達——になりたいだけなのに……。

それもお隣さんである。何かの縁を感じずにはいられないではな
いか。

しかし、どうやっても巽野響輝は笑わない。

んでもって、ハーテッドを借りて、響輝について聞こうと思って
いたのだが。

「ねえ、ハーテッド」

『何だ、戌海琴音』

どうも電子音声って慣れないわね……。

「一つ訊いていい？」

『うむ』

友達になりたいのは山々だが、今はとりあえず……。

「どうやったら響輝君は笑うの？」

『脇腹をくすぐればすぐ笑いだすぞ』

「いや、そういうことじゃなくて」

まあ、その情報も悪くはないものだけだ。

『まさか貴様、響輝を普段の会話の中で笑わせようとも考えているのか？』

「うん、そうだけれど……」

何か問題でもあるのだろうか。こっちはありすぎて困ってるくらいだけれど。

『一つ言ってやるなら、諦めろ』

んなっ！

「……どうしてよ」

諦めろって何よそれ。響輝君だって人間なんだから、笑わないなんて変じゃない。

『この我ですらあれ以来、響輝がともに笑ったところなど見ていない』

……“あれ”？

「あれって何？」

『貴様には関係ない』

何なの、全く。

やっぱりペットは飼い主に似るのかしら。……冷たい性格とか。

「あれって何？何かあったの？」

『聞いて楽しい事ではない。それに、本人の了解を得ずに話すわけにはいかん』

うっ……。

確かにそうだ。自分の知らないところで自分の過去を話されては響輝もたまらないだろう。

『ともかく、貴様も諦めろ。響輝の母でさえ、元氣であつたらそれで良いと割り切っているのだ。赤の他人の貴様にどうにかできる問題でもあるまい』

何とも試作機の口調とは思えない発言であつたが、さすがにこれ

以上言及しても自分の人間性が問われるだけであらう。

本っ当、響輝君って解らない……。

そして少女は兆しに気付く … 2 (前書き)

前回までの合計文字数が9999文字でした。何かもつたいない
感があります…。

そして少女は兆しに気付く … 2

しばらく歩いていると、何か違和感を感じた。

いつの間にか商店街まで入り、もうすぐで学校に着こうとしていた。

そこまでは…いい。…だが、何かが違う。

少し辺りを見回して、気付いた。

昨日、用事（というかただのお遣いである）で行った雑貨店にシャッターが降ろされている。

…まあ、よくあることよ。定休日なんてもの、どこにだってあるじゃない…。

だが、そのシャッターが一部錆びており、何故か店の看板もなかった……。

いやいや、そこじゃない。

違和感の原因はそこではない。何か、この建物自体、建てられた時から誰も住むことがなかったかのように、生気もなく、周りの景色から落ち窪んで見えるのだ。

なにより、壁のペンキが剥けているのが目立っており、外壁にはひびまで入っている。

…そんなはずないよ。だって、この雑貨屋は一か月前に建てられたばかりなのに…。

何かあったとは聞いてないし、大体、昨日までちゃんと人が…。

そこで、シャッターに妙な落書きがあることに気付いた。

近づいてみると、錆びで同化していて見えなかったものが見えてきた。

そのシャッターにはどこその漫画に見るような、よくわからない文字が描かれていた。

それも、赤褐色のペンキで。

しばらくそれをじつと見ていると、その隣のラーメン屋から、その女将さんが出てきて、のれんを立てようとしていた。

「あ、あの…」

「あら、戌海さんとこの嬢ちゃん。どうかしたの？」

いつもは大抵明るい私が焦っているのを見て驚いたらしい女将さんが言った。

お隣なのだから事情も知っているに違いない。

「…ここ、閉まっちゃったんですか？」

降ろされた雑貨屋のシャッターを指さして言う。

女将さんはしばらくしてから、

「…そこは何年も前から誰も住んだことないわよ？どこかと間違えてない？」

と答えた。

「え…と、だったら、こ…この落書きってなんでしようね？」

シャッターを指さしたまま言ってみるも、

「…何も描いてないじゃない。勘違いじゃないの？」

とだけ答え、店の中へ入ってしまった。

私は休眠しているハーテッドを抱えたまま、しばらくその場に立ち尽くしていた…。

そして少女は兆しに気付く … 2（後書き）

短いですがご容赦を。次から視点変更で響輝君のターンです。

そして少女は兆しに気付く … 3

H I B I K I side

…さて。始業式の一ヶ月後に転校生（俺のことである）が来て騒ぎ立っていた教室を出て、朝教室に来る途中に密かに定めておいた中庭という昼食スポットで弁当を食い、授業終了と同時にハーテッドをかつさらい、俺は即、帰宅を試みた。

しかし、確かに俺より後に教室を出ていた戌海琴音が目の前の河原で草をいじっている（雑草で何かを作ったりしていたのだろうが、俺はそういうことに関して全く知識も興味も無い）のを見た時には、生物には絶対敵わないもの——すなわち天敵——が必ずいるという外国の学者の言葉を思い出した。

…まあ、即出たのは学校であり、途中の商店街でちょっと晩飯のおかずを買ったのだが、ぴったりその間に追い抜かれたと考えると、自分の運の無さと油断を悔いるしかない。

まあ、こいつが河原で黄昏時を満喫しているのが、石投げしているのが俺には関係ないわけで。

さつさと家に帰って寝たいので、軽くスルーして小走りに帰ろう……

『おい、戌海琴音』

…と思ったんだがこのボンコツ野郎がほざいたこの一言のせいで、今日は遅く帰ることとなった。

俺の昼寝ならぬ夕寝タイムを返せ。くそつ。

「あ……、響輝君」

はい響輝でございますが何か御用でも？俺は早く帰りたいんだが。
『我は呼ばないのか…』

気にするな、my brother of ポンコツ。こいつは
確か昼飯頃からああだった。

何を思ったか、はたまたゼンマイでも切れたのか、朝にハーテツ
ドを返しに来た時から何やら考え込んでいて、昼飯時にも俺を誘わ
ず、独りでどこかへ行っていた。

……俺を誘わず？いや、これは決して期待ではない。無論、俺も
健全な男子生徒の一員のつもりである。ここまで懐いた犬か何かの
ようにひつついてきていた奴が相手を誘わないのは常識的に考えて
いささか妙……。

いやいや何を考えているんだ俺は。

何にせよ、戌海琴音の落ち込み様はまるで昨日まで咲いていたヒ
マワリの花が急にしおれてしまったかのような感覚を覚えたわけだ。
わかるだろう？

まあ、一人で飯を食べられたし、俺としては友達わっしょいとか
をする気もさらさら無かったため、かえって気分が良かったわけだ
が、しおれたヒマワリを見てテンションが上がる奴などそうそう居
るはずもないわけで。

何かあったのだろうか。

……いや、仮にあったとしても俺には関係の無いことだろうし。

俺は言及はしない。される辛さを分かっているつもりだからだ

そして少女は兆しに気付く
… 4 (前書き)

そして少女は兆しに気付く … 4

夕日が横から照りつける。

横に並んで俺たちは歩いていたため、影は重なって道に伸びている。

沈黙には慣れている。

話しかけられないことも、一人でいることにも…だ。

「……聞かないんだね、響輝君は」

河原の土手がもう終わろうかというところまで歩いてきた時、ふいに琴音が呟いた。

俺は沈黙する。

「……ねえ、商店街にさ、ラーメン屋さんの隣にあった雑貨屋…覚えてない？」

…はあ。何を言ってるのやらさっぱりだ。

「商店街は通ったことはあるが、実際に寄ったのはついさっきが初めてだ」

そう言って、俺は野菜と肉が入った袋を見せる。

「……そう、だったね。……やっぱり私の気のせいかな」

「……何がだよ」

もう一度言おう。一体何を言っているのかさっぱりだ。

俺は今日初めて住宅街の外へ出たんだぞ。

「…ううん。何でもない。……それより、さ。今度フレンチトースト作ってあげよっか」

何でもないのかよ。じゃあ今までの黄昏ようは何だったんだ。こ

ろつと笑いやがつて。

……ん？トーストだと？

「……………」

「あ、あのー……響輝君？」

あー、全く。

「……………いない」

「えええ！？」

琴音が素っ頓狂な声を上げて俺を見る。

何だその顔は。何か変なことでも言ったか？俺は。

「……………最終手段があ……」

琴音はそう言いながらガクツという擬音が聞こえるくらい大げさに肩を落とした。

……何の最終手段だよ。

『うむ。最終手段だったのだから……』

いや、だから何のだよ。

おい疑似人工人格搭載小型端末（試作品）。説明しろ。

『いや、な。響輝。戌海琴音が、どうしてもお前のえ……がはっ！』

嫌な音を立ててハーテッドに直撃した琴音の学生鞆は、これまた乾いた音を立て、地面に落ちた。

いや、ハーテッドの大きさを考えると全身打撲に該当するか。

もつとも、それは「怪我した」ではなく「壊れた」というのだが。

……いやいや、そんなことよりもだな。ハーテッドに直撃＝俺の腰に直撃、なんだよな。

フェイタス必要になるだろうが。明日立てなくなったらどうしてくれる。

しかし、トーストは少し惜しかったな。まあ、母さんに頼めばいつでも作ってもらえる。

「ねーいいじゃない、作ってあげるからー」

「いらん」

「うう……」

日も落ちかけている。

とりあえず家に帰ってから、ハーテッドに何の最終手段だったのかだけ聞いただして寝るか。

そして少女は兆しに気付く … 4 (後書き)

導入終わらないです…長い…。

そして少女は兆しに気付く … 5 (前書き)

シリアスタイル突入なるか…？

そして少女は兆しに気付く … 5

夜。一日の役割を終えた日が落ち、月が仕事を始める。

——今夜は窓の外を見ない方が、いいよ。
久美が言っていた事を思い出し、ベッドから起き上がる。

窓枠に手をかけ、カーテンを掴む。
開こうとしたが、途中で止めた。

玄関から出ると、春の夜の…いわゆる生ぬるい風が頬を掠めていた。
った。

久美のことが気になったわけではない。コンビニにシャープペンシルの芯を買いに行かなければならなかったのだ。異論は認めぬ。

北区のこの辺りには住宅街がいくつもある。…が、何故か街灯が
少ない。

その上コンビニまで十五分ほど歩いてかかる。これは絶対に何か
間違っていると思う。

都心的な感覚だと不便なのだろうが、俺が前住んでいた町よりか
ははるかにマシだ。

しばらく歩いてT字路に差し掛かった時だった。

ずる……ずる……と何かを引きずっているような音が聞こえた。
何だ、よくある深夜のゴミ出しか……。
そう思って、T字路の右の方を向く。

暗くてよく見えないが、少し先にある十字路を誰かが横切っているようだった。

ずる……ずる……。

だが、ずいぶん大きな荷物をもっているんだな…。

そんなのんきなことを考えていた俺だったが、それが電灯の光に照らされた瞬間、そんな考えはどこかへ飛んで行ってしまった。…ああそつさ、デジャブだったよ。

「……………ッ！！」

何かを引きずりながら歩いていた“それ”は、黒いローブを着ていた。

それまでは、いい。ただの不審者で済むからだ。

だが“それ”が目玉も無い肉も無い、ただの骸骨だったとしたら、どうだろう？

いや冗談だ。なんという偶然か。いや、デジャブか？

まあ何にせよ、人は今の俺のように、全身を硬直させて動けないに違いない。

「……………」

ずる……ずる……。

音はしだいに遠ざかり、辺りには静けさが戻った。

「ついに響輝も頭がイッ——」

ハーテッドがゴミ箱に放り投げられる。

どさつと良い音がした。

俺は脱力してベッドに倒れこんだ。
時計は十一時を指していた。

それを横目に見ながら、だんだんと俺の意識は深い海に沈んでいった……。

そして少女は兆しに気付く … 6

翌日。

目を開けると。

「おはよう！響輝君」

…どうやら俺は早朝早々から酷い幻覚を見てしまったようだ。

もうひと眠りしよう。ああ、それがいい。

「ちよつと、ひーびーきー君、起きてよ！。布団被り直さないでー」

「邪魔だ、出てけ」

イエス、ナイス一蹴。

「うう……わかったわよ…」

肩を落としながらゆらりゆらりと部屋を出ていく琴音を見ながら、今日は部屋用の鍵を買おう、と俺は思ふのだった。

『何故我を投げ捨てたのだ』

「ああ、すまない」

『何故我をthrow awayしたのだ』

「ああ。すまない」

ハーテッドに言いたいことを言わせておき、前から話しかけてくる琴音を往しながら、家を出る。

——さて。俺の目がぶつ壊れているのなら、さっさと説明がつくのではあるが、その線は無いものとして、昨日の“あれ”について考えてみよう。

まず、だ。人間の身体構造的に骨だけで歩いたり立ったりなんてことは出来ないのだ。

そもそもこの時点であり得ない。……畜生、考え始めたら止まらないな。

(……どうせいたずらに決まってる。)

十分ほど歩きながら考えた結果がこれだよ。情けない。

……ある意味極論ではあるが。

「何が？」

横を歩いていていた琴音が反応する。

しまった、口に出してたのか……。

『いや、な。昨日響輝が変なものを見たというのだ』

おいこら端末。何しゃべってやがる。

「変な……もの？」

琴音は緊張したような面持ちでハーテッドの方を見る。人の腰をじろじろ見るな。変態か。

『うむ。それがな、何と……だ……』

ハーテッドの端末の音量を下げる。というかゼロにする。

「……響輝君、それはまずいんじゃないかな」

「問題無い」

ハーテッドも、俺の頭の中もな。何かの見間違いだったのだ。そういうことにしておこう。いや、しておくべきだ。

KOTONE side

その日の夕方、戌海琴音は商店街で立ち尽くしていた。

「嘘……」

琴音の目の前では、行きつけの八百屋だったはずの建物が古めかしく地面から伸びていた。

そしてシャッターには、赤褐色のペンキでよく解らない文字が描かれていた。

……何かがこの街に起こっている……？

混乱する頭の中で琴音が感じたのは、本能的な危機感だけだった。

そして少年は自認する（前書き）

多分これで導入は終わります。

そして少年は自認する

H I B I K I s i d e

次の日、俺こと巽野響輝は生まれて初めて仮病を使い、学校を欠席した。

松阪家の動向を探るためである。

……って俺は変人か。何をやってる。

まあ、気になったのだからしょうがない。何せ、自らあの骨は母だと言いぬかしたのだ。

直観とかそういうもの抜きで本当のことだと思う。俺も見えてしまっていることだしな。

外に出て隣家——松阪家の方である——に向かって歩く。

二階建ての一軒家には人気がなく、表札には本来書かれているはずの名が刻まれていなかった。

建てられて二ヶ月のはずの家の壁には若干ツタが茂り、二階の窓ガラスはひび割れていた。

「……………」

そして玄関の茶色の扉には茶褐色で文字が描かれていた。

……フランス語か？よくわからないが……。

いや……言い訳するわけじゃないが、俺は英語すらままならない。英語の成績は中の下だ。

外国語なんかできるわきゃねえ。俺は生粋の日本人だよ。畜生。

まあともかく、これはどうしたことだろうか。

新家のはずが何十年も経ってしまったかのような古めかしさを漂わせている。

あの家族は引越したのか？

……いや、そんな話は聞いていない。

結局、夜になっても父親の出勤している姿を見ることもなく、無論、松阪久美の姿を見ることはなかった。

「はあ……」

夜の生温かい風が横をすり抜けていくのを感じながら、俺はため息をつき、ゆつくりと月を見上げた。

今日はほぼ丸い月。うん、明後日辺りには満月になるだろうな。

それで、だ。その丸の中を何かが通っているのだが……。

「……………」

実際に宇宙空間を飛んでいるわけでは勿論ない。

はるか上空を妙な色で光りながら“それ”は飛んでいるのだ。

細長い形状。羽のようなものは付いていないが、ひれのようなものは見える。

……要するに魚だった。確か深海に棲んでる長いやつだ。

はるか下から見上げる俺には目も向けず、“それ”は尾びれのよくな長い部分を揺らしながら飛……いや、空中を泳いでいる。

……何て言ったか、リュウグウノなにかっていう巨大魚だ。

だがどうして魚が飛んでいる？

……これはどういうことだ？

本日二度目になるであろう自問自答を頭の中で繰り返す。

俺の脳内だか、ボキヤブラリーだかが全力をもって選挙のような慌ただしさで走り回っているものの、答えは永遠に出そうにない。信じたくはないが、どうやら俺という人間は新しい街に引っ越して早々から、面倒なことに巻き込まれてしまったらしい。

信じたくはないが……な。

夜風にさらされる体と核弾頭並みに爆発寸前の頭を抱えながら、おそらくそろそろ充電が終わって電子な音声を鳴らすであろうポンコツの話し相手をするため、俺は足早にその場から立ち去るのであった。

されど変化は訪れる
… 1 (前書き)

されど変化は訪れる … 1

一日は、まず太陽が地平線の彼方から昇ってくることから始まる。そして今俺は、その瞬間に立ち会っていた。

何故かと人に聞かれれば、俺はおそらくこう答えるだろう。

徹夜したからだ……と。

徹夜と言えば、テスト前の学生の最終手段でもあり、自らの体をも傷つける諸刃の剣というべき存在だ。

……そう、今日は転校早々の生徒にとっては暗闇から重火器をぶっ放されているかのような苦しみを味わう五日間、すなわち、中間テストである。

ダイニングに母の姿は無い。今日から北海道の方へ行く仕事が入ったらしい。数日は帰れないそうだ。

徹夜していた学生を見捨てて休眠しているハーテッドをサブバッグに押し込み、トーストを焼き、目玉焼きを作り、牛乳瓶のふたを開ける。

それらを胃に流し込んで消化液に任せ、俺は外に出た。

そして気付く。今日は戌海琴音を見ていない。

あの絵に描いたような馬鹿が自重するはずもあるまい。きっと学校に着けば、フリスビーをとった犬か何かのように話しかけてくることだろう。

……だが、その日戌海琴音が俺の前に姿を現すことは無かった。

『空虚だな』

河原に座ってぼうつとしていると、ハーテッドがお得意の電子音声で語り始めた。

「何が」

サブバッグの中で語るな。シユールすぎる。

『久しぶりに会話の無い生活を空虚に感じたのだ。今まではそれが日常だったから余計にな』

まわりくどいな、畜生。

「要は、戌海がいないから静かだと言いたいんだろう？」

『そうとも言っ』

やれやれだ、全く。

渡り鳥は一時滞在中の場所に居た者に深入れすると、飛び立てなくなっちまうんだぜ。

『別に深入れしているわけではない。貴様もそうであろう？』

まあ確かに。毎週来るパン屋とかが急に来なくなったら、誰だって空しくはなるだろうよ。

『見舞いにでも行つてやれ』

「行つてろ」

面白そうにしているハーテッドを持ち、河原を歩きだす。

そつえば、部屋用の鍵を買ってなかったな。

……明日でいいか。

されど変化は訪れる … 2

KOTONE side

戌海琴音は参ってしまったていた。

一体何が起こっているのか。

自分の記憶違いの可能性を含めても、不自然な点が多すぎる。

今まで確かにあつた建物や居た人が消えている……。

そして周りの人はそれを知らない……。

ほかの人が知らないことは昨日確認した。

学校でクラスメイトに聞いて回つたからである。私の少しただならぬ雰囲気には友達は驚いていたが、ちゃんと話してくれた。

元からあの場所に八百屋など無い……と。

私の勘違いなのではないか……。

そこまで徹底的に否定されると本当に元から八百屋など存在していなかったと思ひだしてしまうが、そこで周りに流されるほど、私のメンタルは弱くない。

とはいえ、さすがに頭の中を整理する時間が欲しかった。

今まで一度も学校を休んだことのない……と言えはあげさだが、滅多に休んだりしない私を気にかけ、担任の先生が電話をかけてくれた。

「響輝君、何してるかなあ……」

私が欠席したのを気にかけていれば申し訳ないが、

……無いか。無いわ。

そう思った時、開け放された自室の窓からひゅんっと何かが飛び込んできた。

『響輝なら家で漫画を読んでいるぞ。テスト期間中だというのに、情けない限りだ』

……。

「きゃああああああー！」

何故かベッドにハーテッドが転がっていた。今飛び込んできたのか。

『うごはあつー！』

思わず投げ飛ばしてしまった枕とともにハーテッドが壁に叩きつけられた。

「あ……」

あー、へこんじゃったな、壁。

『あ……ではないぞ。確かにいきなり話しかけた我にも責任はあるが、……。まさか、ここまでの仕打ちを受けようとは……』

文字通り床に転がっているハーテッドが起き上がりもせずに言う。

「ご、ごめんなさい……」

『……まあ、構わんよ。それより、あの脳内ピーマンの代わりに訊くが、風邪でも引いたのか？』

ハーテッドが電子音声で問いかけてくる。転がったまま。

「……」

言ってもいいのだろうか。また、……これ以上否定されると、どうにかなってしまいそうなのだ。

『ククツ……。まあ、そういう時もある。何か悩んでいるようなら響輝に伝えてやっても良いぞ。ああ見えて意外に行動力があつたらな。あいつは』

“ あった……。 ” 過去形なところがいまいちしっくりこない。

『……少し話が過ぎたな。顔ぐらいいは見せに来てやれ。流しているように見えて、単に響輝は押しに弱いただけなのだ。』

窓から響輝の部屋のベランダに投げてくれ、というハーテッドをひょいと投げる。

されど変化は訪れる … 3

「……」

目が覚めた。どうやらいつの間にか眠ってしまっていたらしい。時間は九時を指している。開け放された窓の向こうの夜から、生温かい風が吹きこんできていた。

何というか、最近街の空気が淀んでいる気がする。

二階の自室を出て、一階に降りると、電話が鳴っていることに気付いた。

お世辞にも美しいとは言えない音調で「亜麻色の髪の乙女」を流している受話器を手に取り、耳にあてた。

…… 思えば、この時寝ぼけたまま電話の横を通り過ぎていれば、事はさっさと終わっていたのかもしれない……。

「もしもし……」

しばらく返事がない。

『…… 戌海か？』

男性の声だった。…… いや、この声には聞き覚えがある。

「…… 大柴君？」

大柴瑞彦。背は高めでイケメン。そして文武両道の言うことなしの優等生だ。

『ああ。なあ、お前、気付いてるだろ？』

…… つ。気付いている…… といったらもう、あの赤褐色の文字の事しか思い浮かばなかった。

あの不気味な印。自分の見た中では文字通り亡くなっていた物に

ついていた。

「……なっ、何が？」

『あの文字だよ。俺も周囲の奴に訊いたけど、みんな何も知らないし、そんな物は無いって言うんだ。多分限られた人間にしか見えな
いんだ』

「う、うん……」

自分のほかにも知っている人が居たのは嬉しかった。

ただ、何故か喜ぶことはできなかった。

『お前、気付いてるか？教室に来る生徒の数が減っていること』

「えっ……？」

しばらく絶句していた。

それには気付かなかった。いや、気付けなかったのか？確か自分の
クラスの人数は三十一人。

思い返してみれば、昨日行った時には二十人程しか居なかったよ
うな……。

……どうして気付けなかったのか。そんなことに気付かない程自
分が参ってしまったことに軽く衝撃を受けた。

『やっぱり気付いてなかったのか……』

やっぱり……？どういふことだろうか。何か思い当たる節でもあ
るのだろうか……。

『どういふことかはわからない。あの文字が他の人には見えないの
と一緒にさ。』

人が減ったり、……いや、元から居なかったことになったり。何
が基準かはともかくとして、今のところ俺の周りで気付いているの
はお前だけなんだよ、戌海』

大柴はそこで急に声をひそめた。

されど変化は訪れる … 4

『なあ、これから話し合わないか？』

大柴が声を潜めたまま言う。

「え？……」

『俺の兄貴がコンビニの支店の店長やってんだ。駅前のコンビニ。わかるだろ？』

決して入った時に流れる音楽が忘れられないあのファミリーなコンビニではない。念のため。

「今から……？」

『ああ。情報の巡りは早い方がいい』

「そう……だね」

駅前のコンビニまで行くのに二十分ほどかった。

……夜中の道路は怖い。

大柴はコンビニの前で待ってくれていた。

「よう。早く入ってくれ」

コンビニの奥にも通されると、弟に似てイケメンな兄と思われる人物が座っていた。

しかし、ゲームを片手に持っていて、こっちを見向きもしない。

……私の苦手なタイプだ。というか、よくこのコンビニ潰れないわね……。

「まあ、とりあえず座れよ」

椅子を渡され、ゆっくりと座る。

「あのさ、お前に確認しておく。奴らの特徴はわかっているか？」

「奴ら……？」

奴ら……。あの文字を書いたものことだろうか……？

「え？お前知らないのか？というか、見たこと無いのか？」

「嘘……」

「嘘じゃない。この街には夜に出るんだよ。化け物がな」

大柴の話はこうだった。

——数日前。

夜。

大柴は夜道を歩いていていた。

「ん……？」

前の道路を見ると、何かがそこを歩いていていた。

「何だ、よくある深夜のゴミ出しか。驚かせんな……。」

しかし、そこを歩いていたのは、人間ではなかった。

黒ローブを羽負った……骨。

そして、その何かはクラスメイトの一人を引きずっていた。

それだけのこと。そう、それだけ。

「あのさ、俺少し考えたんだ。奴らは獲物の感情を喰っているんだ。その引きずられていた奴は生気の抜けた顔をしていた。多分、魂とか、感情を吸われたんだと思う」

そんなこと唐突に言われても……。

私はしばらく何も言えないでいた。

されど変化は訪れる … 5

「でも、街の人たちはどうして気がつかないの？」

これはずっと疑問だった。なぜ、自分や大柴君だけが気付いているのか。

大柴は少し俯き加減に言った。

「多分だが、操作しているんだ、心を」

「心を……操作……」

「何かを“視た”り、異変を“感じた”りっていうことを出来ないようにしてるんだ。だから、麻酔薬みたいに感覚がしびれて、無気力になっていく」

……だけど、それは私たちが文字印が見える理由にはならない。

「……それは、わからない。奴らが完全じゃないだけかもしれないし、俺たちだけ体質とかがちがうのかもしれない。後、重要なことがもう一つある」

大柴君が少し語気を強めて話す。

「……絶対に街から逃げ出そうなんて思うなよ」

……“街から逃げるな”？

「どういうこと？」

「……無駄、なんだ」

無駄……。もう街から出られないということだろうか。

「いや、そうじゃない。街から出ることは可能だ。でも、一步外に出たら最後、記憶を消されるんだ」

大柴がお茶を一杯飲む。私は黙って続きを待つ。

「うちの学校の教師に英語科の有本がいるだろ？」

有本先生。文系のくせにがっしりした体格の英語教師だ。

「あいつ、市街から通っているけど、先週、急に休職届を出して帰っちまったんだ。でも、次の日になったら、何も無かったかのような顔して、学校に来てる……」

大柴は優等生だが、このように先生に対しても敬語を使わないという欠点がある。

「俺、休職届を出した日にあいつ本人に訊いたんだ。クラスメイトの一人が来なくなったんで、そいつの家に行ってたって。でも、有本はその三十分後くらいに、顔面蒼白になって帰ってきた」

「先生は……何か見たの？」

「多分、だけどな。一度この街の外に出たら、記憶をリセットされちまうんだ。“視る”ことのできる人間が奴らを見てしまつて、助けを求めて外へ出ようとしても、街を出ると、何が理由で街を出たのか忘れてしまう。有本がその日からいつもと変わらない表情で学校に来ていゐるってことは、“視る”こともできなくなってしまうんだろつな。」

「電話とか、メールは外に通じるの？」

大柴は少しだけ黙り、うつむいた。

無理……ということらしい。

「……………」

「たとえ街を出ても、奴らにとって不都合な記憶を消される。そして何も知らない状態になつて、戻ってくる。俺たちの気付かない間に、この街は完全に制圧されているんだ。あの文字は何かの印だろうさ」

「でも、その……大柴君の見た黒い……ローブを羽負った骨は、その生徒を引きずってたんだよね？普通は見えないのに、何かに触れることはできるのかな……」

大柴君は少しだけ考えて、

「……これも多分だけど、奴らは獲物を狩る時だけ、実体になるん

だ。物理的に接触して、そいつの負の感情を吸い取り、ついでに身体も壊すんだ」

と言った。優等生は頭の出来が違うんだな……。

認めずにうじうじしてた私と違って、よく考えてるなあ……。

されど変化は訪れる … 5 (後書き)

会話が多くなりそうです。

けれど所詮は人の内 … 1

しばらく部屋には静寂が漂う。

「みんな……、そうやって減られてくのかな……」

「このまま奴らのターゲットになるのを待ってたらな。だから、抗ってやるんだ」

「え……？」

大柴は端正な顔に笑みを浮かべる。この微笑でほとんどの女子を落とせるといふ。

大柴とのつきあいはそこそ長いから、もう慣れたけど。

大柴は右手をズボンの後ろからそこに挟んでいたらしいものを取り、ゆっくりとそれを見せてきた。

黒光りする重そうな回転式の拳銃。おそらく本物だろう。

「ニューナンプM60。38口径の警察官に配給される回転式拳銃だ。弾丸は五発しかないけど、予備の弾丸もあったし、戦力にはなる」

「それ、どこで……？」

そんな危険なものをどこで……。

「北区の端にある交番にも文字が描かれてあった。二日前にこつそり中に入ってみたら、くしゃくしゃになった警官の服と靴が床に落ちていたんだ。着ていた人間だけが消失したみたいにな。ホルスタ―もちゃんとあった」

忘れていたけど、確か大柴君はガンマニアだった。

「でも……、そんなもの、危険だよ」

「馬鹿野郎。奴らの前では法律も何も関係ない。お前は気付いてい

ないかもしれないが、この街の秩序は乱れきってるんだよ。実はな、昨夜、家の裏道を大きなサソリみたいな化物が這っていたんだ。だから、近づいて、二発、撃ってやった」

大柴君は手慣れたしぐさで回転弾倉を横に振り出すと、三つの弾丸が入っていた。

「倒した……の？」

大柴君はうなずいた。

「奴ら、実体化したらちゃんと肉体を持つらしい。だから、銃弾が通用するんだ。でも、死んだらすぐに消滅してしまった」

弾倉を収めた拳銃を、また腰の後ろに差し込んだ。

「なあ、戌海。商店街のはずれに鉄砲店があるだろ。あそこさ、一週間前くらいからあの店にも文字が描かれてたの知ってるか？」

私はうなずいた。

けれど所詮は人の内 … 2

通学路の途中にあるから気付いていた。

ウィンドウ越しに見えた、鎖に絡まれた猟銃。それぞれが威圧感を放っていた。

そこで、ようやく大柴君が考えていることに気付いた。

「まさか……銃を？」

「ああ。お前にも手伝ってもらおう。武器があれば戦うこともできる。散弾銃、ライフル、銃弾。それでここに立てこもるんだ」

「本気……？」

「サバイバルアクションの映画では、主人公は大抵立てこもって敵をやり過ごしてる」

大柴君は真顔で言った。

……みんな、参ってるんだな。

そう思ったが、こんなじわじわ浸み渡る狂気の中で平常心が保てるのは稀有だろう。

私だって、精神力には自信があるけど、一人じゃどうにもならない。

「奴ら……はどれだけ居るのかな……？」

「奴らは標的の一番トラウマにしているものに姿を変える。言ってしまうえば、この街に住んでいる人の数だけ奴らは存在する……と思う」

この街の人の数だけ……。

「それに、標的を殺しても、奴らは消えないらしい。その姿を変え

て、他の人間も襲う」

大柴君は立ち上がった。

「今は、奴らは夜にしか活動していない。闇の中に潜み、好機を待つ。でも、そのうち、昼間から白昼堂々と歩き始めるぞ」

そう言った時、店の方からガラスの割れる音がした。

続いて、低い、男の悲鳴。

「兄さん……！？」

大柴君が銃を手に掴み、店の方向に向かって駆け出した。
私も続く。

店内に駆け込み、辺りを見回す。

弁当のコーナー、お菓子のコーナー……。

レジのカウンターの方を見たその瞬間、身体が竦みあがるのを感じた。

けれど所詮は人の内　：　3（前書き）

こっからが本番なのです。

けれど所詮は人の内 … 3

出入り口のドアが開け放たれ、ガラスは粉々に砕かれている。

「……なんだ、これ……」

大柴君も、何が起こったのか解らないという風に、その場に立ち尽くしていた。

寒い。

身体が震えていることに気付いた。破壊されたドアから生ぬるい夜風が流れ込むが、店内の冷氣に押し戻される。

錆びた鉄を思わせる臭いが鼻をついた。

……血の臭い。

ぴちゃ、ぴちゃ……。

店内の奥の方から物音が聞こえてきた。何かをなめているかのような音。

身体が言うことをきかない。

足元を見下ろすと、地面をこすったような血の跡が奥に続いている。

数メートル奥の棚。こちらからは死角になっている、その奥の棚から、音は聞こえていた。

大柴君が血の跡を追って歩き出す。

「行っちゃだめだよ！」

私の声が聞こえていないかのように、朦朧としたような目で大柴君は歩いていく。

何が待っているかなんてわからない。でも、絶対良い事じゃないに決まっている。

それでも見ずにはられない。

これ以上この街の狂気に触れたら、もう理性を保ってられないのに……。

私は大柴君について歩いた。足運びが重い。

大柴君が棚の向こうの方を向く。

彼の肩がびくつと震えた。

おそるおそる大柴君の横から前を覗く。

視界に入っただのは、紅い海。

血の……海だ。

けれど所詮は人の内
： 4（前書き）

けれど所詮は人の内 … 4

その血だまりの中央には黒い物体が鎮座していた。
とぐろを巻いている長く、真つ黒な身体。

その身体にはメタリックな鱗がいくつも張り付いている。

蛇だ。真つ黒な蛇。その尻尾の先は時折なっている。

その頭部では白い牙が二本覗いている。

そして、その口は真つ赤に染まっていた。

蛇の化物は、その体軀で大柴君の兄の体にのしかかっていた。

制服を着たまま、血まみれの床に四肢を投げ出し、——しかも、

その頭は半分が齧りとられていた。

頭の横半分がギザギザに割れ、そこから頭骨やら、脳漿やらが覗いている。

化け物はそれを本来の蛇の性質を完璧に無視し、鋭利な歯で齧っていた。

時折その首をもたげ、その脳漿をうまそうに咀嚼していた。

そして、その紅い舌で床の血を舐めとる。

ぴちゃ、ぴちゃという音はこの音だ。

シャー、という音が化け物の口から漏れる。

おそらく、この蛇の化け物は大柴君の兄の恐怖から生み出された

ものだ。

けれど所詮は人の内 … 4（後書き）

短くて申し訳ありません……。

そして少女は明日を恨む
… 1 (前書き)

この作品には残酷な描写が含まれます。と書いたはいいいけれど、描写の上手下手は別問題。

そして少女は明日を恨む … 1

おそらく大柴君の兄は蛇が苦手なのだろう。ましてや、それが等身大になって自分を襲ってきたら、悲鳴を上げてしまうのは条理と言える。

私だって、あの高速移動昆虫『G』に迫られたら悲鳴を上げる。間違いなく。

「兄さん……」

力無く、呆けたように立ち尽くしていた大柴君が、右手の重みに気付いたように、その場でしゃがんだ姿勢をとった。

両手持ちでニューナンプを構え、弾の装填を確認する。

「……ちくしょうっ！」

発砲。続けざまに三発の銃声が店内に鳴り響く。

かち、かち……

残っていた三発の弾丸を撃ち尽くした拳銃が覇気のない音を立てた。

大柴君が前を見据える。

ゆっくり前に目を向けると、光沢のある“蛇”の胴体に三発分の風穴が空いていた。……素人の割に大した腕である。

その銃創から、赤黒い液体がドロドロと流れる。

“蛇”の頭部がカミソリのような斬齒の覗く口を大きく開けたま

ま、血だまりにどちゃっ、と落ちた。

明らかに死んでいた。“蛇”も、大柴君の兄も。

少し前方で大柴君が両手を床に付き、嗚咽を漏らしている。

心に不快な悲しみが浮かんできた。

……目の前で人が死んでいる……。

その現実には、私の心を執拗に抉ってくる。

「大柴君……」

歩いて彼の元へ寄ろうとした。

しかし、私の足は、その一步を踏み出そうとしたところでぴたりと止まる。

——シュル……。

衣擦れのような、革靴同士が擦れたかのような、音。

それが耳に入り、私は反射的に体を凍りつかせた。

背筋に寒気が走る。

まさか……。

大柴君も聞こえたらしく、視線を音のした方向に向ける。

シャー……、とつい先ほど聞いた、ため息のような音がする。

眼前の死んだそのものではない。その死んだはずの“蛇”の鳴

き声と同じ音は、頭上からしていた。

上を、天井を、ゆっくりを見上げる。

そして少女は明日を恨む … 2

——居た。

目の前の血だまりや噛殺死体、“蛇”の遺骸にばかり目が行き、それがあまりにも衝撃的で、あまりにも非現実すぎて、完全に死角だった天井に、それはいた。

蛍光灯が光るコンビニの天井にとぐろを巻き、その漆黒の身体を逆さにして張り付いている。

……“蛇”はもう一体いたのだ。

そう気付いた瞬間、全身に戦慄が走る。体が硬直して動かない。

“蛇”はその長い首をゆつくりと擡^{もた}げ、黄色の眼の輝く頭部を、膝立ちで真上を見上げている大柴君の方に向けた。

一体と一人の目が合い、その眼は大柴君をゆつくりと見据えている。

次の瞬間、“蛇”はその鋭牙の覗く口をありえない程大きく開け、流れるような動作で真上から、真下にあった大柴君の頭を飲み込んだ。

「……ん、ん、がつ——」

くぐもった声が聞こえる。“蛇”の口の中で、大柴君が苦しみの声を上げていた。

「そ……んな、嫌……、嫌だよ、こんなの……」

口は動く。しかし、足は動いてくれない。

大柴君が右手に回転式拳銃を握ったまま両手を振り回し、必死に抵抗している。

しかし、その四肢は、黄色の眼の光る“蛇”の頭部とワンプテンポ遅れて落ちてきた太い胴体に巻きつかれ、瞬く間に、床に組み敷かれた。

そして少女は明日を恨む … 3

“蛇”はゆっくりと頭を進める。

「……が、……やめっ……」

抵抗しようにも身体を組み敷かれては何もできない。
大柴君の身体はゆっくりと“蛇”の口にのまれていく。

唐突に、“蛇”がその二本の大牙を大柴君の両肩に突き立てた。
ぐさり、と牙が筋を引き裂き、肉を破り、恐らく胸部の中にまで達しているであろうことが見て取れる。

その衝撃に大柴君の腕は一瞬びくつと震え、抵抗を止め、力尽きたかのようにだらりと垂れる。

“蛇”が牙を抜く。鮮血が辺りに飛び散った。

「うっ……、がはぁ……」

まだ意識があるであろう大柴君が苦痛に声を上げる。

“蛇”は頭を進め、すでに大柴君の身体の半分近くを飲み込んで
いる。

ごっこん、と音を立て、右手から拳銃が落ちる。

そして、そこで“蛇”は動きを止めた。

「……嫌だ、……もうやめて、殺さない……で」
もつすすり泣くことしかできない。

自分の恐怖に反して、身体はちつとも動いてくれない。
逃げられない、眼を離せない、止められない。心臓が早鐘を打つ。
私はただ、目の前で繰り広げられる惨劇を見ていることしかできない。

しばらく動きを止めていた“蛇”がその胴体を縮めていく。
そして、じゅるる、ともう二度と聞きたくない程気持ち悪い音を立て、半分飲み込んでいる大柴君のの身体を吸い上げた。

「……………」

……感情を、吸われているのだ。

恐怖、死への畏れ。

もう大柴君は、糸の切れた操り人形のようにだらりと転がったままになっていた。

“蛇”は満足したように、その巨軀を大柴君の身体から退け、彼の体を飲み込んでいく。

……もう、助からない……。

そして少女は明日を恨む
… 4

そう感じて、絶望を感じて瞬間、張り詰めた糸が切れたかのように、自分の体が床に崩れ落ちた。

「逃げなきゃ……」

今更過ぎた。しかし、ここで殺されるわけにはいかない。
幸い足は動くようになった。

ゆっくりと後ずさり、破壊された扉が近くなったところで立ち上がり、きびすを返して店から飛び出そうとした。

しかし。

その足は再び竦んだように動かなくなった。

コンビニの出入り口、外側にも散らばっているガラスの破片の上に黒い影があった。

すぐにそれが黒衣であるとわかった。賢者が着るような身の丈ほどもあるローブである。

それに身を包んでいるのは、背の高い男だった。

彫りの深い顔に、落ち窪んだ眼窩、西洋系の血が入っているらしく、ローブの隙間から見える髪の色は、色の薄い金色だった。

男は店内をゆっくり見回すと、再び私の方を向く。

男の頬にゆっくり皺が刻まれる。

……笑っている。そう気付いた。

「やあ、同胞。気分は如何かな……？」

妙にエコーを伴った声が響く。

「私は、ずっとお前を捜していたのだぞ。……こんなところにいたのか」

いつの間にか男が目前に迫ってきていた。顔に奇妙な笑みを張り付けて。

何歩か後ずさると、後ろに扉があった。店の奥に続く扉ではない。『このトイレは従業員も利用します。清潔に利用してください』と張り紙が貼ってある。

急いでノブを回し、兎が巢穴に飛び込むかのような早さで中に入り、鍵を閉めた。

そして少女は明日を恨む
… 5

その中で膝を抱え、震える体を抑える。

足音が近づく。

「……なに、焦ることは無いぞ、同胞よ。事は始まったばかりだ」
声が響く。

「もうすぐお前は私のものとなる。その日が待ち遠しいな。……では、また遭おう」

ゆっくりと足音が遠ざかっていく。

足音が聞こえなくなり、辺りに静寂が戻ると、急に身体を脱力感が襲った。

意識が沈んでいく……。

いつからこうしていたのだろうか、膝を丸めたまま、ドアからかすかに差し込む日光に眼を覚ます。

重い足を動かして立ち、少し迷った後、ゆっくりとドアを開ける。

日が出てから間も無いのだろう。

やわらかい陽光が出入り口や窓から誰もいない店内に降り注いでいる。

そこで気付いた。昨夜

完全に割られていたはずのガラスがすべて元通りになっている……。

出入り口のドアのガラスに手を触れる。

……本物だ。まるで碎けていたのが嘘のようだった。

右の方を見る。昨夜あつた血だまりも、飛び散つた血痕も、そこにいたはずの人も……、居ない。

「……もう嫌だよ。こんなのって……」
膝をガクツと曲げる。

「大柴君……」

それでも少年は冷酷で
… 1 (前書き)

響輝君チエンジ。

それでも少年は冷酷で … 1

IKI

Side HIB

二重の意味で終わった。

……何がって？

言わずもがな。……そう、テストである。

『やはり、一夜漬けにも限界があったか。最終日の前日には途中で
気絶していたからな』

「起こせよ……」

見てたのかよ。俺はてっきり休眠してたのかと思っていたぞ。

『……まあ、そんなに平均を下回っていたわけではないのだろう？
進学校のテスト相手によくやったではないか。現代文とかで平均
よりもマイナスな点をほとんど返していたではないか』

そのすぐ後に英語で死んださ。あの時、俺はちやほやの法則の本
質を悟ったね。

『……それはお前が悪い』

「お前止めなかったよな。サポーターの癖に止めなかったよな」

そのせいで俺は大怪我したんだぞ。精神的に。点数的に。

『そのサポーターが不良品だったのだ』

「お前がな」

自室を出て、階下へと足を進める。

誰もいないリビング。誰もいないキッチン。

母は仕事が長続きしているらしく、まだ戻っていない。
親父は会社で泊まり込み中さ。単身赴任とも言っがな。

ピン……ポーンとチャイムが鳴る。

無視して弁当（冷凍食品と白飯）を鞆に放り込む。

玄関へ行き、靴をはく。

そして、ドアを開けると、五日ぶりに見る顔があった。

「おはよう、響輝君！」

戌海琴音である。

それでも少年は冷酷で … 2 (前書き)

僕のテストも終わりました。二重の意味で。

それでも少年は冷酷で … 2

中間テストの間休んでいたのが嘘のような元気さの戌海琴音を連れ、河原を歩く。

楽しそうに話しかけてくる戌海を往なし、ハーテッドが会話をつなぐ。

これが俺の『いつも』。変わることに無いはずの日常。そう、夜の闇に潜む謎のことなどまるで別世界の物語であるかのような……
平和。

時は過ぎ、夕方の河原。この景色にも、そろそろ慣れた。
いつものように後ろをついてくる戌海に適当にいなしながら、終わりの春の風を楽しむ。

「ねえ、響輝君ってさ」

「……何だ？」

日は既に落ちかけようとしている。

「……好きな人とか、いる？」

「……」

「……」

「……」

「……んん？」

「……居るわけないだろ。どう考えても」

「……だよ、そうだよ」

そう言つと、戌海はとてーと少し前に駆けていく。

……お前、高校生だろ。なんつー擬音出してんだ、ガキか。

また、今日も夜が訪れようとしていた。

『……いや、驚いた。まさか、いや、いつフラッグを立てたのだ？
響輝。おじさんに話してみなさい』

「誰だよ」

いや、俺は好かれるようなことをしたのか？

……してないな。ねえわ。

『いやいや、よかったな』

よくない、全然良くない。

好かれるとか、好きになるとか、そういうのは駄目なのだ。

俺の好きな人、慕っている人は居なくなる。

姉さんのように、いなくなるんだ。

そして、俺が放課後の教室に戌海琴音によって呼び出されたのは、
次の日のことだった。

それでも少年は冷酷で … 3

夕日の差し込む教室。

ドアをスライドさせて開けると、窓際が一番後ろの席に腰かけて、こちらを向いていた。

というか、何で来てるんだ、俺は。ここは無視するところじゃないのか？

……言い訳するわけじゃないが、放課後になると、自然と足がこの空き教室に向かっていた。本当だ。

「ねえ、響輝君ってさ」

戌海琴音が立ち上がり、夕日の方——窓の外——を視る。

「……一目惚れってしたこと、ある？」

一体何を言い出しやがる。

俺は万年彼女拒否中のはずなんだが、何か？

「私はね……、しちゃったんだよ。響輝君に」

「……」

何も言えない俺。

戌海は振り向き、ゆっくりとこちらに歩いてくる。

「響輝君のこと考えてるとね、ここがさ、痛くなるんだ。ギギ……」

擬音最悪じゃねえか。錆ついてんのかよ、お前の心臓。

戌海が俺の目の前に立つ。距離が近い、近すぎる。

「ねえ、響輝君」

「……………」

流せない。この教室の空気が…………、いや、俺の意識自体がだんだんと琴音に吸い寄せられていく。感覚が、俺の思考を妨げる。

「返事はいいよ。必要無い。…………ほら、私の眼を見て」

そう言うのと、戌海は両腕を俺の首の後ろに回してきた。

至近距離で琴音が俺を見つめてくる。

目を逸らせない…………。何だ？ この感覚。

…………身体が縛られていくような…………。

外から差し込む夕日をシルエットに、琴音のまるで椿の花のような紅の両目が俺の顔を見ている。

……………紅？

それでも少年は冷酷で … 4

……確か、いや、間違っていたら誠に申し訳ないんだが、日本人の眼の色は、黒色じゃなかったか？

……まあ、どうでもいいか、そんなこと。

……どうでもいいだと？ 何を考えているんだ、俺は。何だろう、だんだん思考がだるくなっている。

この教室の空気に酔う心が、意識が、だんだん沈んでいくような……。

微妙に朦朧としている俺を、戌海琴音がゆっくり抱きしめる。

「ほら……、良いんだよ？ 響輝君。もっと身を委^{ゆだ}ねて。そうすれば、楽になれるよ」

楽に……なれる……。

過去のしがらみ。今の日常。生きること。死ぬこと。

そのすべて。面倒くさい、俺の……人生。

「全て……忘れるの。響輝君のつらい思い出、マイナスの感情。そして……」

琴音が力を込める。

「……『響輝君』を、私が……貰ってあげる」

忘れる……か。

それも、いいな……。

この際だ。全て、投げ捨てて、忘れて、楽になっ
てしまおう。そ
うだ、それがいい。

それが――

「ね、全部、頂戴。辛かったこと、憎んだこと、攫
われたこと、お
姉さんのこと、犯人への憎悪、あの日、『響輝君』
を壊した 全て
を――」

姉さん……。

とても優しくかった……俺の、憧れだった人。

でも俺はあの日、姉さんを死なせた。

……殺して、しまった。

……そう。それは誰も知らない、俺だけが知る、
真実。
俺以外は誰も知らない……。

誰……知らない……？

……待て。待つんだ、俺。

じゃあなんで、俺の目の前のこいつは、俺を抱きしめ
ているこ
いつは……

……それを、知っている？

それでも少年は冷酷で … 5

おかしい。そもそも、俺は戌海に「姉が居た」ということさえ、言ったことは無いぞ。

……何かがおかしい。どう考えたっておかしいぞ。
まさか、いや……。

……こいつは、戌海琴音では、無い……？

恐怖は人の判断力を鈍らせるが、時に火事場の何とやらを発動させたりする。

急に力を取り戻した腕を振り、俺に絡みついている琴音を突き飛ばす。

「きゃっ」

大げさに尻もちをついているが、そんなことを気に留めている場合ではない。

「なっ、何？響輝君……」

「……………」

俺はいつもの表情で戌海琴音を見下ろす。

「……そう、怖くなったんだ。でも、大丈夫。その恐怖も全部私が――」

そして俺は、いつものようにそいつの言葉を流し、こっつ、一言――

句はつきりと、言った。

「お前は……誰だ？」
……と。

「……誰って。何を言ってるのかな、響輝君。私は『戌海琴音』だよ、見てわからない？」

「俺の知ってる戌海琴音は、俺の過去のこと、姉さんのことも、何一つ知らないはずなんだがな」

“戌海琴音”が少し眼を見開く。

そして床に手をつき、ゆらりと立ちあがった。

「……そう、か。言ってなかったんだ。……残念」
何が残念なのかさっぱりだな、全く。

「……はあゝあ。でも、悪いのは響輝君だよ」
そう言つと、“戌海琴音”はスカートから埃を払った。

……俺が悪いだと？ 何のことだ。
「『異野響輝』の記憶は歪みすぎてるもの。おかげで、墓穴を掘っちゃった」

「さあ」
俺はそう言い、ようやくまともに働いてきた脳味噌で思考を始める。

それでも少年は冷酷で … 5 (後書き)

まさかの恋愛展開!?

…… なわけがないっ (キリッ

それでも少年は冷酷で … 6

……こいつは戌海琴音の形をした“何か”だ。
では、なぜこいつは俺を狙った？

……おそらく、狙いやすかったから。

俺程に世間で孤立しているやつもそうはいないだろうしな。

こいつは、あの丁字路で見た“黒衣”や隣家を亡くした“骨女”
とおそらく同類。

学校に居る間はハーテッドと雑談ばかりして、ほとんど周りを気にかけていなかったが、

思い返してみれば、学校へと登校してくるクラスメイトは日に日に減っていた。

担任も日を追うにつれ、だるそうな表情になっていたし。

商店街の中にも、テスト期間の間にずいぶんとあの赤い文字の書き込まれたシャッターが増えていた。

俺が、周りを拒絶していたから。見ていなかったから。

何もしなかったのだから。いつもの様に。

『いつも』ではない中で『いつも』のように振る舞っていた、俺の所為^{せい}。

俺がこうして今、わけのわからない状況に立たされているのも、俺の所為。

後ずさり、ドアをスライドさせようとするが、ドアは空間に固定されたかのように、ぴくりとも動かない。

“戌海琴音”がその紅の眼で俺を見る。

「そう。響輝君は本当はわかってる。この今も、あの日のことも、全部、自分が招いたことだって、分かってる」

そうだ。俺はわかっていた。姉さんが誘拐される現場を見た時、隣家から人が居なくなっているのを確信した時。

あんな、こんな様なことになるってわかっていたのだ。

……なのに何もしなかった。知らないふりをした。殻の中に閉じこもっていた。

「ね、分かってるでしょ。何もしなかった響輝君は、こうして私に食べられちゃうの。めでたし、めでたし、だよ」

ああ、そうだな。何もしなかった俺は、孤立していた俺は、真っ先に殺られちゃうんだろうよ。

……でもな。あいにく俺は、不可抗力で一人、自らの意志で一人。今までに二回も、人を殺しちまっている、狂った野郎なんだぜ？

それでも少年は冷酷で … 7

“戌海琴音”がゆらり、ゆらりと狩りをする時のカマキリのように身体を揺らしている。

「今、響輝君が最も恐れているのは、自分しか知らない罪を身近な人に責められること。真核の情報を占有して、他の事では一切揺るがないその意志も、それだけで…… もろく、崩れる」

その通りだ。では聞こう。その崩れた先には、何が潜み、息を殺していると思う？

「……ふふふ。逃げられない響輝君には、もう何もできないんだよ」

“戌海琴音”が制服のポケットから大型のナイフを取り出す。

物騒な奴め。今朝……いや、昨日、俺にその紛い物の姿を見せたその時から、持っていやがったのか。

……いや、わけの分からない呪文とかで瞬殺されるよりはまだまだしか。

まだキーは残っている。まだ、冷静に考えられる。

「……驚いたよ。響輝君はよっぽどなイレギュラーなんだね。“私たちが”に最初の方に襲われる人間は、すぐに死んじゃう…… もろおい、モノなのに」

“戌海琴音”が今度は自らの腰の後ろに手を回し、そこから、一

本の少し刃こぼれた、

中華包丁を取り出した。

あの刃こぼれ具合、あの時の……。

「……………っ」

「あははははははは！ ほら、よく見てよ。コレでしょ。響輝君の歪んだ記憶の中でも恐怖の対象になってる、包丁」

くそっ。

また、身体をけだるい感覚が襲ってくる。

「そうだよ。コレは、あの時のまま。お姉さんの命を奪った血濡れの凶器」

再び意識が朦朧としてくる。心が“琴音”の元へ吸い寄せられていく。

それでも少年は冷酷で … 8

やはり、俺は復習を果たした後でさえ、姉さんのことを吹っ切れていなかったらしい。

包丁とナイフの二刀流になった“戌海琴音”が二本の刃を交差させる。

「さあ、響輝君……、死んでっ！」

片膝をついている俺に向かって、“戌海琴音”が突っ込んでくる。

何とか右足を動かし、姿勢を低くして、足払いをかける。

「……っ！……」

完璧に油断していた“戌海琴音”が足を滑らせ、ジャンプして俺の真上を通り過ぎようとする。

とつさに身体を倒した状態で反転させ、左足で真上にある“戌海琴音”の腹を蹴りつける。

「がっ……」

“戌海琴音”がうめき声を上げる。

その左手に握られている中華包丁の柄をその手の上から握り、全力で手から抜けさせる。

“戌海琴音”が教室のドアに叩きつけられている隙に、窓際へ退く。

これで、両者の位置が入れ替わった形となった。

「くくくくくくくく……」

“戌海琴音”がドアに手をかけ、ゆっくりと起き上がる。

こちらに包丁。あいてには大型の……おそらくサバイバルナイフ。

「くくくくつ……。面白いよ、面白い人。だから、響輝君のこと、だーい好き！食べちゃいたい！」

「俺はお前みたいな奴なんざ、大嫌いだっ！」

再び駆けだし、“戌海琴音”向かって、すぐそこにあつた机を投げ飛ばす。

「ふふっ」

“戌海琴音”はその机を軽々と飛び越え、再びドアの前に後退する。

……人間じゃねえ。

それでも少年は冷酷で … 9

もう不意打ちは使えない。だが、死にたくもない。

眼を閉じる。

……考え直せ、巽野響輝。思い込むんだ、いや、思い出せ。

目の前にいるこいつが、殺したんだ。こいつの同類が、松阪さんを殺したんだ。

あの日の自分を思い出せ。あの忌々しい男を殺したあの時の、頭の中が沸騰するような感覚を。

殺せ。

殺せ。

コロセ……。

目を開ける。目の前に居るのは、敵。斃すべき、敵。

「……………」

目の前の目標をにらみつける。

「……………」

“戌海琴音”が面白そうに微笑を浮かべ、小首をかしげる。

「……を、返せっ!」

その瞬間を待っていたかのように、身体がふっと軽くなる。

殺せ……。

ツーステップで距離を詰める。体重を乗せて包丁を振り下ろす。

ガギッ……

サバイバルナイフと包丁の刃が交差する。

殺せ……。

「あはっ、あははははははは——」

“戌海琴音”のキーの外れた、狂ったような笑い声をBGMに、
二つの刃がぶつかり合う。

俺が叩きつけ、“戌海琴音”がナイフで受け、

“戌海琴音”が裂き、俺が包丁や椅子で受ける。

それでも少年は冷酷で … 10

何回もそれを繰り返していると、さすがに身体が疲れてくる。

“戌海琴音”の方は息切れさえしていない。畜生め。

「——でもね。ここで“私”を斃^{たお}しても、もう遅いんだよ」

「……何だと？」

話しかけてくるとは意外だった。

一歩退き、体を休ませる。

「もうすぐこの街は外界から遮断される。この街で生き残っている人は、じっくり、じっくり、浸食されていく」

……この街が閉鎖状態になるとでも言うのか。

「そうだよ。閉ざしてしまえば、もう“私たち”を止めるものはなくなる。街は化け物だらけになるわ」

袋のネズミ……というわけか。

「よくわかっていているね。その通りだよ」

そう言うのと、“戌海琴音”はけらけらと笑う。

「お前は……何なんだ……」

「私？ 私は“私”。“私”はあなたの一部。あなたの恐怖が生み出した、幻影」

俺の一部……。

さっきこいつは、俺が最も恐怖しているのは、身近な人に真実を知られることだと言った。

……つまり、何だ。つまりこいつは、妄言で俺を惑わし、この教室で意識をじわじわと奪っていき、その言葉で俺を絶望に墮とそうとしていたのか。

いや、そんなことよりも、俺の『身近な人』、それが母でも親父でもなく、戌海琴音だったことに驚きだ。

俺はアホか。そんなに戌海に思い入れがあったのか。

……まあ、そんなことはどうだっていい。

身体の疲労と相まって、自分の殺意が倦怠な感覚に浸食されていく。

気を抜けば、これに動きを止められるのか。

……くそつ。八方とはいかないが、四方くらいは塞がれた気分だ。

あはははは——とまた“戌海琴音”が虚空に向かって狂笑を放つ。

それでも少年は冷酷で … 11

くそ……。一応五年くらい古武術の道場に通っていたから、少しは自信があっただんだ。

相手は人間じゃない。こちらの勝率なんて、いとも簡単に0をかけて無にしてしまう。

再びサバイバルナイフを構えた“戌海琴音”が駆けだす。

……かと思ったが、“戌海”はその足を止めた。

「……そろそろ時間切れになるかな。当初の目的も外れちゃったし、まあ……いいか」

“戌海琴音”が肩をすくめる。

勝ち逃げかよ、畜生。

「大丈夫。心配しなくて、またすぐに遭えるよ。私は響輝君の恐怖なんだから。それに……」

“戌海琴音”の体が銀色の砂になって、横へ流れていく。

「……この街の人はもう支配者の包囲網からは、逃れられないんだ
よ……」

最後に頭の中にエコーを伴ってそう声を響かせると、それを形作っていた砂は消えてゆき、

ふと気が付くと、カラスの鳴き声が響く、いつもの夕方の教室が戻っていた。

体をどつと疲労感が襲う。

……前言撤回だ。あんな“奴”とは二度と会いたくない。思う存分、勝ち逃げしてくれ。

思い自分の体を引きずり、洗面所に行き、思いつきり吐いた。

ああ、さらば俺の昼食（冷凍食品と白飯）。

……二年前と同じだ。あの後もこうだった。

俺だつて理解はしていたし、小説やら本で見て知っていた。復讐の後には何も残らない、残るのは虚無感だけだ……と。

まさしくそうだった。でも、止められなかった。刑務所から釈放され、のうのうと道を歩くあの男を見た瞬間、心的負荷のリミッターを悠々と超える嫌悪感と殺意が身体を支配したのだ。

姉さんの敵^{かたき}を殺した後、俺は近くの溝川に向かって吐いていた。

“戌海琴音”の前では二人殺した、などと強気でぼざいていたが、人間なんて本質的にはそんなものだ。心や感情なんてものを持ったばっかりに、同種の命を奪うだけで、自分に不快を示す。死にたくなる。

……それでもこうやって片手に握った中華包丁を捨てないのは、
生き物の性^{さが}なのか、はたまたいまだつつすら心に残る自らへの嫌悪
感の成せる業か……。

そして始まる逃避行 … 1

『この世界が歪んでいると云うのなら、まず自分が歪んでいることに気付いた方がいい』 - 響輝 -

。

下駄箱あたりに置き去りにしていたサブバッグを肩にかけ、その中のハーテッドに先ほどの一部始終を話しながら校庭を歩く。

自分にとっては短い出来事でも、話してみると案外短いもので、校門をくぐるころには“戌海琴音”が消えるところまで話し終わっていた。

『……ふむ』

「……………」

深くは聞かない。こいつの良いところNo.1だ。これは自信を持って言える。

真に理解力のある良い奴ってのは一を聞いて円周率を一万桁まで吟味できる奴のことを云うのさ。

極論だな。

『……だが響輝』

「何だ？」

言っておくが、俺はこの街から逃げようなんて事は細胞核の半径ほども考えていないぞ。

今回のことで改めて理解したからな。俺は生きてはいけない。

『そうか。……まあ、復讐を果たした時点でお前の人生は九割終わっていたからな。どうせこの際だ。冥府の果てまでついて行つてやる。……だが、今はその話は置いておこう。私が言いたいのは、戌海琴音のことだ』

シグナルが点滅する。

……“戌海琴音”のことだと？

『いや、人間の方の戌海琴音だ。昨日我々の前に現れた戌海が既に偽物だったのだ。とすると、本物は中間テスト以前から学校から休んでいたことになるぞ』

それもそうだな。本物はまだ家で寝込んでいるのか、それとも……
「もう襲われて死んでいるか、だな」

『ああ。その可能性も否定できない。姿形が全く同じ偽物が本物と取って替わる最短の方法は、本物を消すことだからな』

the theory of replacement、
とか。今日授業中に辞書を見て正解だったぜ。

『勉強しろ』

「うっさい」

北区に入り、住宅街に差し掛かる。

無論、自宅に向かっているのだ。夕食を食うために。

そして始まる逃避行 … 2

“ 戌海琴音 ” はもうすぐこの街が閉ざされると言った。

例え今生きていたとしても、いずれは殺されるのか、戌海も。

……………。

右腕についている傷跡を見る。

自らの罪をごまかすためにガラスの破片でつけた傷の跡。

制服を脱ぎ、黒いＴシャツに灰色でどこぞの飛竜らしきものをプリントされたものを着、下には黒いズボンを履く。

『 何をしているのだ？ 』

「 窮鼠が猫を噛み千切る準備をしているところだ 」

『 …… 全く。殺意にコンプレックスがあるくせによくやる …… 』

腰にポーチを巻き、水、カロリーがメイトなあれを二箱、そして中華包丁と、親父の書斎になるらしい部屋に置いてあった荷物まさぐり、親父が専門店で買ったくそ高いバタフライナイフを入れる。親父と母さんが結婚して間もない時に買ったらしい。新技術を思いついて親父が実業部のトップに上り詰める一年前だったとも聞いている。

玄関を開けて外に出た。

夕日が傾きかけている。

この街が閉ざされるのは恐らく日没後だ。
では、その前に……。

「戌海」と彫られたプレートを横目に、俺は隣家のインターホンを鳴らした。

……返事は無い。

ドアのカギは開いていた。恐らく偽物の仕業だろう。

そして始まる逃避行 … 3

隣家の中に入る。

ダイニングにも、キッチンにも風呂場にも、……誰もいない。
やはりもう……。

二階へ上がる。俺の家とほとんど対になっているのなら、このドアの向こうが戌海の部屋のはずだ。

『不法侵入……くはっ』

お前は黙っている。

ガチッ……

開かない。鍵がかかっている。

まだ中にいるのか……それとも、骸と化したか。

軽く二回ノックする。

か細い声が聞こえた。

「……誰？」

紛れもない、戌海琴音の声である。

「おい、戌海」

「……響輝君？」

少し声に明るさが戻った。人の感情の謎のメカニズムである。
「出てこい。行く所がある」

「……嫌だよ」

「……何だと？」

「もう嫌。お……ば君も、お母さんも、みんな、みんな……」
あの偽物女。俺に勝ち逃げしておきながら、やることはやってたのかよ、くそつ。

……もう壊れてしまったのか？なら、仕方ない。

「……じゃあ、いい。俺は行く」

そう言って、振り向こうとする。

「……それも嫌。一緒に居て」

開かれたドアから伸びた戌海の腕が、俺の腕を掴んでいた。

ドアの方に向き直る。

「何があつた？」

「……知らないよ。でも、下から悲鳴が聞こえたから、多分……」
母親は偽魔女にやられたか。

「……行くぞ。迷っている暇はない。もうすぐ街は閉ざされる」

「行く……って。街を出るの？」

「そうだ」

「駄目だよ！」

は？

そして始まる逃避行 … 4

戌海琴音が続ける。

「街を出ても駄目なんだよ。記憶を消されちゃつらいから……」

……おいおい。もしやこいつ俺より内部事情に詳しいんじゃないだろうな。

ドアの開かれた隙間から戌海琴音がひょいっと顔を覗かせる。

……少しやつれていた。胸が痛むな。こういう顔はあまり見たくない。

「だから、どこかに閉じこもつ……」

と言いかけ、戌海がびくつと顔を硬直させた。

……いまさら俺がイライラしていることに気づいたか馬鹿め——
「——響輝君、後ろ！」

——ザシュ。

そんな音を聞いた刹那、左腕に激痛が走った。

「つぐあ……」

痛みに耐えながら後ろを振り向く。

暗がりに並ぶ、八つの赤い単眼。

……前脚（第一歩脚といったか）から血——俺の血——を滴らせ、
一匹の黒い蜘蛛が階段の壁に張り付いていた。
思わず左腕を抑える。

……裂かれている。傷は浅いものの、血が流れていた。

「響輝君！」

戌海が泣きそうな声を上げる。はつきり言ってるさい。

……あの偽魔女め。使い魔がいるのならそう言ってくれ。おかげで、追いかけてたのに気付けなかつたろうが。

ヒュンツという音と共に光っていた単眼がその軌跡を残しながら移動する。

速い。だが、相手を一撃で殺すほどの力はないらしい。やろうと思えば最初の一撃で俺を殺せただろうしな。

そして始まる逃避行 … 5

……ただ問題なのは逃げ場がないことだ。ここで相手をするしかないな。

ポーチからバタフライナイフを取り出し、刃を開く。

「来い。相手してやる、蜘蛛野郎……おおっ!？」

格好いいこと言おうとしていたら、いきなり部屋のドアが開き、中に引き込まれた。

思わず床に尻もちをついてしまう。

「……何しやる」

見上げると、戌海琴音が泣きそうな表情で立っていた。

「駄目だよ、響輝君。あんなのと闘ったりしたら……怪我しちゃうよ」

もっしてるっつの。

戌海がはつとしたような様子で筆筭をさぐり始めた。

そして、中の箱から包帯と消毒剤を取り出す。

「傷、見せて」

しびしび腕を差し出す。

消毒剤をつけ、肘のあたりにある傷に包帯を巻きつけられる。血は止まりかけていた。というか、痛い。

どん、と部屋のドアに何かがぶつかる音がした。どうやらドアを破ろうとしているらしい。

立ちあがって近くにあった本棚をずると押し、ドアの前に置く。これではらくは大丈夫だろう。

「ちよつとどけ」

戌海の部屋の窓を開け、下を見る。

すぐ下に、一階の窓のための雨よけが付いていた。その先に、高めの塀。

……なんとか脱出はできそうだな。

改めて戌海琴音に向き直る。

休んでいる間はほとんど寝ていたらしく、水色っぽいパジャマを着ていた。

「はっ……」

戌海が慌てたように自らの風貌を確認する。

「ひ、響輝君。ちよつと後ろを向いてもらえるかな」

戌海が引きつったような笑顔でこちらを見た。心なしか顔が赤いのは俺の気のせいだと信じたい。

「というか、何でだ。」

「……いいから、後ろ向いてて！」

「……へいへい。」

部屋の隅っこに行き、角の方を向いて体操座りをする。一度やってみたかったのだ。

『おい、響輝』

この期に及んで何の用だ、このポンコツ。

『……さあ、今すぐ後ろを向くのだ。さあ』

お前は変態か。さすがの俺でも衣擦れ音で着替えてるって気付く
わ。

『……チッ……』

チッ………て何だ、チッて。ついにお前は変態ロボにまで成り下が
ったのか。さすがにフローしきれないぞ。

そして始まる逃避行 … 6

何に時間をかけているのか、異様に長い待ち時間に、そろそろ夢の世界へ直行しようとしていた俺の意識は、戌海琴音の呼びかけにより、ようやく引き戻された。

「ねえ、響輝君も出るんでしょ、街を」

戌海が私服に身を包み、すぐるような目で俺を見る。

「……まあな」

……やめてくれ。そんな安心したような顔をするな。後が辛いだろう。

いまだにどんどんいつているドアを無視して、窓枠に手をかける。念のため手は離さず、雨よけの上に、足を乗せる。

少し不安定だが、大丈夫だろう。

俺が先に行き、戌海に手を貸す。

多少は苦戦したものの、五分後には二人ともが地面に降りることができていた。

「うーん……」

戌海がなるほどこれに時間をかけていたのか、整えたらしい髪に残っている跳ね毛をいじくっている。

「これでも被ってる」

ポーチから黒い帽子を出して戌海の頭にかぶせる。

「あ、ありがとう……」

どうして女は髪の毛なんかを気にすんのかね。俺にはさっぱりわからん。

俺の家に行き、車庫の奥から自転車を押してくる。

……なんて言ったか、マウンテンバイクには劣るものの、車体とタイヤの頑丈さを売りにしていた自転車だ。荷台には一見二人乗りと勘違いしてしまいそうな板が金具の上についている。まあ、これも強度を上げるためらしいが。

「荷台に乗れ」

「うん……」

間違った使い方である。まあ、この際気にしないが。

しかし前も後ろも塞がれて … 1

夕闇に染まっていく空を見ながら南西に向かって自転車を走らせる。

ゲームの主人公や、未来からアイルビーバックしてくるロボットのようにバイクで駆け抜けたりなんて芸当は一介の高一男子にはできないのさ。不条理だと心から思うね。

がらんとした道路を自転車で走る。

今のところ徐々に暗くなっていく街には、……車がー、二台しか走っていないかった。

無意識なのか、意識をしているのにそれを無視しているのか、どちらだったとしても、車が居ないのは好都合だ。

奴らがいる気配もない。

巨大蜘蛛が後ろから大量に這ってきたり、偽琴音が笑みを浮かべてナイフを投げしてくることもなかった。

——西区。

この街は四区にわかれている、というのは先述したとおりなのが、その分け方は少々いびつなのだ。

ぴったり西から来たまでを北区、西から南西にかけてを西区、南西から南東を南区、北から南東を東区、という風になっている。

この街の外は潮の流れの関係からか、南西から西にかけてが長い入り江の様になっており、西区から西の方へ街を出るには、入り江の上に架かっているウェストブリッジを抜けなければならない。

北からも山伝いに外へ出ることはできるが、西区から出た先の方

が交通網がしっかりしている。

本当なら北からさっさと逃げればいいのだろうが、街を出ると記憶を消されるという話が本当なら、こちらの方が幾分か安心だ。

とまあいろいろな理由を含め、俺と戌海を乗せた自転車は西区に入り、ウェストブリッジに向かって道路を走っていた。

「……つく、えぐっ……」

のだがおかしいな。どうして俺の後ろから泣きじゃくる声が聞こえるのだろう。

いや、何となく解っていたさ。何かこいつが「一週間くらい前にね……」と後ろで話し出したあたりから、鬱話が始まるのは分かっていた。

……ふむ。どうやら俺やこいつの他にもあの赤文字が見える奴が居て、そいつと話しにいったら、そいつが無惨に殺されてしまった、と。

というか、よく生きてるな、お前。

しかし前も後ろも塞がれて … 2

「響輝君は何か見たの……？」

……言えるか。偽物のお前に騙くらかされて、フラグ立ちを腰の端末が予言してたなんて言えるか。

「まあ、ちよつとな」

「そう……なんだ」

後いくら不安定だからって腕を回すな締め付けるな痛いだろうが。

予想はしていたことだが、ウエストブリッジの四車線には、車が一台も走っていないかった。

……走っていないただけで、ひっくり返っているのが一台あったが。

夕日が沈みかけている。橋の上に伸びている電灯が次々と点いていく。

……逢魔が時といったか。そろそろ奴らが動き出すころだ。

橋の中間に差し掛かった時だった。

「響輝君……」

戌海が後ろを指さす。

振り向くと、橋の街側から濃い霧が迫ってくるのに気が付いた。やばいな。さっさと前に行かなければ。

「スピード上げるぞ」

ペダルに力を込める。

しばらく早めに走っていたが、また、気が付いた。

……前から、つまりは街の外側からも、白く濃い霧が迫ってきていた。

「……くっ」

こいつは予想外だ。一本取られたな。

霧の中に良く目を凝らすと、いくつかの黒い影が見えた。

……あの霧の中に何体もの怪物がいるなんて、……想像もしたくないな。

しかし前も後ろも塞がれて … 3

KOTONE side

大柴君が殺された。

その痕跡は朝になると消えていた。

私はその後、逃げるように家に帰り、自分の部屋のベッドで震えていた。

外には出たくなかった。あの黒ローブの男が、どこから見ているかもしれないから。

街はおかしくなってしまった。狂ってしまった。

古来から続き、これからも続いたであろう時間の歯車が一片無くなってしまったかのような、空虚。

目の前で人が殺されたのに、何も残っていない。

矛盾が思考に壁を作る。元からあのコンビ二には誰もいなかったかのような錯覚に襲われる。

……いや、あそこには確かに人が居た。生きていたのだ。私が忘れてしまったら、大柴君という存在を覚えている人が居なくなってしまう。

学校には行きたくなかった。増えていく空席ををみるのが嫌になった。

中間テストが終わった（休んでいたが）翌日の昼ごろ、階下で悲鳴が上がった。

……お母さんのものだった。

……もう嫌だ、死にたい。逃げたい。でも街から逃げることもでききない。

このまま私も逃げることもできずに死ぬのか。そう思っていた時だった。

部屋をノックする音。自分を呼ぶ声。

——どうして響輝君は私を助けてくれたのか。

迷惑そうにしていたのに。何を見たのだろう。何が彼の考えを変えさせたのだろう……。

闇に染まりゆく橋の上。こんな時だというのに、私はその疑問を頭の中で反復していた。

しかし前も後ろも塞がれて … 4

「ちっ……」

前と後ろが塞がれた。

響輝君が自転車を止める。

どうするつもりなのだろう。このままでは挟まれて、あの霧の中に居る『何か』と闘わなければならない。

『さあ、どうする響輝。……といっても、貴様にとっては一つしか選択の余地はないんだっただな』

ハーテッドが言う。

「……前を突っ切るぞ」

「うん」

……何か、ハーテッドの一言が気にかかった。

響輝君には選択の余地がない……？

自転車が速度を増す。

前方の霧に突入するまで10メートルもない。

——次の瞬間、視界が真っ白になった。

右も左も濃く、白い。

「目を瞑ってろ」

響輝君が呟く。

「うん……」

自転車が右に、左にと蛇行しながら進んでいく。何かが轟く音が

聞こえる。

響輝君は何を見ているのだろうか……。

2分くらい経っただろうか。自転車がブレーキをかけられ、止まった。

「もういい。目を開ける」

目を開けると、周りの霧が薄く、白にぼやけていた。前方にあつた霧を通り抜けかけているらしい。

はあ……はあ……、と響輝君が肩で息をしながらこちらの方を振り返る。

『及第点……といったところか。まあ、後は無いがな』

「上出来さ」

響輝君が自転車を降り、私も一緒に降りる。

後ろを振り向くと、少し離れた所から奇妙なものがこちらに向かって動いてきていた。

地面から煙もやというか、靄もやのようなものが生えているような、人型の物体。

頭部に黄色く光る小さな丸いものが付いていた。……目のようなものだろうか。

しかし前も後ろも塞がれて … 5

黒い靄^{もや}で形作っている人型の（といっても下半身にあたる部分には足が無く、地面から生えているだけだが）怪物は、その二メートル強の体をゆつくりと引きずりながら、こちらに動いてきていた。

数は…… 10体近くいるだろうか。身体を引きずる音はせず、代わりにざわざわとした蠕動^{じゆうどう}を繰り返すような音が聞こえてくる。

響輝君が私の方を向く。

「…… 戌海。自転車に乗っててくれ」

「え……？」

促されるままに、自転車に乗らされる。

「響輝君……？」

彼は何をしたいのだろう。私を自転車に乗せてどうするつもりなのだろうか。

ふと上を見ると、いつの間にか空は赤と黒が混ざったような色の雲に覆われていた。

…… いや、違う。

街の端にいるから分かった。この雲は、ドーム状に覆いかぶるうとしている。

そしてその雲は、はるか上空から街と外の境界線を蓋を被せるように降りてきていた。

あれが街を閉ざすためのものなのだろう。
つまり、もう時間は無いということだ。

響輝君がこちらに近づく。

「……………」

すると、響輝君は、いつもの表情で、それでいて小さな声で、
「……………」ごめんな

と言い、私の乗っている自転車を思いっきり、押した。

そして少年は呟いた … 1

I s i d e

H I B I K

「えっ……？」

戌海琴音が驚愕に目を見開く。まあ、当然の反応だな。

「何かが動けば、必ず空気も動き、少量の風が生ずるのだ」

数時間前のことである。家でポーチにバタフライナイフを入れようとしていた時に、ハーテッドが思いついたように語り始めた。

俺は手を止め、先を促す。

「ノートなどを机に叩きつけたりすると、横に風が起こるであろう？ この現象は上から落ちる、あるいは下ろすものがどのような形状であっても、……たとえばバケツをひっくり返したような形でも、同一に起こるものなのだ」

「相変わらずまわりくどいな。……で、何が言いたい？」

「もし、その奴らが、人間が出入り自体をできぬよう、つまり方法はともあれ、街を物理的に封鎖してしまうのであれば、例えどのような力を使っていたとしても、内側から外側に向かって起こる空気移動は防げない、という話をしているのだ」

……何でこんな時に万有引力やら相対性理論やらの親戚みたいな話を始めるんだ。機械も遺言を残したりするのか。初耳だ。

「貴様はそもそも街を出ずに自分は死ぬべきだ、と今しがた明言し

たところではないか。なのにどうして外出の用意をする必要がある？』

「……お前、時たま無駄に鋭いよな。黙って見ていればいいものを。『ふん、何とでも言うがいい。貴様、共に街を出るとか何とか言つて、最後の最後に自分に残るつもりなのだろう。誰に向かつてその誘い文句を言うのかは大体予想がつくが、どうせ何を言っても無駄なのだろう？ だからアドバイスをしてやったのだ』」

「……余計な御世話だ」

こいつはいつもいつもそうだ。俺の元へ来てから今まで、ずっと、余計なことばかりしてきた。……まあ、本音を言つと、嬉しくないと言え、半分嘘になるんだがな。

そして少年は呟いた … 2

。 戌海を乗せた自転車は、10メートルほど進んで止まる。いきなり押されたため、バランスをとるのに時間がかかったらしい。

もう、黒く赤い雲は、入り江の上に架かっている橋のすぐ上まで来ている。そして、ハーテッドの言った通り、街から外側への、見えない、急速な空気の移動が起こる。

自転車から降りようとしている戌海も、当然その範囲に入っていた。俺が戌海を自転車に乗せて、思いつきり押したのもこの空気移動の渦中に戌海を放り込むためだ。

……そして俺は、その影響の少ない範囲外から、それを見届ける。送り出す。

この死んだ街から、一人の少女を。

突風のような現象によって、街の外側の方に引きずられて行きながら、戌海の周りの景色が歪む。

彼女は、目に涙を浮かべていた。

……全く。泣いてばかりだな、お前は。もう少しメンタル鍛えろよ。そんなんじゃホラー映画も見れないぞ。

琴音が何かを叫んだ。一心に口を動かしている。

……すまないな、戌海。もう、お前は“外側”になってしまった

んだ。お前の声は、もうこの空間には届いていない。

そして、例え街の外に出たことによって記憶を亡くしてしまっても、戻るべき街には入ることができない。

……ああ、解っている。今俺がしたのは、最低な仕打ちだ。期待を裏切り、見捨てたのと同義だ。人の所業とは到底思えないね。

それでも、だ。やっぱり、死んでしまうよりは、生きている方が得だろう？なあ、戌海琴音。

——俺は振り向く。後ろで空気が再び固定される。

街は閉ざされた。もう俺は、この地獄から抜け出すことは出来ない。

今の内に閻魔大王様がどんな顔してるか想像しておくか。これで舌を抜かれるまでの雑談には事欠かないだろうしな。

自分の罪をあゝの偽魔女が具現化させたもの——すなわち中華包丁——を構え、いまだざわざわと近づいてくる10体の黒い影と向き直る。

そして俺は面倒くさそうに、いつもの調子でため息をつき、こう呟くのだ。

「全く……何の冗談だ……」

そして少年は呟いた … 2 (後書き)

なんか響輝がかっこよく(?) 呟きましたけれど、これで——EN
D——とか、お空に浮かぶf i nの文字とかじゃないですよ、ま
だまだ続きます。

そして少年は含み笑う
∴ 1 (前書き)

新章になります。

そして少年は含み笑う … 1

KOTONE side

車窓の外の景色が右に流れていく。

いつからここに座っているのだろう……。

少々濁った声でアナウンスが流れ、列車はゆっくり停止する。
終点。

私は席を立たない。
訪れる空白の時間。

そして、今度は景色が左へ流れていく。
私はただじっとその景色を眺めている。

……私は帰らなければならないのに。生まれた街に。
人のぬくもりに溢れている、あの街に――。

HIBIKI side

『まあ、何だ。かつこつけたはいいが、……分が悪かったな』
ハートッドが告げる。

“影”の腕を包丁で切り付け、二歩下がる。
「ああ。どうやら俺は影についての見方を変えないといけないらしい」

靄の塊みたいな身体してくせに、いざ切り付けてみれば、あら

不思議。ちよつと刃が食い込み妙な感触とともに刃が跳ね返されてしまう。こんなにやくかよ。斬鉄剣でも斬れないぞ、全く。

防御力重視。どうりで動きが遅いわけだ。自転車でかわしきれるかどうかわや冷や冷やしていたのは紀憂だったようだな。

まあ過ぎた話だし、だからどうだというわけでもないのだが。

『さあ、今度こそ選択を迫られたぞ。外へ逃げるか？突っ込んで行くか？……まあ、我としてはどちらでも構わないのだがな』

何とでも言えよ。

……いや、選択が無い訳じゃないんだよな。出来そうにないだけで。

再度“影”に近づいて、包丁を頭の部分に叩きつける。

ようやく“影”の両腕が力を失ったように黒い霧となって空中に霧散していった。

これで三体目。残っているのは、あと六体。

そう思った時だった。

街側の方から、霧をぬって歩いてくる人影が“影”共の向こうに見えた。

すぐにその姿が戌海琴音のものだと気づく。

「数時間ぶりかな、響輝君……」

そいつは、戌海と全く同じ顔に笑みを浮かべる。
できれば二度と遭いたくなかった、偽魔女が、そこに居た。

そして少年は含み笑う … 2

“戌海琴音”がふふふ、と笑う。

「響輝君、“鍵”をどこにやったの？」
鍵……だと？何のことだ、それは。

「そう。それと知らずに外へ逃がしたんだ。……ねえ」
“戌海琴音”が髪を結んでいたリボンをほどき、若干長めの髪がざわざわと揺れる。

「知らないことは、罪だよね……？」
そう言つて天使のように微笑んだ奴の左右の脇から、赤い眼光が一対ずつ軌跡を残してこちらに向かつてくるのが見えた。
瞬間、両腕に裂傷特有の激痛が同時に走る。

「ぐああっ……！」
痛みに顔をしかめた。またこのパターンかよ。しかも今度は二体だ。

橋の骨組に一体、街灯の上に一体。二体の“黒蜘蛛”が身体を震わせ、それぞれの眼に紅い光を灯す。

厄介な相手だ。特に速さのある黒蜘蛛は、真っ先に仕留めないといたずらに体力を削られるだけだ。

それに、いまだにこちらに向かってゆっくりと体を引きずってくる影が六体。

そして、偽物。

9：1 対比にすらする価値の無い程圧倒的な戦力差だな。

……だが何となく、ずっと頭に引つかかっていることがある。
俺の目の前、二十メートルくらいの所で微笑んでいる、戌海琴音の姿形と全く同じ、化け物。

こいつは明らかに、他の蜘蛛やら影やらとは一線を越えた不可思議さを持っている。上位種なのか。G級なのか。

「それは愚問だよ」

“戌海琴音”が言う。いちいち心を読むな。

「最初の時に云ったじゃない。『異野響輝』の記憶は歪み過ぎているって。“私たち”は人の記憶の中に潜む恐怖や負の感情から生み出される。それはつまり、その人が恐怖している対象の因果が歪んでいればいる程、“私たち”の中でもイレギュラーな存在が現れる、ということなんだよ」

“戌海琴音”がゆっくりと前に歩き始める。

「響輝君の過去だって、特に何もなく人生を終えていく人々にとっては相当歪んで見えるはずだよ。自分でもわかっているじゃない」
だんだん距離が狭まっていく。
くそっ、これでは教室の時の二の舞だ。

そして少年は含み笑う … 3

“戌海琴音”が正面でにこつと笑う。

「さあ、早く諦め——」

“戌海琴音”が言葉を止める。その首元には、中華包丁の刃が当てられていた。

そのまま、包丁をかつ裂いた。
はずだった。

思い切って振り下ろした刃は、“戌海琴音”の胴体をすり抜け、俺の体ごと地面にぶち当たった。

「……っ！」

反動で、振り下ろした腕と腰が痛む。

二歩飛び下がって左手で倒れこむ身体を支えながら、“戌海琴音”の方を見上げる。

……くそっ。どうして切れなかったんだ。

「……無駄だよ」

ふふふ、と“戌海琴音”が嗤う。

「響輝君が“私”を恐怖している限り、響輝君には“私”を斃すことは出来ないよ」

俺がこいつを恐怖している、だと……？

「どうして解らないの？人間は自らの恐怖を拭い去ることは、決して、出来ないのに……」

知ったような口をきくな。

まあ、本丸は斃せないということは分かった。

……ああ。これで踏ん切りはついた。

俺にとつての最悪の、それでいて現在においては最善の、選択肢を選ぶ決意がな。

「賢い響輝君なら、解るよね。もう、逃げ場がないってことくらい」
ああ、そうだな。まさしく絶体絶命というやつだ。

「それに、アフターサービスに、追い打ちもかけてあげるよ」

カッーン、カッーン……

コンクリートをかたい靴でゆっくりと歩いているような、そんな音が聞こえてきた。

“戌海琴音”が微笑んだその向こう。

先ほどの“戌海琴音”と同じようにして、“そいつ”は濃い霧をぬって現れた。

全身を黒いローブで包み、一昔前の聖職者のような格好をした男。
「……やあ、『はぐれ者』。私と遭うのは、初めてかな？」

落ち窪んだ目には鋭い眼光。眼前に並ぶ化け物たちとはまた違った、只者ではないと感じさせるオーラを身にまとい、男は俺に呼びかけた。

そして少年は含み笑う … 4

男がささやくような、それでいてエコーを伴った奇妙な声で語りかけてくる。

「……小僧。“鍵”を街の外に逃がしたのは意図あつてのことか？」
だから“鍵”って何なんだよ。そこから説明してくれ。話が全く見えないだろうが。

「そうか。知らずに成し遂げるとは、何の因果か、はたまた偶然か……」
そう言うつと、男は目を鋭くし、こう続けた。

「何にせよ、お前にはここで死んでもらうがな」

その眼を見た瞬間、背筋に寒気が走った。

こいつはやばい。その偽魔女なんかとはレベルが違う。

「『なんか』とは酷いなあ」

“戌海琴音”がけらけらと嗤う。

「……小僧、お前は危険だ。“鍵”と最も近づいていただけに、どのような影響を受けているのか分からない。危険なのだ」

あいにく俺は何年も前から人殺しの危険分子だよ、悪かったな。

とはいえ、これではもう本格的に勝ち目は無い。

気は進まないし、限りなく運と髪判断に命を委ねることになるが、まあ、どちらでも構わないか。

男が“戌海琴音”の方を向き、くいつと顎で指す。

“戌海琴音”はにやりと笑うと、右手にサバイバルナイフを持ち、こちらを向いた。

橋の左右に止まっている、“黒蜘蛛”が一瞬身震いする。

「響輝君、……さようならッ！」

“戌海琴音”がサバイバルナイフを構え、風のような速さで俺の方に突っ込んでくる。

それと同時に、二体の“黒蜘蛛”もこちらに飛びかかってきた。

「くそッ！」

その“戌海琴音”に向かって、俺の投げた中華包丁が飛んでいく。

「……ふふっ」

“戌海琴音”が一瞬その場で止まり、首を傾け、包丁を避ける。

主人が危険に晒され、二体の“黒蜘蛛”も空中で一時停止する。

いまさらだが、糸を到達地点の近くに飛ばし、移動していたようだ。

「そんなことして、何にな……」

その一瞬で十分だった。

“戌海琴音”が言葉を止めるのも当然だ。少し目を離れた隙に、人が橋の手すりの上に立っていたら、化け物だって驚くだろうよ。

「まさか、響輝君……」

「ほっ」

“戌海琴音”と男が呟くのが聞こえる。

それを聞き流しながら、俺は、

「……はあ、全く。出来ればやりたくなかったんだかな」

橋の上から、下の海に向かって、飛び降りた。

「……くっ！」

ヒュン、と“戌海琴音”の投擲したサバイバルナイフが俺の頭の上をかすめる。

ざまあみろ、一本取ってやったぜ。

『……一本だろうが二本だろうが、どうでもいいのだが。これ、生きるか死ぬか、正直五分五分だと我は思うぞ』

……ああ、確かに。それが唯一の問題だな。

と考えたところで、俺の身体は海面を突き破るようにして、海中に落ちていった。

薄れゆく意識の中で、俺は含み嗤った。

だから少年は冷たく歪む
… 1 (前書き)

ここからしばらく響輝君の過去話、すなわちは彼が歪んだ理由の話になります。

だから少年は冷たく歪む
… 1

I s i d e

R e : H I B I K

——夢を見ていた。ああ確か、あの日の朝も俺は良い夢を見て、気分良く起きたんだっとな。

小学三年生の冬。俺はその日その時まで、近所でも評判になる程、活発で元気で無邪気な子供だった。……と記憶している。

そう、あの日までは。

前述したとおり、俺には姉がいた。名前は巽野茜^{たつみやあかね}。俺が小三の時に十七歳だったから、もし今生きているなら、二十三歳くらいになっていたことだろう。

その頃、親父は新技術を生み出し、努めている会社の上層部に一気に昇進した。若手なだけに、期待も大きかったのだろう。

だが、中にはそれを妬ましく思っていた奴もいたのだ。そして、そいつは嫉妬と嫌悪のあまり、やってはいけないことをした。

それが、“巽野家の長女、『巽野茜』の誘拐”。
しかも、のちに分かったことだが、それを裏社会のコネで、他人に依頼してやらせていたのだから、性質^{タチ}が悪い。

……いや、本人がやればいい、という話でもないが。

まあ、人に頼んでやらせたのだから、いろいろと不具合が生じたのは至極当然のことと言えるが、依頼した相手、こいつもまた性質の悪い狂人だったのだ。

その生じた不具合の中に最大の誤算があったとするならば、それは、“弟である『巽野響輝』に間近で姉の誘拐現場を見られてしまった”ということに他ならないだろう。

当時の俺は十歳にも満たない子供である。車に押し込められようとしていた姉を見て、

「茜姉ちゃん！」

と叫んでしまったことも責めようのない事ではあるが、結果的にはそれがまずかった。

姉さんも一生懸命抵抗していたが、誘拐を依頼されていた狂人は男だったため、力で勝てるはずもない。たちまち俺は姉さんもと車に押し込められ、中で身体を縛られた。

叫ぼうにも、運悪く人通りの無い道路だったし、すぐに口もガムテープでふさがれた。

そして、俺と姉さんの地獄のような二日間が幕を開けたのだ。

だから少年は冷たく歪む … 2

一日目は本当につらかった。口をふさがれ、両手両足を柱に縛られ、依頼人と連絡を交わす狂人の笑い声を聞きながら、俺達姉弟は耐えていた。

食事も与えられないし、監禁されている場所もどこかの廃工場だということしか分からず、一日が過ぎていったのだ。

二日目。誘拐の依頼人が逆探知と声紋鑑定、そして証言に基づき確定され、逮捕された。

早かった？ いやいや、そんなことはない。あえて言うのなら、他人に人質の管理を任せていただけに、いろいろと依頼人は詰めが甘かった、ということくらいか。

警察も、親父も母さんも、後はこいつに俺達の居場所を吐かせるだけだと思っていたらしい。まあ、犯人がそいつだけだと思っていたのは当然だ。身代金取引の話や、誘拐宣告もその依頼人がやっていたのだから、あたかも一人で犯行を行っていたかのように見せかけていたのだから。

人間の情報網というのは心底恐ろしい。依頼人が逮捕されたという情報は、すぐに直接犯行を行っていた狂人の耳にも届いていた。

そして、彼は自分が事件に関与していると依頼人が吐いたら終わりだ、と思ってしまった。

それが、狂人のスイッチを入れた直接的な原因と言えるだろう。

ほどなく、依頼人の口から協力者の存在が語られ、警察すぐに俺達の救出に向かったらしい。

だが、もう遅かったのだ。何もかも。

もう自分の素姓がばれていると感枯れた狂人は逮捕の情報が入った時点ですでに自暴自棄になると同時に狂っていた。

情報を入手したとたんに噛い始め、しばらく焦点の定まらない目で何かをぶつぶつ呟いていたが、少しして、狂人は行動に移った。

だから少年は冷たく歪む
… 3

狂人はまず、姉さんの口を塞いでいたガムテープを剥がした。

げほ、げほ、と姉さんが咳き込む。

続いて、男は俺を柱に縛りつけていた縄をほどいた。

俺は逃げようとするが、すぐに狂人にはがいじめにされる。

そして、狂人は懷から大振りの中華包丁を取り出し、こう言った。

「殺せ」
と。

殺せ……。言葉にするだけなら簡単な二文字表記だが、その一言に込められていたのは、紛れもない狂気だった。

「厭だ！」

と叫んだつもりだったが、俺の口はガムテープに塞がれたままだったため、ろくに声も出せなかった。

狂人が後ろから左腕で俺の首に回し、右手で俺の手を覆うようにし、それと同時に俺の手に包丁を握らせた。

さすがに何をしようとしているのか予想はついた。

俺は半泣きになりながら、狂人の腕に噛みついたり、足を蹴りつけたりしたが、何をしても男はうわの空で、

「ころせころせころせころせころせころせころせころせ……」
と呟くばかり。

足が一步、また一步進んでいく。

そこで俺はここ数日で初めて姉さんの顔を真正面から見た。

「――！」
姉さんは泣いてなどいなかった。

口を引き結び、強い表情でこちらを見つめていた。

姉さんは人一倍心の強い人だった。それは弟である俺が一番知っていた。

あんな状況でも絶望に打ちひしがれたりせず、自我を保っていた。

だから少年は冷たく歪む
… 4

姉さんとの距離が１メートル程にまで縮まる。

鉄の柱に沿うようにして手と足を縛られ、まるで十字架ならぬ十字架に架けられたような状態の姉さん。その目には絶望の色も、悲しみの色も無い。

俺の右手に被さっている狂人の手に力が込められ、俺はその手に導かれるままに、包丁を振り上げた格好になる。

イヤだ。嫌だイヤだ厭だいやだ嫌だ嫌だいやだ厭だイヤだ……。

眼を瞑った次の瞬間、

手には確かな手ごたえ。顔にかかる血飛沫。

嫌な音がした。眼を開くと、視界が赤に染まっていた。

包丁、自分の手に握られていた中華包丁は、姉さんの腹部を服ごと切り裂いていた。

ねえさんの内蔵が見える血溜まりがひろがる狂人の狂笑がきこえる。ねえさんの悲鳴がきこえる

きこえるきこえるきこえるきこえるきこえるきこえるきこえる。

狂人が俺を束縛から解放する。

口のガムテープを剥ぐ。血と油のこびり付いた中華包丁がからんと地面に落ちる。

目の前には言葉で説明することが出来ないほど酷い光景が広がっていた。

……俺はその場で吐いた。吐いた。そのまま血を吐いて死にたかった。

なにも考えられない、何も聞きたくない、俺が姉を殺したのだ。

そう思った時だった。

口の端から血を流して俯いていた姉さんが、急にぐいっと顔を上げた。

その目から、まだ生氣は失われていなかった。

姉さんは、既に外れていた縄から瞬時に手と足を抜き、腹を深く斬り裂かれていたにも関わらず、そのまま一歩で距離を詰め、狂人にぶつかつた。

そのまま二人が地面に傾れ込む。

そして、姉さんは力の限り叫んだ。

「今です！」

ふと廃工場の入り口に目を向けると、開け放されたドアから、重装備の警官隊が工場内に傾れ込んでくるのが見えた。

……俺と狂人は入口に背を向けていたが、向かいの姉さんには、入口からなかを窺う警官が見えていたのだ。

それに、狂人は俺を逃げられないようにしたうえで、手に中華包丁を握らせていた。自分が縄を抜けても、すぐに俺が殺されてしまうと判断したに違いなかった。

だから、姉さんは自分を犠牲にした。

だから少年は冷たく歪む … 5

「茜姉ちゃん！」

もう泣いていようが何だろうが関係なかった。

「僕が……僕が包丁で、あんな……うわああああ！」

この惨状を作りだしたのは自分だと今一度確認し、パニックになっていた俺は、ふと、頬にやわらかいものが触れるのを感じた。

顔を上げると、姉さんは、微笑んでいた。

その手は、俺の頬をいとおしそうに撫でていた。

「茜……姉ちゃ……」

「……響輝」

姉さんが口から溢れだす血を気にも留めていないかのように、俺を呼んだ。

「君、しゃべっちゃいかん！……誰か、この女の子を！」

姉さんを支えている警官の内の一人が叫ぶ。

「……響輝。大丈夫だよ」

「大丈夫……夫、じゃないよ！僕が、あんなことを……」

「うつん、響輝の所為じゃないわ、仕方なかったの。あなたを助けるには、こうするしかなかった……」

姉さんの手が俺の頬を撫でた。

大事な、今にも壊れそうな宝物を触っているかのような、手つき。今壊れようとしているのは、姉さんの方なのに。

涙が頬を伝い、姉さんがそれを拭う。

「……ごほっ……。響輝、一つだけ忘れないで。あなたは何も悪くないわ。自分を責めちゃだめ。私はこれくらいしかしてあげられなかったけれど……」

姉さんが俺の頬から手を放す。

「あなたにはもっと、もっと大きな……ゴボツ……、未来があるんだから……」

床の血溜まりが広がっていく。

「何を言って……」

「……私ね。実は、あと二年しか生きられなかったんだ」

「え……」

身体が硬直した。

……姉さんは余命があと二年しかないだって？

確かに姉さんは生まれつき体が弱かった。

旅行に行ったり、遊園地に行ったりした時にはベンチで座って、はしゃいでいる俺を見ていることが多かった。家でもたまにしか遊ばなかったし、週に一回くらい薬を飲んでいた。

でも、入院したりなんてことは一度も……。

「自宅療養って言ってね。入院はしなかったんだ。余命ははっきりしていたから……」

溢れる血は止まらず、姉さんはもう全身血塗れだった。

「でも、姉ちゃん、そんな……」

「いい、響輝」

俺の弱い声を姉さんの毅然^{きぜん}とした声が遮った。

「私はこうなったこと、こんな結果になってしまったことを、全く後悔していないわ。私はね、自分が成人まで生きることが出来ないって分かった時に、死ぬまでに、普通に人が人生の間に来ることを残された数年間でやりきってやろうと思ったの。だから、毎日努力したわ」

確かに、姉さんは相当な努力家だった。学力と音楽の知識を生かしてアメリカに留学したこともあった。そして、二年後に日本に戻ってきた時には二年で飛び級して大学一年生になっていた。……ああ。そうだったのか、と思った。

尋常じゃない努力家だと思っていたが、今になって分かった。姉さんは、確定した死の運命を背負って生きていたのだ。

だから少年は冷たく歪む … 6

姉さんがふっ、と表情を緩めた。

「……ふふふ、笑っちゃうよね。こんなにも、年刻みで医学が進歩している世の中だっというのに、原因不明の病気なんて、まだいくらでもあるんだから。……全く、何の冗談よ」

姉さんが嗤う。死に際に立って、この世に対する不満を吐きだしているのだと見て取れた。

死ぬことが嬉しい生命などいるはずがない。いるとするなら、生まれてすぐの子供の餌となるコマチグモの母蜘蛛くらいのものだろう。

そこで、姉さんとの会話は中断された。

救急隊員の人何人か入ってきて、姉さんを連れていったからだ。彼らと一緒に来た母と親父は、俺の安否を確認すると、後を警察に任せて姉さんが運ばれていくのに着いて行き、救急車に乗って行った。

俺は警官たちの叫ぶ声と、取り押さえられている狂人の笑い声中、ただ、ずっとその場で立ち尽くしていた。

。次に見た姉さんは白い衣を着ており、薄化粧がされた端正な顔には、安らかな表情を浮かべていた。

業者の人の話によると、亡くなってから死体の表情には、化粧以外一切手を加えていないらしい。

姉さんは病院へ運ばれて行く間、終始この表情で、自分を支えてくれた人や、親父や母の名を呟きながら、その後に「ありがとう」と言い続けていたという。

そして、病院に搬送されたが、間もなく息を引き取った。

事切れる直前、姉さんは俺をよろしく、と周りの人々に伝えたそうだ。

俺はとても弱いから、親だけでなく、周りの全ての人々に助けてもらわないと私の死を乗り越えられないから、と。

さすれば少年は目を覚ます
… 1 (前書き)

過去話はいったん終わりです。

さすれば少年は目を覚ます … 1

side

Re:Re:HIKIKI

——痛い。

頭が痛い。

どうしようもなく身体じゅうも痛い。

……痛みを感じている、ということは、俺はまだ生きているのか。

目を開ける。

視界に入ってくるのは、街の上空を覆っている赤黒い雲。

……ああ、そうか。

次第に記憶が戻ってくる。

……たしか俺は、戌海を逃がして、偽物から逃げるために橋から飛び降りたんだった。

ゆっくりと身体を起こす。

背中にこびりついている砂がさらさらと落ちていく。

……どうやら俺は海に落ちて流されたにも関わらず、街から出ることも無く、街の中の浜辺に打ち上げられているらしい。意外にしぶといな、俺。

『……む、起きたか』

ハーテッドの声がする。

そういえばこいつ防水性だったな。すっかり忘れていた。

『ちよつと待て。それでは貴様、我が壊れるの前提で動いていたのか?』

ああ、ザツツライト。

『……………』

……………冗談だ。

『やめてくれ、一瞬画面が真っ暗になった』
洒落にならないからやめろ。

周りを見渡す。

やはりどこかの海岸だ。この街で浜辺があるといったら確か…………。

『南区だな。遊泳可能な区間は確か南区の浜辺だけだ』

やはりコンピューターは役に立つ。現代人とは切っても切れない関係にあるといっても過言じゃないだろう。

…………で、だ。

あまりにも非常識というか、風景にそぐわないから必死になって無視していたのだが、どうしてこの閉ざされて現在進行形で化け物増殖中の街の浜辺で魚を焼いている人間がいるんだ?

さすれば少年は目を覚ます … 2

しばし俺は上半身を上げた格好で硬直する。

……空気にそぐわなすぎるぞ。なんで魚。……腹が減ってくるだろっが。

というか美味そうにアジみたいな食うなよ。当てつけか。

あちらは食事に夢中らしく、今だこちらには気付いていない。
薪に串刺しの川魚か。……実にワイルドだ。

『……響輝。早く話を進めろ。このままではコメディイになってしまいかねん』
「何の話だ」

俺は魚を頬張っているそいつを見る。……美味しそうだ。
そいつは見た目的にも実に奇妙な衣服を身に着けていた。

まず第一に、白い服を着ている。……何と表現すればいいのか、とにかく和風なテイストの服で、上下両方が白づくめだった。
そして、その上に黒いローブのようなものを羽負っている。白と黒で嫌でも目立つ格好だな。

第二に、そいつは髪の毛が白……いや、銀色か？ ……とにかく、そんな色だった。

ローブを脱げばまさしく全身真っ白である。

そして第三に、そいつは俺より一歳年下、もしくは同年代くらいの、女だったのだ。

「……んぐっ……」

……どうやら魚がのどに詰まってしまったらしい。胸に手をとんとんと当てている。

そこでようやくその非常に白くて黒い格好の少女は、俺が起きていることに気付いたらしく、串刺しの魚を一本取り、砂をかけて火を消し、こちらに向かって歩いてきた。

「おはようございます」

開口一番、朝のご挨拶をされてしまった。……常識のある人間に遭遇出来たことは幸運に思う。

「……おはようございます。時に今はいつ何時なのでしょう？」

丁寧口調が移ってしまった。

……。

「街が閉ざされて一夜が明けました。今は朝の八時二十三分です」
白衣の少女はさらりと返答する。

さすれば少年は目を覚ます … 2 (後書き)

自問自答

Q そんな新キャラで大丈夫か？

A …… どうでしょう。

さすれば少年は目を覚ます … 3

……全く、流れについていけそうにないな。

「……えー、と。お前、どうしてそんな格好をしているんだ？」

「これは私の家の正装です。あなたが特筆して気にすべきことではありません」

よく舌が回る奴だな。

「あなたが打ち上げられているのを見た時は驚きました。泳ぐのが好きなんですか？」

「別に。苦手じゃないが」

何なんだこいつ。戌海とはまた違う意味で俺とテンポの違う奴に遭遇したぞ。……まあ、今更何が出てきても驚かないが。

少女は俺を見下ろす格好でしばらく立っていた。ちなみに俺はまだ体中が痛いので立ち上がれそうにない。

「……“逸^{はく}れ者”」

「ッ……！」

その言葉が少女の口から出たとたん、身体が硬直した。

「……あなたと私は同位置に存在しています。“鍵”と最も近くにおり、それが故に影響を受けてしまっている」

……この格好を見た時から薄々感づいていたが、やはりこいつも知っている側なのか。

「……“鍵”って何のことなんだ？ それから教えてくれ」
少女は少し俺の方を見、話し始めた。

「どうやらあなたはこの街に取り残されている人間で、それに“逸れ者”であるというのに、事情を一割程度しか把握していないようですね。まあ、いいでしょう……」

少女が「食べますか？」と串刺し焼き魚を渡してくる。ありがとうございます。頂こう。

「あなたも見たり遭ったりしたと思いますが、奴らは闇に潜み、好機を練り、一説には古来に人間と同時にこの世に現れたと言われる存在です。感情という不完全なモノを持った生物が生まれてきた地球の副作用、と言ったところでしょうか……。なんにせよ、奴らのことは、姿形はそれぞれ違いますが、根本的な行動は共通しているため、知っている側の人間は“恐鬼”と呼んでいます」

“おに”……だと？

「『恐れる』に、『鬼』でおに、と読ませます。奴ら……魔の一族は共通して、人間の肉体よりも、そのターゲットの負の感情を求めて活動しています」

それを恐れる負の感情を喰う。だから恐鬼^{おに}。言いて妙だ。

確かに、俺にも覚えがある。あの夕陽が差し込む教室の中での出来事。

偽魔女は、俺を“喰う”というよりも、俺の歪んでいるらしい感情を“喰おう”としていた。

さすれば少年は目を覚ます … 3 (後書き)

世界観の説明をすることができキャラの登場。
ずいぶん便利です、こういうキャラ。

さすれば少年は目を覚ます … 4

少女は続ける。

「恐鬼おにの存在は古くから様々な方法で人から人へ伝えられてきました。神話に登場する怪物や、昔話。日本の有名どころを言うなら、『羅生門の鬼』に登場する“酒？童子”や、各地に語り継がれている妖怪や幽霊、そのすべてが恐鬼の一種です」

……昔から語られている化け物の全部が奴らだと言うのか？

「はい。……考えても見てください。怪物や妖怪、幽霊、UMA、どうしてこんなにも見た目や特徴でこれらの存在が区分されているのか」

正体がわからないからだろう？ 分かりやすく区分するにはそうやって呼び名を変えるしかないだろうが。

「その通りです。奴らに共通しているのは、正体がかめなこと。我々生物は細胞や原子などの源と言えるものがあります。奴らにとつては実体無く、いずれも怪談や怪異譚を聞いた人間の恐怖心を喰っている、ということが存在としての前提なのです」

……なるほどな。

「勿論、恐鬼のような存在を知る人間も昔から存在しました。“感情”というものは不安定です。ですから、それと対となる存在である“恐鬼おに”もとても不安定なのです。だから、奴らの中にもターゲットとした人間に応じて、時折イレギュラーな存在が現れます」

一瞬偽魔女の狂った笑い声が脳内にリフレインする。

「この街ではどいつもこいつも堂々と襲ってきているが、どういうことなんだ？」

「それはこの閉ざされた街が奴らの狩り場だからです。……普段から積極的に感情を喰おうと人に接近してくる恐鬼も存在します。本来は姿を現さずに影に潜んで感情をちまちま喰うだけの存在だったと言われていますが、その世の中のバランスを崩したのが、俗に言う“鍵”の存在なのです」

……どういうことだ？

そして事実^{じじつ}は語られる … 1

少女は少し上を向き、しばらくしてから再び俺の方を見下ろした。

「“鍵”とは何なのか……。あなたは先ほど私にそう問いました」

「ああ。説明を頼む」

少女が頷く。

「……“鍵”は、言うなれば突然変異のようなものです。恐鬼^{おに}は怪談や都市伝説などを通じてそれらに恐怖する人間の感情を喰い、人はそれと知らずに生き続ける……。その世界のバランスは“鍵”の出現によって、あっけなく崩れ去ったのです」

そこで少女は大きく息を吸った。

……早く続けてくれよ。そろそろ耳が痛くなってきたぞ。

「……きつかけなんてものは無かったと言われています。ただある日突然現れました。恐鬼でも生物でもないモノであり、それ自体には実体はありません。“鍵”は時代も場所も越えて、ランダムに人間に宿ります。その人間と宿っている“鍵”を引き離す方法は存在しないため、宿主の人間自体も“鍵”と呼称されます」

……ふむ。分かりにくいが、前世とか来世の考え方に近いか。

「そうですね。……まあ、その恐鬼でも人間でもない第三の存在である“鍵”が現れただけなら、何の問題も無かったのですが……」

少女がまた一息つく。俺は魚を食べ終え、串をぽいっと砂浜へ投げ捨てる。よい子は真似しないでくれよ。ポイ捨てはよくない。

「長い人類の歴史の中で時折生まれてくる“鍵”は、それぞれが違う強さの力と能力を持っていたのです。……目先の欲望は力を求め

るものを暴走させます」

そう言つと、少女は仰向けの俺の隣で体育座りになる。

「……“鍵”っていうのは、宿主が死んだらどうなるんだ？」

今までの会話と状況から察するに、偽物やあの黒い男が言っていた“鍵”というのは、おそらくではあるが、……戌海琴音のことだろう。俺が街から逃がしたのはあいつだけだしな。

「宿主が死ぬとその人に宿っている“鍵”も消滅します。別の人間に移ったり、なんてことはありません。どんなにその“鍵”の力が強くても、宿主が死んだり、力を求める恐鬼に取り込まれたり、宿主が狂言に踊らされて闇に堕ちたりすると、それ相応の結果になるのです」

そう言つと、少女は波打ち際を見つめ始めた。

そして事実には語られる
… 2 (前書き)

これで総計70話です。

そして事実には語られる … 2

「この街を囲った……閉ざした張本人が何者なのか、知っていますか？」

少女は海の方を見ながら俺に問う。勿論その先には地平線なんてものは無く、赤くて黒い雲が見えるばかりなのだろう。

俺も「知るわけないだろ」と返事をし、波打ち際へ顔を傾けた。

しばしの空虚。波が立てるざざあ……という音だけが響く。時折悲鳴みたいなのや車の狂ったようなエンジン音みたいなのが聞こえるのは御愛嬌だ、きつと気のせいだ。

「……西洋系の血の入った黒衣の男です。あなたももしかすると遭ったことがあるんじゃないですか？あの男は物好きですから。憎々しい程に」

その言葉を聞き、それからもう一度頭の中で反復し、そして俺はやっと動くようになった両腕で頭を抱えた。

あの時あの場所橋の上。偽魔女の後に出てきたあいつか……！

どうりで他とは違う威圧感を放っていたわけだ。思えばあの男、偽魔女を顎で使っていたな。あの時点で少しは感づくべきだった。

「あの男は元々“鍵”だったそうです。それが、闇の住人の誘い文句に乗り、堕ちた……」

少女が再び俺の方を向く。

「……私が知りえているのはこの程度です。後は連中にも聞いてください」

「そんなこと——」

出来るかよ、と突っ込もうとしたが、ようやく起き上がったというのに、俺は少女に抑えられた。

「何を……」

「私たちの存在が感づかれました。すぐに逃げた方が良いでしょう」と、
そう言うと、少女は足元の砂を足で掘るように除けていく。

しばらくすると、砂の中から、黒い棒の一部のようなものが見えた。

少女はそれを掴むと、一気におそらく砂の中に隠していたのであろう物を持ちあげた。

「……………」

声も出なかった。

だって想像してみてくれよ。目の前の俺より華奢そうな少女が、いきなり砂の中から自身の身長をも越えるほどの長さの大鎌を取り出したんだぞ？

呆然と俺が見ている前で、少女は慣れた手つきで大鎌の柄を掴んだまま、それをひゅんひゅんと回転させる。大道芸人かよ。

「馬鹿にしないでください。それでも私の持っている中で最大の武器なんですから」

当たり前だ。そんな大鎌よりでかい武器なんか使ってたまるか。

大体だな、鎌っていう物はそんなに武器としては高性能じゃ——
「伏せてっ！」

少女が俺の身体を突き飛ばす。予想以上の腕力に、俺はなすすべもなく砂浜に再び寝転がった。

そしてその上を、何か黒い影が飛び越えていく。

何とか立ち上がりその方向を見ると、そこには本物よりも一回りほど大きく、全身が真っ黒な“狼”が、不気味なうなり声を上げていた。

そして事実話される … 3

「こいつは……」

俺はとつさに腰のポーチに手をつ込む。

……まずい。そういえば、中華包丁はあの時偽魔女の気を引くのに使ったんだった。

仕方なく、バタフライナイフを取り出し、刃を開く。

「あれ」は支配者の狗です。狩り場を駆け巡り、見聞きした情報を脳から直接主人に送ります。もう私がこの街に入り込んでいる事も、あなたがまだ生きている事もあの男の耳に届いているでしょう」

少女は身の丈ほどもある大鎌を構えて、うなり声を上げている“狗”の方を見据えている。

横から見ていても分かる、鋭い眼光。俺が通っていた古武術の道場の師範に勝るとも劣らない、いくつもの死線をくぐり抜けた、強者の眼だ。

……こんな俺と同世代くらいの少女が何故そんな眼をしているのか……。気にはなるが、今はそんなことを考えている場合じゃない。

「あなたは下がっててください。ナイフ一本で勝てる相手ではありません」

少女がそのほとんどと言っていい程無表情な……違うな、冷たい表情を浮かべている顔を俺の方に向けて言う。どうやら俺の手にあるバタフライナイフを見て言ったようだ。

「だからって何もないよりは数倍マシだ。お前こそ、そんなにかい鎌で戦えるのか？」

鎌というものは、刃を目標に当て、それから引くことによって切るものだ。ましてや、そんな大きな、それこそ死神のような鎌では、ろくに戦えるはずがない。

だが、俺はその時は忘れていた。

この目の前の白装束の少女が、なぜ街を閉ざした張本人を知るほど内部事情に精通しているのか。それがすなわち、幾度か恐鬼と交戦したことがあるということであることを。

「はあ……。全く、そんな強がりと言っている場合ではないでしょう。いくら“逸れ者”でも、数時間海水に浸かって漂流した後では、体も鈍っているはずです。……あと、鎌はれっきとした武器です。馬鹿にしないでください」

そこまで少女が言ったところで、“狗”^{いぬ}が吠えた。

だんつ、とその大きな後ろ脚で飛び上がり、突風のような勢いで少女の喉笛を狙い、大口を開ける――。

――が。

「空中に飛び上がるのは、敵に料理してくれと言っているのと、同義です」

すぱん、という良い感じの音を聞いた気がした。

次の瞬きの後には、白い砂浜の上にどす黒い血だまりが広がり、肩部から上を失った“狗”の遺骸が転がっていた。

「……………」

え？などと声を上げること出来ない。

何のことはない。ただ、目の前の同世代の少女が手に持っている大鎌を振りかぶったかと思うと、それがまるでただの軽い棒であるかのように、飛びかかってくる“狗”の首を切り裂いたのだ。

……。

「鎌……だよな、持ってるの」
「当然です」

一度大きく鎌を振って刃に付いた血脂を払い、少女がその端正な顔を俺に向けた。

……相変わらず、無表情に近い冷やかな表情は浮かべたままだったが。

そして事実^{じじつ}は語^{かた}られる … 4

黒い砂のようなものとなって空中に霧散していく“狗”の遺骸をしり目に、少女が街の方を向く。

「さて、そろそろ行動を起こさなくてはなりません。あなたは……、いつまでも『あなた』ではしっくりきませんね」

だったら出会った瞬間に名乗り合えばよかっただろうが。

「俺は巽^{たつみやひびき}野響輝、方角の巽に野原の野、響くに輝くだ」

少女何故か怪訝^{けつぜん}そうな表情をしたが、しばらくして、

「……私は祇園^{ぎおんりん}鈴です。祇園精舎の祇園と鈴で読ませます」

祇園、鈴か。珍し名前^{なまえ}の奴もいたもんだな。

「あなたが如何にして“逸れ者”に選ばれたのかは知りませんが、今は戦力は多い方がより優位に事が進みます。私も同じ“逸れ者”、境遇に共通のものがある以上、きっとあなたとはいつかは交わる運命にあったのでしよう」

少女は、それに、この街では“狩り人”でもない限りは二人以上で行動した方がいいのです、と言うと、少し表情を緩めた。

。

「……なあ、祇園」

「鈴でいいです。名字で呼ばれるのは慣れていないので」

数時間後、俺と祇園鈴と名乗る少女は、街を北上しながら歩いて

いた。

「じゃあ、鈴^{りん}。お前は どうしてその“逸れ者”になったんだ？」

俺がこうして他人の事情に踏み入るのも珍しいが、状況が状況だ。さつきから人の死体やらたまに空を駆けていく人の顔をした驚みたいな のを見させられているのだ。

うん。何だか、気が狂いそうである。

「……。さつきから言おうと思っていたのですが、私は一応あなたより年上ですよ？」

……。え。

「……。いや、だがな、その身長じゃいささか……」

「身長で人を判断するんですか？ あなたは。最低ですね」
そこまで言うか！？

「私は明治の中期ごろ、中部の山間部にある村に、祇園家の長女として生まれました。箱入り娘のような生活をしていましたが、あるとき屋敷の敷地に迷い込んできた少女に会い、外の世界の楽しさを教えてもらったのです。その子の名前は、高峰^{たかみねみどり}緑。のちに知りましたが、彼女も“鍵”だったのです」

明治中期……。今何歳だよ。冗談にするにしてももっと上手い奴をだな……。

「“鍵”を宿して生まれてくる人間が無作為に選ばれるように、“逸れ者”も“鍵”にとって最も身近な人から選ばれます。“逸れ者”と成った人間は本人の意思に関係なく身体が強化され、寿命が延びるのです」

……。いま、何て言った？

「それじゃあ、俺も……」

「そうですね。今回の“鍵”の力は今までの中でもトップクラスです。支配者が血眼になって捜すくらいです、よほどのものなのでしょう。その“逸れ者”であるあなたへの影響も、ひととき強いのではないでしょうか」

……確かに、思い当たる節が無い訳ではない。よく考えてみれば、海に落ちて漂流した人間が生き残る確率自体そんなに高くないのだ。だが俺はこうして生きている。

少女が目の前に現れたゾンビのような恐鬼の首を手を持った大鎌で掻っ切る。

一体何年、いや何十年闘ってきたのかは知らないが、よほど鎌の扱いに手慣れているらしい。

「長い時間使い続けていれば、木の棒だって立派な大量殺戮兵器になりえますよ」

「そんな物騒な事を言っな」

しばらく歩き続け、俺達は東区の入口を抜けた。

そして少女は錯誤する
… 1 (前書き)

新章です。

そして少女は錯誤する … 1

KOTONE side

私は戌海琴音。

年齢は十五歳。

趣味は動物番組を見ること。

家族はお母さんとお父さんの三人家族。

出身は龍ヶ峰市北区。

通っているのは龍ヶ峰高等学校。

クラスは1 - 2。

一番好きな人は……………誰だっけ。

。

揺れる車内。

流れゆく景色。

おぼろげな記憶。

…………私は自分の出身地を捜していた。

この列車の路線で間違いないはずなのに。
列車の出入り口の上の電光掲示を見る。

『子守阪』と『沼石』と書かれた文字の間、そこにあるはずの『
龍ヶ峰』の文字は、…………無かった。

文字通り消えていたのである。確かにこの間には竜ヶ峰市の西出入り口であるウェストブリッジ前の駅があるはずなのに。

窓の外、地平線の先に揺らめく真つ赤な夕日。
また、今日も一日が終わる。そして、また太陽が昇る。
繰り返す毎日。でも、私の周りの時間は止まったまま。

私は、どうして街を出たんだろう……？

今日も同じか、と肩を落としたその時、私の肩はぽんつ、と叩かれた。

顔を上げる。

そこに立っていたのは、二十歳後半くらいの年齢の男だった。

こんな初夏の日に、濃い緑色のロングコートを着ている。

……変な人だ。そう、思った。

「お前が今回の“鍵”か」

男はそのコートをためかせながら、私の真正面の座席に腰を下ろした。

鍵……？ 何のこと？

「……なるほどな、なかなか強い力だ。想像以上だな。支配者が欲
しがるわけだ」

「あ、あの……」

この人は何を言っているのだろう。るらー？ 何かの名前？

男はさつと立ち上がると、座っている私を見下ろす。

「……さあ行くぞ、お前の生まれた街へ」

「私の生まれた街を、知っているんですか？」

一体この男の人は何者だろう。何で路線図から消えた街のことを知っているのだろうか。

「俺は“狩り人”だからな。“鍵”を保護し、恐鬼を斃す、……そう運命づけられた人間なのさ」

男はそう言つと、

「行くぞ、戌海琴音。お前は決着をつけねばならない。自らの宿命に」

と続けた。

そして少女は錯誤する … 2

私はその場でぽかんと口を開ける。

「宿命？ …… 何の？ 何が？」

「お前は忘れてなどいない。 …… いや、忘れることなどできないはずだ。 奴らの時間錯誤は^{タイムパラドックス}“鍵”には影響しない」

“鍵” ……？ でも、私は現にこうして生まれた街から出た理由を覚えていないのに。

「お前がその身体の中に宿しているモノのことだ」

男はそう言うと、ロングコートの内ポケットからスキットルを取り出す。

「“鍵”であるにも関わらずお前が“街”のことを忘れているのであれば、それは奴らの所為ではない。 お前の心が思い出すことを拒んでいるのだ」

言いながら、スキットルを仰ぐ。 中にはおそらくお酒が入っているのだろう。

…… 電車の中って飲酒オーケーだったけ？

「お前を“鍵”と知ってか知らずか、いったん街の外へ逃がした奴には感謝している。 …… 覚えていないのか？」

私を街から逃がした？

何のために？

誰が？

「あの、竜ヶ峰市はそんなに悪いところじゃないですよ ……？」

そう言つと、男は少し目を見開き、そのあとで「はあ……」とため息をついた。

「そこまで拒絶するほどの何かがあったのか……。お前を逃がそうとした奴が目の前で殺されでもしたか。……お前、恋人はいるのか？」

「……。えええ！？」

いきなりそんなことを聞かれても……。

「……いません」

「……ますます分からんな。お前を街から逃がした奴はよほど歪んでいるのか？……まあいい」

電車がゆつくりと減速していき、停まる。

濁りがかかった車掌のコール。

終点だ。

また、……また、無かった。

男が立ちあがる。

「俺達が行かねばならない。お前は“街”に呼ばれているのだ。……

救いを求める、閉ざされた街にな」

でも、路線の中に『竜ヶ峰』の文字は無かったのだ。

「そこで立ち止まってどうする？ お前の代用はこの世に存在しない。お前がお前である限り、その宿命からは逃れられない」

「でも……」

「知らないことは罪だ、と古き時代の人々は言った。逃げてばかり

では何も解決しない。……お前が街を出た理由を思い出せないのであれば、それを思い出す事がお前自身の闘いとなるのだ」

言ってることは難しくてよくわかんないが、確かにそうだと思うた。

……どうして私は街を出たのか。その理由を忘れてしまったのか。それを思い出すために、私は行かなければならないのかもしれない。

……私が生を受けた、ぬくもりに溢れた、あの街に。

扉が閉まり、電車が動き出す。

私とロングコートの男はしだいに小さくなっていく電車のライトを眺めている。

……だが、私はそれが思い出してはいけない、呪念と歪みと復讐の炎に焼かれた一人の少年を破滅させてしまう原因になってしまうとは、夢にも思っていないのだった。

but 少女は善と悪に乱れ … 1

男は、名を浅滅燎次あさけしりょうじと言った。

彼の話は長いうえに分かりにくかったのだが、要約するところだ。

——今、私の住んでいた“街”はおよそこの世と呼べる位置には存在していないらしい。

そして“街”は現在進行形で“恐鬼”という化け物に支配されようとしている、というのだ。

私はその“街”に住んでいる人の内の誰かに“街”から逃がされたい。

本当なら私はその人のことを覚えているはずなのに、何故か思い出せないのだ。

——これが私の中の一つの鍵。

浅滅の話によれば、私の身体の中には“鍵”というモノが宿っており、その“恐鬼”達はそれ——すなわち私——を狙っているらしい。

「正確には、お前の中にあるモノを“鍵”と呼ぶのだが、お前が死んでしまうと“鍵”も消滅するため、お前自身も“鍵”と呼称されるのだ」

少し前を歩いている浅滅燎次が呟く。

「でも、私が狙われているのなら、わざわざ竜ヶ峰に戻らなくても

いいんじゃない……」

「だから言っただろう。“支配者”は仕掛けをしていやがったんだ。お前が再び街を訪れない限り、街が永遠に救済されないようにな」

支配者……ルラーというのは、“恐鬼”の中でも上位に位置するものの内の一個体を指すらしい。

そいつの話をする時の浅滅の顔を見る限りでは、かなり手ごわいらしいのだ。

「俺が今すべきことは、お前を“街”に連れて行き、それで且つ“支配者”を斃して街を解放することだ」

そう言つと、浅滅は近くを走り過ぎようとした一台のタクシーを呼びとめる。

「お前にもお前の闘いがあるのだ。恐怖に打ち勝ち、それを忘れるな」

タクシーは浅滅と、後から乗り込んだ私を乗せ、数日前まで“竜ヶ峰市”が存在したであろう場所へ向け、走り出した。

but 少女は善と悪に乱れ … 2

——翌日、私と浅滅燎次は竜ヶ峰市が“あつた”ところから二つ街ほど離れた街を歩いていた。

降り注ぐ初夏の日差しを全く気にしている様子も無く、浅滅はロングコートを着たまま前を歩いている。

……なんであんな暑そうなロングコートを着ているのだろう？
聞いたら睨まれそうだから黙っておくけれど。

しばらく歩いていたが、ふと、浅滅が立ち止った。

「……どうしたんです」「黙ってる」

私の声を浅滅の低い声が遮る。

何だろうと思っていると、——しばらくして、分かった。

後ろから、何者かに見られている。

視線を隠そうともししていない、あからさまな敵意が感じられた。

そして次の瞬間、私たちの周りの喧騒が、水を打ったように消えた。

「……!?!」

「……チッ」

浅滅が舌打ちをした音が響く。

カッーン……カッーン……

そして、前から近づいてくる靴でコンクリートを踏みしめているかのような、音。

「お出ましか……」

浅滅が呟くのと同時に、前方二十メートルほどの所に、黒衣の男が姿を現した。

「……やあ、浅滅。いや、“魔弾の狩り人”。その様子では、ずいぶんと限界が近いようだな」

男の声が妙なエコーを伴って響く。

「おかげさまでな」

浅滅がうざったそうに言う。

「ところで、我が同胞をこちらに渡して貰いたいのだが……渡す気は無いか」

「当然だろうが、この外道」

二人の男が会話を続ける中、私の頭にはある疑念が浮かんでいた。

……私は、あの黒衣の男に会ったことがある……？

どこかで、強烈なイメージを受けたかのような、既視感。

……… どういうこと？ もし会ったことがあるのだとすれば、それは私が街を出る直前。

私の中から抜け落ちている、記憶の一部。

「……記憶を亡くしたのか。こちらにとっては好都合だがな」

“男”が低く、地底から響き渡るような声で嗤う。

but 少女は善と悪に乱れ … 3

“男”が一步、前に——こちらの方へ向って——歩いてくる。

「——チッ。逃げるぞ！」

浅滅がロングコートをはためかせながら振り返り、私の手首を掴むといまだに全く音も立てずに周りを歩いていく人々をぬう様にして走り出した。

「ふふははは……」

後ろからあの不気味な声がこだまする中、走り続ける二人の人影。

——気がつけば、辺りにはいつもの喧騒が戻ってきていた。
人々の会話する声。

絶え間なく響く自動車の走行音。

私の前を走るロングコートの男を、周りの人々は怪訝そうな表情で見ている。

……やはりこの初夏の街ではコートは目立つのだろう。
何でこんなロングコートを着ているのだろうか。

「クソが！」

浅滅が手を上げてタクシーを止める。

荒っぽく、開かれたドアから車内に入り、それに私も続いた。

——。

タクシーは、街を離れて山道の相中に差し掛かっていた。
ふと隣の浅滅を見ると、表情を歪めて額に汗を浮かべている。

……さつき黒ローブの男は浅滅に向かって、

「そろそろ限界が近いようだな」と言っていた。

『限界』……何がだろう。

浅滅にも、何か抱えている物があるのだろうか……。

「お客さん、どうしたんですか？ そんなに苦しそうにして
ふいに、タクシーの運転手がこちらに声をかけた。

ミラーに映っている瞳には怪訝そうな表情が浮かんでいた。

「……別に何もない。急いでいるんだ。運転に集中してくれ」
浅滅が面倒くさそうに返す。

「……お客さん、ただならぬ様子でしたよね。もしかしてお客さん、
何か見たんじゃないですか？」

ふいに、運転手がそんなことを言い出した。

「……？」

私と浅滅はきよんとする。

「……何かを見てしまったんじゃないですか？」

ミラーにはこちらを見る、血走った目が映っている。

隣の浅滅を見ると、額の汗は引き、代わりにいつもの彫りの深い
表情が戻っていた。

「世の中にはね、色々怖い事があるもんなんですよ」

「怖い事？」

思わず反応してしまう。

「そう。たとえばね、こんな風に――」

ミラーに映る瞳の奥に怪しげな光が灯った。

「――車を停めろ！」

浅滅が叫んだ。直後にブレーキがかかり、車体は山道の真ん中で急停止をする。

突然の急ブレーキに身体が前に押し出され、前の助手席に頭をぶつけそうになる。

横を見ると、白いガードレールと、その下に流れる青い線。

——川の上だ。

タクシーは橋の上で停まっていた。

橋と言っても、ウェストブリッジほどの大きさのものではない。溪谷に流れる川の上にかけられた、小さな橋だった。

その橋の中央部で、タクシーは停止し、静かにアイドリングの音を上げていた。

「あの……どうし……」

どうしたんですか、と聞こうとして右を向いたところで、私は異変に気付いた。

前の座席に座っている運転手の身体が震えていた。

急停止の衝撃で心筋梗塞にでもなったのかと思ったが、そうではなかった。

私と浅滅が見ている前で、最初は小さかった震えが次第に大きくなり、盛大に身体を揺らし始めた。

痙攣にしても激しすぎる。

発作的に身体をひかせてしまった。分かったからである。

……何か、今から悪い事が起こる。

分かっていた。分かっていたのに、逃げ出すことはできなかった。
運転手の身体は狂ったように座席の上で乱舞を続けている。

「浅滅さん……」

浅滅の方を見ると、彼は冷静にスキットルを仰っていた。

……車の中って飲酒オーケーだったっけ。

「……ハッ。くだんねえ、そういうのにはもうっんざりしてるんだ
よ」

そう言つと、浅滅は扉を開けようとする。

その時だった。

運転手の頭にびりつ、と亀裂が走った。

そのまま後頭部が裂けて横に分かれていき、その間から紅色の丸
い物が飛び出してきた。

but 少女は善と悪に乱れ … 5

目の前で人の頭が真つ二つに裂けた。

衝撃。

驚愕。

そして、恐怖。

「き……きゃあああああああ!!」

私は悲鳴を上げた。当然の反応だと思う。……だよね？

「五月蠅いぞ、戌海琴音」

隣で浅滅が足を組み換えながら気だるそうに言う。

……むしろ、なんで浅滅が驚いてないのかが不思議である。

慣れているのだろうか。出会ったときに彼は言っていた。

自分は“狩り人”である、と。

響きからして、何かと戦ったりする人なんだろうな……とは思っていた。

この態度はそれからくる余裕なのか、はたまた経験の賜物たまものというやつなのだろうか。

……運転手の裂けた頭から飛び出してきた“丸い物”は、ただ紅く、ただ丸いだけではなかった。

紅一色の“それ”は、大きな蕾もたらしかった。それは蕾の後に首から生えてきたどす黒い茎のようなものを擡もたげて、私たちの座っている後部座席の方に“蕾”を向けた。

“それ”の花弁が目の前でゆっくりと開いていく。

そして、花弁の開いた奥には、人間の顔が覗いていた。

次の瞬間、能面だったそれが急に表情を豹変させ、甲高い悲鳴を上げた。

浅滅が悲鳴を上げるその顔面に拳を叩きつけた。

「グギャッ」

奇妙な声を上げながら“蓄”がのけ反る。

「早く外へ出る！」

ドアを荒っぽく開けた浅滅が私の方を向いて叫んだ。

さっと外へ出た浅滅に続き、私も転がるようにして車外に出る。

「痛っ……」

膝を少しすりむいてしまった。

痛みに顔をしかめながら、道路に立つ浅滅を見上げる。

「……ったく。こんなところでのんびりしてる暇はねえんだよ」

そう言つと、浅滅は着ているそのロングコートに手を入れると、

その中から、ショットガンを取り出した。

b u t 少女は善と悪に乱れ … 6 (前書き)

記念すべき(?) (80話目です。

but 少女は善と悪に乱れ … 6

……ショットガン。

一発で数十粒もの小さな鉛玉を銃口から吐き出し、近距離にあるものを蜂の巣にする、近距離戦闘においては他の銃に追隨を許さない銃だ。

ゲームとかでもよく見る銃だ。

ただ、今浅滅あさけしが懐から取り出した物は、銃底と銃身が切り詰められていた。

……いわゆる切り落ソード・オフとしショットガンである。

何で私がこんなにも知っているのか。

それはそこそこ付き合いの長い優等生の男子生徒……大柴優斗との雑談でそういった知識を延々と披露され続けたからである。

……私が出て行ってしまった街は、今化け物に襲われている、と浅滅は言った。

その言葉を信じる限りでは、私を街から出した人……がいたらしい。

……もしかして、私を街から逃がしてくれた人というのは、大柴君のことなのではないだろうか……？

「……ハッ。こんな低級な恐鬼おにを繰り出してきやがるとは、俺も舐められたもんだ」

立ち上がった私の隣で浅滅がソードオフ・ショットガンを構えて吠えるように言う。

車内では、紅の薔がその中央部の白人面を獲物に逃れられた怒り

に歪め、

「きいいいいぎゃあああああ!!」

という狂った叫びを上げながら、運転手の首から伸びる茎をさらに伸ばし、車の横ガラスを突き破った。

「ほざけ、ゴミがッ!!」

そう浅滅が叫んだ瞬間、その手に持っているショットガンが火を吹いた。

同時に、至近距離で発砲したためか、急に大きな発砲音に耳が一瞬间こえなくなる。

「ッつあ……」

思わずかすれた声を上げて耳を押さえ、その場にうずくまってしまふ。

続いて、がしゃっという音……リロードの音だ……がし、再び同じ銃声が身耳を貫く。

「——ッ！」

痛い。耳が壊れそう……。

「我慢しろ！ 死にたくなければな」

浅滅が銃の側面に付いているレバーを引く。

先ほどと同じがしゃっ、という音とともに、空になった薬莢が飛び出す。

……そして、それは乾いた音を立ててアスファルトの上に落ちた。

「つつ……」

痛む耳を押さえながら、ようやく立ち上がり、タクシーを見ると

……タクシーの側面は穴だらけになっていた。

冗談や酔狂ではない。文字通り、穴だらけだった。

「え……」

先ほど狂声を上げながら私たちに襲いかかろうとしていた“蕾”は、粉々になったガラスの向こうで、これまた粉々になって車内の座席に飛び散っていた。

向こう側の窓ガラスには、おそらく“蕾”の体液であろう緑色の毒々しい液体が飛び散っていた。

「あ、あの……」

浅滅の方を向こうとすると、

「ハッ……」

彼は再び銃を構え、弾を詰めている。

そして、また銃声。

「きゃあッ！」

銃声。

また銃声。

……静寂。

「うつ……うつ……」

「泣くなおい、しっかりしろ！」

気がつくとき、浅滅が私の肩を揺さぶっていた。

頭が痛い。

まるで後頭部に重りを付けられたかのような、じわじわと染み
くる鈍痛。

「頭が……痛いです……」

そう言いつと、浅滅は少し顔をしかめた。

「……最初はそんなもんだ。慣れろ」

「慣れろって……」

「すぐにこれを何度も聞く事になる。覚悟を決めろ。理不尽だとは思
うが……な」

そう言いつと、浅滅は立ち上がった。

私も立ち上がる。

すぐに、きつい油のような臭いが鼻をついた。

「……？」

「急ぐぞ。走れ！」

そう言つと、浅滅は私の手を掴み、走り出した。

……あれ？　なんだろう……。

また何か、既視感が……。

そう思いながら後ろを振り向くと

「——！」

タクシーは、後部座席のすぐ後ろ——すなわち、エンジンの辺りから黒煙を上げていた。

これはさすがに自他共に認める機械音痴の私でも分かる。

このままでは、このタクシーは爆発する……！

浅滅はロングコートを着ているにも関わらず、素早かった。それを言うなら戦い慣れている、の方が正しいのかもしれない。

「くそっ……、伏せろッ！」

「きゃっ……」

いきなり身体を地面に倒された。

若干の痛みを感じる。膝をすりむいてしまったかもしれない……。

続いて、耳をつんざくような、爆発音。

一瞬耳が聞こえなくなる。

「つつああ……！」

理不尽だ。あまりにも理不尽すぎる。

状況を脳が追い切れず、怒りの感情だけが頭の中を蝕んでいく。

「くそつたれが……」

浅滅が今だ周囲に残ってい熱風を背に、立ち上がった。というか、あんたが爆発させたんじゃないのか。

私も続いて立ち上がる。

分かっている。……いや、今分かった。

私は今、そういう世界に立っているんだ。とても理不尽で、横暴で、どうしようもない世界の片隅に。

そう思いながら、彼の後を追おうとした時だった。

聞き覚えのある甲高いサイレン音が後ろから近づいてくるのが聞こえた。

浅滅が驚いたように後ろの方へ振り向く。

後ろから迫ってきていたのは、白と黒のカラーに、紅く光るサイレン。

……日本警察のパトカーだった。

私たちが驚いて立ちすくんでいる間に、迫ってきていた二台のパトカーの内の一台が前に停車し、もう一台は背後に横向きに停車した。

ドアが開き、中から制服の警官と私服警官が降りてくる。

私服警官が叫んだ。

「浅滅燎次だな！ 強盗殺人、及び銃刀法違反の容疑で逮捕する！」

あ……。

私は思わず息を漏らした。

そうだ。ショットガンなんて、日本じゃ持っていてはいけなかったのだ。

「クソっ……」

浅滅が前後を塞いでいるパトカーを見、舌打ちをする。

「今すぐその女の子を解放しろ！」

制服の警官も叫んだ。

「……これだから警察って組織は……！」

浅滅がうつなる。

私と言えば、状況を飲み込むので精一杯であった。

「あ、あの……私は別に攫われたりしたわけじゃ「銃を降ろせ！腕を後ろで組んでうつぶせになれ！」

聞いちゃくれなかった。

「クソつたれ共が！ 邪魔するんじゃない！」

浅滅がショットガンを懐にあるであろうホルスターに収め、私の腕を掴んで走り出そうとした。

が。

ぱん、という小さな発砲音がしたかと思うと、浅滅の身体はゆっくりと、ほんとうにゆっくりと、地面に倒れ伏していった。

それでも少女は求め続ける … 1

どさり、という音。

「え……」

足下を見ると、足が何かを踏んでいた。

踏んでいた？ いや、足の下を何かがゆっくり流れているのだ。

……赤い。どろどろした、赤い液体がアスファルトの上を流れている。

……血？

「お、おい、何で撃ったんだ！」

前を向くと、私服の警官が発砲した警官に叱咤を食らわせていた。

「……でも、奴は全国に指名手配されている極悪犯ですよ！ 迷う余地などないです！」

「だからつてな。発砲には許可をだな……」

そこで警官たちは呆然と立ち尽くしている私に気付いたらしい。

私服警官が私の方に駆け寄る。

「君、大丈夫か？」

「……はい」

力無い返事を返すと、警官は少し渋るような顔をした。

……血だ。人の身体を流れる液体。命の象徴。生きるあかし。原動力。

浅滅は倒れたまま、ぴくりとも動かない。動かない。動けない。

何……？ 撃たれた？ 何で……？

「おい、君、本当に大丈夫……」
何だか警官さんの声が遠くで聞こえる。
何だろう？ 何でだろう？

次の瞬間、私の意識は一瞬で、それこそテレビの電源を切ったかのように、途切れた。

。

眼を開くと、そこは真つ白な空間だった。
右も左も無い。
上も下も無い。
私はそこに浮遊していた。

ふいに、目の前に笑顔を浮かべた少女が現れた。

「おはよう、私と私」

「……おはよう」

……誰？

その少女は、白いワンピースを着て、おそらく髪に巻くであろう長いリボンを手にとっていた。

そこで気付いた。

この女の子は私だ。服装は小さい頃のお気に入りと全く同じ。リボンは、今私が巻いている物と一緒にだ。

「私は私と同じもので作られた幻想だよ。……ふふふ、誰の幻想か、分かる？」

誰の……？ どういうことだろうか。

これは私が見ている夢か何かじゃないのだろうか。
「……覚えてないの？……ふふ、無様だね」

そう言われても……。

「何の話……？ 説明してくれないと分からないよ、私」

「分からない？ 覚えてないの間違いでしょう？ ……はあ、どうして幻想の私がオリジナルなんか話しかけているのかしら」

「そんなの……」

知るわけないじゃないの……。

「全く。あなたもそうだけれど、●●君も哀れだよ。私にはどうしても、あなたを逃がすという選択が良い結果を生むとは思ってなかったけれど」

……誰？

そう問うと、少女は――“私”は苦笑を洩らした。

「……そうだったね。そこまで忘れちゃったんだ。かわいそ」

そう言うつと、少女が身をひるがえした。

次の瞬間、目の前には今の私と同じ身長で、同じ姿の“モノ”が立っていた。

「報われないよね。いくらこれが世界の法則だとしても、生命は戦うことから逃れられないのだとしても、いくら平和を語っても、夢物語にすらならないのに」

目の前の“私”の髪がざわざわと湧き立つ。

「……そんなに身がまえなくても大丈夫だよ。私の今のターゲットは●●君なんだから。“恐鬼”は一度定めたターゲットは逃がさないんだよ」

「だから、誰なの？ その人は、誰なの？」

何だかわからない。頭が働かない。

頭の中が、……いや、心が何かを求めているような、そんな感じ。

「……ふふふ、そろそろ時間だね。偽物の出番はここまでだよ。……
せいぜい、あなたも“鍵”として、この盤上の負け試合を踊り狂
うといいよ。“私”もその駒のうちの一つの訳だしね」

そう言つと、私の姿をした“私”はふつとその姿を消した。

……後に残るのは、真っ白な空間のみ……。

それでも少女は求め続ける … 2

——七月末明、樵芽市警察署。

その建物の中の長い廊下を、守宮洋警部は足早に歩いていた。

……面倒なことになった。

実は最近数週間の間に、全国で異様な怪事件が起こっているのがある。

その名も、『日本全国各地、記憶喪失者多発事件』。

始まりは、ささいなことだった。

ある政治家が、ニュース番組の絡みの中で、ふと漏らした言葉。

……自分の出身地が、思い出せないんですよ……。

その政治家の話では、ふと自分の出身地がどこだったかを思い出そうとしたが、思い出せないという至ってシンプルなものだった。自分も年なのか、なににせよ、何かの勘違いであることに間違いはないだろう、と言って、政治家はその場を締めくくった。

だがその後、各地で同じような現象に陥っている人々が現れたのだ。

ある人は虚ろな状態で、ある人は健康な状態で。

共通しているのは、皆がそろって関東方面のなまりがあること。そして、全員が自分の出身地を忘れている、ということだ。

記憶喪失者であったり、そういうたぐいの人間はよく保護される

のだが、今回の事件は異常の一言に尽きる。

全国の警察、いや、日本警察のほぼ全体で対策本部なるものが作られていたのだが、状況も原因も、先ほど述べた事実以外は共通する部分も無い。

まあ、自分の警備する市ではそのような被害者もおらず、自分の所属する署は関係しないだろうと思っていたのだが。

——現れたのである。

昨日、郊外の山道で保護された少女。名前は戌海琴音。

彼女の場合は少し特異なケースだった。

彼女は、自分の出身地から出た理由が思い出せないらしい。

しかし、彼女の話はいささか現実的には考えにくい話で、少々精神が混乱しているものと見られる。

何日か様子を見ることにしたはいいが、下を向いて沈んだように何も話さない少女を見ると、なんだかこちらも鬱な気分になってくる。

だが、この少女から話を聞かないことには何も進まないのだ。——戌海琴音という少女は、今回の怪事件の力ギになってくる少女だと俺は考えている。

そう考えながら、俺は男子トイレの中に足を踏み入れた。

しかし、何も分からない状況だということを除いても、厄介な事件であることに変わりはないだろう。

そう、考えた時だった。

ふと、目の前の鏡が眼に入った。

違和感。

そして、気付く。

……今俺は手を洗っている。だが、この鏡の中の俺は、手も洗わずに、俺を冷やかに見つめているのだ。

それでも少女は求め続ける … 3

「な、何が起こつて……」

その場で硬直する。

何かのいたずらか！？ いや、いくらなんでも鏡に細工をするなんて大げさなことをするような奴はこの署にはいないはず……。

あぐりと大口を開けて見ているはずなのに、鏡の中の自分は面无表情だった。

振り返る。誰もいない。

前を見る。自分が無表情で立っている。

“それ”は全くもって異質だった。異形でもあった。

鏡の中の“それ”が自分ではない、とはつきり認識できた。ふいに無表情を貫いていた“それ”の両眼が怪しい光を放った。

そして表情を一変させ、口の端を引き上げて笑ったのが見えた。

ふと、頭の中でドッペルゲンガーという都市伝説を思い出した。

自分の姿をした自分とは違う存在。しかし、自分の目の前のものは明らかな悪意を持っていた。

同時に、自分の心に何か不穏なものが溢れてくるのを感じた。

それは、紛れもない『恐怖』。それは急に自分の心を浸食し、またたく間に意識が蒼白に染まった。

まるで、魂を抜き取られてしまったかのような空虚だけが残った。

意識を失いそうになる刹那、“それ”は流れるような動作で両手を伸ばしてきた。

鏡の、平面から実体化してきた腕が自分の頭をがしつと掴む。

次の瞬間、驚くような速さで自分の身体が鏡に引き込まれていくのが分かった。

鏡は割れもせず、それを受け入れる。

トイレの蛍光灯が二、三度輝き、消える。

しばらく男子トイレの中は暗闇に包まれていた。
音の無い静寂が続く。

しばらくして天井の蛍光灯がバチツと音を立てて点き、トイレの中に明かりが戻った。

青白い照明に照らされ、そこには何事もなかったように“守宮洋”が立っていた。

“それ”はしばらく身じろぎもせず、鏡の中の自分を見つめていたが、やがて、踵をかえし、男子トイレを出て行った。

長い廊下をぎくしゃくした動作で、まるで歩くのに慣れていないかのような“それ”の影は、不穏を纏^{まと}っていた。

それでも少女は求め続ける … 4

d
e

Re : K O T O N E s i

……真っ白だった意識が徐々に色を取り戻していく。

目が覚めると、見慣れない天井が視界に入ってきた。
どうやら自分はベッドに寝かされているらしい。

「……？」

しだいに思い出していく。

銃声。倒れた浅滅。……血。

「……あ……」

そうだ。浅滅は撃たれてしまったのだ。

しんでしまったのだ。

「うつ……うつ……」

思わず涙があふれてくる。

何でだろう。どうしてこんなに人と別れてしまうことが辛いのだろうか。

わたしは置き去りにされることを恐れているのだろうか……。

そう思っていた時、部屋のドアが開き、私服の警官が入ってきた。

「目が覚めたのか。大丈夫かい？」
「……はい」

力無く答えると、警官は少し困ったような顔をした。

「……済まないな。人が撃たれてしまふところを見せてしまつて」

「……どうして、あの人を撃つたんですか」

訊かずにはいらなかった。何がそうさせているのか、私の中の
何かが訊かないことを許さなかった。

「……浅滅燎次。彼は今全国で指名手配されている、極悪犯なんだ
よ」

「え……？」

「強盗殺人、銃刀法違反の常習犯でね。被害者も子供から大人まで
様々。身元も情報も無い、ある意味では一番厄介な奴だ。……君が
こうして無傷で居るのが不思議なくらいだ」

殺人……。

でも、あの人は……浅滅さんは私に関する何かについて詳しく知
っているようだった。

警官が室内の無線で仲間を呼んでいた。

私はおそらく、これから取調室に連れて行かれるのだろう。……

だが、どう説明すればよいのだろうか。

しばらくして、制服を着た警官が二人、部屋に入ってきた。

それでも少女は求め続ける … 5

二人の制服警官は部屋へ入ると、ドアの前に立ったまま、こちらを見ていた。

「心配しないでいい。ここは警察署の中だ。奴もここまでは追ってはこない」

私服の警官が言った。

どうやら突然自分や警官が現れ、私が困惑しているのと思ったようだ。

確かに困惑はしてるけれど、私が心配しているのは浅滅のことだ。

「奴に関しては謎な部分が多い。年齢、出身などの情報が全くないんだ。しかも、昔から犯罪を繰り返していて、大声じゃ言えないけれど、警察の中ではトップシークレットに相当する人物だ」

「何で、私たちがあの橋の上に居るって分かったんですか？」

「君の乗っていた、タクシーがあっただろう？ あれの運転手から通報があつたのさ」

運転手。車の中で突然、変異を起こした、化け物が。

先手を取っていたらしい。

「とりあえず、君には申し訳ないが、さっきと同じで、記憶の話をしてもらっけれどいいかい？」

少し間を空け、「……はい」と返事をする。

「じゃあ、君が浅滅に会ったっていう電車のところからもう一度…

…」

そう警官が言った時、部屋のドアが静かに開いた。

その向こうには、さっき入ってきた二人の警官と同じように制服を着た警官が立っていた。

警官は、ぎくしゃくとした足取りで、中へ入ってくる。

「ああ、守宮さんじゃないですか。どうしたんですか？」

ドアの前に立っていた警官のうち一人がそう話しかけた、その時。

耳をつんざくような、ぱん、という音。

銃声だ。今度は一瞬で理解出来た。

「え……」

制服の警官が自分の腹部を見下ろす。

そこには、どす黒い染みが広がり始めていた。

先ほど入ってきた守宮と呼ばれた警官は、手にリボルバーを握っていた。

あの形は大柴君にさんざん見せられたことのあるものだ。

S & a m p ; W。スミスアンドウェッソンという警官に支給される銃の内の一つ。

たしか、いくつかその中にも種類があるらしいが、会話に疲れて、それ以上は大柴君の聞いていなかった。

銃の先から青白く、細い煙が上がっている。

今の銃声は、これのものだろう。

「あ…… ああ……」

どさ、と音を立て、制服の警官が地に崩れ落ちた。

守宮と呼ばれた警官はというと、無表情で銃を再装填している。
振り向く。

“守宮”より先に入っただちのうちのもう一人の制服警官の方に、銃口が向けられた。

「ちょ、守宮さ……」

ぱあん、

どさ、

「あ……嫌……」

声が漏れた。

“守宮”が呆然としていた私と私服警官の方を向いた。

「ヴウウ……ガ……ギ……」

その無表情の口から、およそモノとは信じがたいほど濁った声をあげる。

「……下がっていて」

気がつくと、私服の警官が私の前に立っていた。

「ガギ……ルラ、ア、ザマニ……ガギ……ヲ」

その手に無造作に握られている拳銃がゆっくりと上げられ、私服警官の方を向く。

「くっ……一体何が……」

「……その人、多分もう“守宮さん”じゃないです」

「え……?」

私服警官がこちらに目を流す。

「何かに乗っ取られた、タイプです。そういうのもいる……と、浅滅さんが言っていました」

「なんでここで指名手配犯の話をするんだ……？」
そう言いながら、私服警官がうなるように目を伏せる。

ぱぁん、

銃声。

「ぐっ……」

腹を撃たれたらしい私服警官がうずくまる。

「バガメ……タダノ」人間ノ分際デ、出しゃばるカラダ」

“守宮”が拳銃を投げ捨てた。

からから、と銃は床を滑り、制服警官の死体に当たって止まる。

「サア、私と共に来い。“支配者”は待っている」

いつのまにか流暢にしゃべりだした“守宮”がこちらを見据える。

その目に生氣は……無い。

「……嫌だよ。あなたたちの元には、行かない」

「そうか……残念ダ」

そう言った途端、“守宮”の身体がああ運動手と同じように痙攣を始めた。

それでも少女は求め続ける … 6

痙攣はしだいに激しくなっていく。

やっぱり。運転手——“蕾”の時と同じだ。

これが、奴らの変異の仕方なのだ。

少し狂い目のタップダンスを踊っている“守宮”の身体を見ながら、実を言つと、私はどうしたらいいのか全く分かっていなかった。さつきは武器があつた。……じゃない、武器を持った浅滅が居た。でも今は……。

周りを見回す。残念なことに、窓は無い。密室だ。

そうこうしているうちに突如、めりめり、というまるで木をへし折つたような音を立てて、“守宮”の頭が登頂から半分に分かれていった。

これも、さつきと同じ。でも、

「い、厭^{いや}あああああああああああ！！」
慣れられるわけがない。

まるで昆虫がさなぎから羽化するかのように、その分かれ目から、数本の脚が出てきた。

長く、蜘蛛の足のような“それ”は節々に羽毛のごとく毛が生えており、先端には鋭いかぎ爪がついていた。

8本——今目測で数えたら8本だった——の脚の後から、続いて

頭が出てくる。

蜘蛛の顔を巨大化したようなものが出てくると思っていたのだが、違った。

緑色の複眼。

大きなアゴ。

ギザギザとした、稲妻のような形の触角。

——昆虫の頭部だった。といっても、何の虫かは分からない。

……人間の意識というものは本当に不可解なもので、嫌なモノをそうだと認識したとたん、意識を保つために現実から目を逸らす。私もそうだった。この状況で、足どころか身体じゅうが震えているというのに、何故か頭には浅滅が歩きながら話していた言葉の一節が浮かんでいた。

「^{おに}恐鬼……。恐怖を喰らい、闇に潜む悪意の創元……」

「ぶつぶ……。魔弾に教わったのか。言っておくが、あいつも俺達と同類だぞ」

昆虫の頭部があごを動かし、しゃべる。

魔弾……。確か、浅滅を黒ローブの男がそう呼んでいたような……。

そう思いながらベットの上を後ずさる。

ふと、部屋のドアの向こうに影が見えた。

よく見ると、部屋の外から中を窺っているらしい警官が見えた。

駄目だ。あれでは簡単にこいつに気付かれてしまう。相手は化け物なのだ。不意打ちが通じるはずがない。

「負々……、お前の中に蠢く恐怖を感じるぞ。おお……凄い、これが、“鍵”の力の片鱗か……！」

昆虫頭がぐきいいいと奇怪な音を立てながら上を向いた。

「ふふふふどうだ恐ろしいか怖いか恐怖を感じるか。もっと恐ろしい物を見せてやろうか、さあ、さあ、さあ……！」

そう“昆虫”が叫んだ瞬間、その八本の足のうちの二本が伸びていき、部屋の向こうに廊下に消え、しばらくして、

「うごはっ……」

首を絞め付けられた警官を引きずって部屋の中へ戻ってきた。

やはり、気付かれていたようだ。

それでも少女は求め続ける … 7

長い悲鳴が続いた。

首を絞めつけられた警官たちのその声がしだいに小さくなって、かすれ声のようになっていく。

……吸われているのだ。感情を。

首を締め付けることによって、死への恐怖を誘発させているのだと分かった。

「恐怖……恐怖、恐怖恐怖恐怖恐怖恐怖、恐怖……！」

“昆虫”の頭部が擦^ねじ切れそうに上や横を向く。

「最高だ……。ふぶふぶふぶ……」

既に二人の警官はぐったりしており、その顔に生氣は無かった。

「次は、お前の番」

急にその緑色の複眼をこちらに向け、“昆虫”が流暢なしゃがれ声で云った。

「うつ、く……」

目の前で人がいたぶられている。それも、怪物に。

冗談じゃない、精神的には十分すぎるくらい香辛料だ。

「つく、い、嫌……」

こちらを見続ける複眼から目が逸らせない。だんだんとその眼が近づいてくるかのような錯覚を覚える。

一歩、また一歩、怪物がこちらに近づいてくる。

今思い出した、若干カマキリに似たその頭部のアゴから粘液が地面に滴る。

どれもこれも、この化け物を構成する“全て”が、人間の恐怖を呼び起こすためのものでしかない。

奴らは姿形をターゲットの恐怖するものに变化させる、と浅滅は言っていた。

つまり、“恐鬼”にとつては、それらの取りうるありとあらゆる姿は仮初のものでしかなく、本当は、そもそも実体が無いのである。かちかち、とアゴがぶつかりあい、目の前の餌——私のことだ——を襲うのが今か今かと待っている風だった。

恐怖を抱いてはいけない、と思いつつも、心の中に溢れてくる負の感情を止めることは出来なかった。

「そつだ、恐怖だ。もっと……もっと!」

“昆虫”の頭がアゴをかちかちとぶつかりあわせながら、叫ぶ。

「嫌あああああ!」

それにつられて絶叫が口から出てしまった。

それに呼応するように、恐怖がさらに高まっていく。

それでも少女は求め続ける
… 8 (前書き)

90話目です。なんか普通に百行ってしまいそうです。話があんま進みませんorz

それでも少女は求め続ける … 8

…… もう駄目だ、喰われる！

そう思った時だった。

横合いから銃声が轟いた。

「グギヤアッ！」

銃弾は、“昆虫”の頭部を空气中に破裂するように散らし、向かって右の壁に胴体を叩きつけた。

左を向くと、ドアから死んだはずの浅滅がショットガンを片手に持って部屋に入ってくるのが見えた。

「あ、浅滅さん！？」

ショットガンの銃口からは青白い煙がたなびいていた。

「まったく、銃は便利だが、喰らう危険もあるのがたまに傷だ……」

そんなまさか。

銃弾を受けて、血を流して、そのまま生きていられる人間なんているわけがない。

でも、今私の目の前の浅滅は生きている。

生きて、ここまで来ている。

何で……。

視界の端で“昆虫”の身体が蠢いているのが分かった。思わずそちらを向く。

肩から上が無い状態の魔物は、ゆっくりと立ち上がり、長い、触手の様な昆虫のそのような足を地面につけ、再び痙攣を始めた。首のあった付け根から、再びカマキリの様な頭がにょきつと出現し、今度は背中から、広げて四メートル近くある、蝙蝠の様な翼が出てきた。

粘液に覆われた複眼が再び怪しい光を放つ。

「キジャアアアアアアアアアアアアアアア」

「きゃああああああああああああああ」

“昆虫”の叫びに、感情が刺激され、恐怖が心の底から湧き出る。

「五月蠅い！！ そんな子供騙しにはもううんざりなんだ！」

浅滅が空葉莢をはじき出し、再び銃を撃った。

銃声。

今度は銃弾は魔物の胴体に穴を開けた。内蔵のような緑色の粘着質のものが壁に叩きつけられる。

「くくくくく。ぐききぐくく……」

それでも“昆虫”は奇怪な音を洩らしながら立っていた。

「くくくくくくヒヤアアアアアアアアアア！」

「五月蠅いっつってんだろぅがッ」

飛びかかっていく“昆虫”に向かって、浅滅が三発目を放った。

魔物の右翼が飛散する。勢いに、先ほど撃ち抜かれていた胴体がちぎれ、“昆虫”はその勢いのまま、地面にたたきつけられた。

それでも少女は求め続ける … 9（前書き）

再開します。気が付いたら第100部いつてると思える今日この頃。

それでも少女は求め続ける … 9

ショットガンで三発分の鉛玉の大群に身体を引き裂かれた怪物は、床に倒れ伏したきり、動かなくなつた。

破片やおそらく体液であろう緑色の液体が床を流れていく。

「おい、戌海」

「……」

「おい、“鍵”」

「……」

「おい！ 記憶喪失者！」

「あ、はい！」

呆然としていて浅滅がすぐ近くに来ていることに気がつかなかった。
あさけし

「ったく……」

そう言つと、浅滅は片手に持っていた斬り落^{ソイド・オフ}としョットガンを懷にしまった。

ロングコートがはためいた隙間から、革製のホルスターのようなものが見えた。

「……急ぐぞ。俺達は鬨いに乗り遅れている。ただでさえ人質が戦鬨から除外されている状況なのだ」

「“街”に戻るんですか？」

「ああ」

そう言つと、浅滅は死体や遺骸には目もくれず、すたすたと部屋を出ていこうとする。

「あ、あの」

浅滅が歩を止め、振り向く。

「何だ？」

「怪物が“いる”ことは納得できました。でも、あなたは……どうして戦っているんですか？」

浅滅は一瞬怪訝そうな、面倒くさそうな顔をしたが、すぐに、
「戦っているんじゃない。戦わなければならないのだ。それが、世界の法則だからな」

そう返し、再び早足で歩いて行った。

私が警察署の玄関から出ると、急に目の前でトヨタの……よくわからないが、こう、山道でも余裕で走り抜けそうな車が止まった。
ちなみに私は車には詳しくない。

運転席のガラスから浅滅の横顔が見えた。
どうやら彼の車らしい。

しかし、どこに置いてあったのだろうか。

わたしだって、そこまで空気の読めない人間ではないつもりだ。
すぐに、助手席のドアを開け、中に飛び込む。

「これ、あなたのですか？」

「いや、さっきそこにいた小太りの男から借りた」

聞くと、浅滅は当然のようにきっぱりと答えた。

「え……」

「警察という組織は厄介だ。人数で優劣が決まるのは戦闘を行う上では常識だが」

知らないわよ。

「こつも人数が多くては、話をしても通じない。もう飽き飽きしてるんだ、こんな茶番には」

浅滅が勢いよくアクセルを踏み込む。

「……ッ」

勢いに座席にめり込みそうな錯覚に囚われた。

ほどなく、後ろの方からサイレンの音が聞こえてきた。

「チッ……」

「あの……」

「何だ！」

「そういえば、どうして、あの警察署に来れたんですか？ それに銃に……撃たれてたのに……」

疑問だった。

警察は気を失った私を、パトカーに乗せて警察署まで運んだのだから。

だが、道路に倒れていた浅滅はどうしてあそこが分かったのだろうか。

「俺は死ねないんだ。死にたくても、な」

「死ねない……？」

不老不死ということだろうか……。

「それとは違う。他の人間より少し寿命が長く、少し身体が頑丈なだけだ。役目を終えるまで、その身が枯れることはない」

「そんな……」

どこかの哲学者が言っていた。

死ぬことは虚無であり、生物にとって永遠の謎だ。

だが、生きていること自体が、苦痛なのではないのか。

……たしか、そんな内容だった。

「酷いと思うか？　だが、これは俺自身が選んだことだ。誰のせいでもない。俺だって、三百年前まではこういう不幸に巻き込まれた、ただの男だったからな」

ん……？

「さ、三百……」

「ああ」

しだいにパトカーのサイレンが遠ざかっていくのが分かった。

「油断するな。日本の警察は仕事熱心だからな」

浅滅が、会話を切るように、そう言った。

だからこそ、少女は進む … 1

。

「……着いたぞ」

「着いたぞ、って……言われても……」

車はいくつか山を越え、山道を走り、海辺の舗装されたアスファルトの上を走り続けた。

そして、そろそろ半日経ったかなーと思いだしたところで、浅滅は車を停めたのである。

窓から辺りを見回すが、右は山。というか緑。
左は海。遠くには海岸線。

「あの……」

「何だ」

「一つ良いですか」

「何だ」

「……ここ、何処ですか？」

浅滅はしばらく黙ると、

「……ここは五日前まで龍ヶ峰市だった場所だ」
と言った。

……“だった”。

過去形なところがしっくりこない。

……あれ？ 過去形なところが……って、どこかで感じたような。

またデジャヴだ。

抜け落ちた記憶。

既視感。違和感。

なんなんだろう。なんなんだろう。

「今、街は存在していない」

「どうということ……」

浅滅はまたしばらく黙る。

「そのままの意味だ。奴らは狩り場を決めると、まず時間をかけて街を浸食し、その後に街を自分たちのフィールドに映すのだ。結論から言うと、今、街は異空間にある」

異空間……。

異なる空間。つまり、この世界には、空間には存在していないということか。

だからこそ、少女は進む … 2

異質。

異なり、異なるもの。

「そうだ。まあ、そんなに常に来るわけじゃないがな」

浅滅は近くの脇道に車を入れると、静かにドアを開いた。

さっと飛び出て、元来た道を確認する。追手が来ていないか見ているのだろう。

ロングコートを翻し、浅滅は海岸に広がる草原の方へ向って歩き出した。

私はそれに続く。

「車は、乗り捨てるんですか？」

「ああ。いちいち構っている暇はない」

違法だよ……。

浅滅はふと、海の方を見た。

私もそれにつられてしまう。

海は美しかった。地平線には日差しに反射した波面が光り、空との境界線はどこか儚げで……。

……もう少しでたどり着ける。私の生まれた街に。私の記憶に。

あと少しで……。真実に、偽疑に。

草原を歩く浅滅に、私も続く。

見渡す限り、草原。街ひとつ分くらいあるだろう広さの草原。

ここが、龍ヶ峰市だ。解る。

理由は無い。だが、感じるものがあつた。

「それは……。もしかすると、“逸れ者”か？」
逸れ者……？

「……いや、なんでもない」
また何か新しい情報だろうか。だとしたら、隠しているのはなん
でだろう。

しかし、何で私は冷静なのだろうか。

「“鍵”は“逸れ者”に魅かれ、共鳴し、対の存在となる。理不尽
で、不合理な世界の法則さ」

また私の分からないことを浅滅さんが話し出した。

まあ、独り言だろうけど。

「しかし……」

「何ですか？」

「いや、お前の“逸れ者”はよっぽど冷た……」

最後まででは聞き取れなかった。

逸れ者……。鍵とは別に、誰かそういう存在が居るのだろうか……

…。

だからこそ、少女は進む … 3

しばらく延々と続く草原を歩き続けていたが、ふと。

「……………」

目の前の景色が揺らいだ気がした。

「見つけたぞ」

浅滅はそう言つと、先ほどよりも速度を上げて歩き始めた。

私はあわててそれに着いて行く。

「『見つけた』って、何をですか？」

「次元の綻びだ。……………いいか？」

浅滅は立ち止まると、前を見据えたまま話し出した。

「今、龍ヶ峰という街はここに存在している。日が立てば“移動”するが、まだこの場所に留まっているのだ。別の空間に存在しているが、な」

「……………ここにあるが、ここに無い」

「そうだ。今この空間は矛盾に溢れている。存在自体がなかったことにされた街、無かったことにされた記憶、人間。タイムパラドックス歴史修正は今も行われている。だが、その世界の作業中に隙が出来ることがあるのだ。それを、“綻び”と呼ぶ」

“綻び”……………。そこに突け入れれば、“街”に入ることができるの
だろうか。

「その通りだ」

そう言うと、浅滅は再び歩き出した。

風景が陽炎のように揺れていく。

そうしていると、揺らいでいく視界の先に見えたものがあつた。

草原の中の小高い丘。その上にぽつんと建っている、一軒の、

「教会……？」
である。

それを視認した瞬間、景色の揺らぎがぴたりと止まった。
目の前には丘。教会。

「畏……か」

見ると、浅滅は状況を楽しむかのような顔をしていた。

「ふざけやがって……！！」
違った。怒っていた。

「……行くぞ」

「え、でも……」

畏なのではないのか。

「“街”を囲われた時点で俺達側は不利な状況に立っているんだ。
畏と分かっているけど、行くしか道はない」

。

その教会は、本当に小さなものだった。
ただ入口の扉は豪勢な彫りがなされており、侵入者を阻むような、

そんな印象を受けた。

その扉を浅滅が蹴り開ける。

中には誰もいない。

静寂。

「おい、クソ野郎。いるんだろうが、出てきやがれ！」
浅滅が教壇の方を向いて叫んだ。

しばし静寂。

そして、それを破る、嗤い声。

「ふふ、ははははは……」

地の底から響いてくるような低い声がしばらく鳴り響き、
「その姿は“魔弾”か。まだくたばっていないなかったとはな、正直驚きだ」

と言いながら、前方に、男が姿を現した。

黒いローブに身を包んだ、西洋系の血の入っている男……。

「ううっ……」

「どうした!？」

「あ、頭が……」

痛い。頭痛がする。

既視感……いや、そんなものではない。
私は、この男が、恐い……!!

だからこそ、少女は進む … 4

恐い。これは、恐怖なんてものではない。

全身から堕ちた悪意を波動のように放つ、黒ローブの男。

まるで、最悪の体現のようだ、と言うべきか。

「くっ……」

浅滅が顔をゆがませる。

「ふん、“魔弾”よ。限界の近いお前など私の敵ではないということが解らないのか？ わざわざ“鍵”を連れてきたことには感謝するべきなのだろうが、な」

「ハッ……。うるせえよ、俺は決着を着けるまでは死ねない。絶対にな」

「ふ、ははは、はははははは……」

男のやむことのない嗤い声が再び響く。

「お前は何も解っていない、解ってない。所詮人間如きに我々を根絶させることなど出来ないのだ。“我々”と貴様たちは捕食者と被食者の関係にある。それは覆すことの出来ない、世界の法則だ」

「ふははは、笑いが止まらないぞ“魔弾”よ。今の貴様に何が出来る？ 罠に飛び込むような真似をして、生きて帰れるとも思っているのか」

「五月蠅いっつってんだろが！ “支配者”^{ルラー}、手前には関係ない」

「ふはは、だろうな。貴様との決着も今回で着きそうだ。だが……」

“支配者”と呼ばれる男が右手を空中に上げた。

「貴様とはここでお別れた。せいぜい他の綻びを捜して彷徨うがい。だが……、貴様のことだ。“街”に入ってくるのも時間の問題だな」

その手の先から、金属の小さな十字架の様なものが出現した。その十字架は虚空に浮かび、ひゅんひゅんと回転を始めた。

「ふふははは、貴様ら人間だけが進化しているわけではない。“我々”だって、進んでいく」

高速回転をする十字架がしだいに白い光を帯び始める。

光はすぐに、目をそらしたくなるような閃光に変わった。

「……ッ」

断続的に続く光に、思わず目を瞑ってしまう。

だからこそ、少女は進む … 5

光球と化した十字架がひゅんひゅと音を立てている。

「くッ……手前え……」

「ふはは……^{セラフイム}光球からは逃れられない。貴様らには所詮最初から勝ち目などないのだ」

“^{ルラー}支配者” がにやり、と顔を歪ませる。こちらは笑っている。

「……“鍵”よ」

「……ッ！」

数秒してから自分が呼ばれたのだと気付き、身を竦ませる。

「お前は解ってない。自分が如何ほどに重要な存在なのか、どれだけの力を秘めているのかをな」

「力……？ そんなもの、無い」

自分は無力で非力な高校生でしかない、はずだ。

「違うな。やはりお前は解っていない」

「でも……」

「止める、戌海。こいつと問答しても仕方ない、無意味だ！」

浅滅がなおも言おうとする私を制する。

「ふふ、こちらとて、つまらない押し問答などをしている場合ではないのだ。^{ゲーム}試合の駒は揃った。まずは、“鍵”を頂いて行く」
そう“^{ルラー}支配者”が言った次の瞬間、光球がひときわ強い光を放った。

「なッ！？ 待て！」

浅滅が叫ぶ声が遠のいていく。

光で視界が真っ白になり、一瞬で意識を持って行かれた。

「……クソっ！！」

「ふふ、先手は取った。せいぜい貴様らはあがき続ければいい。そうでなければ、ゲームは面白くないからな」

そう言う“支配者”^{ルラー}の低く、響く嗤い声が耳に残り、

私の意識は、闇に堕ちた。

だからこそ、少女は進む … 5（後書き）

ようやく次から、響輝君のターンです。

例えば少年の場合 … 1 (前書き)

久々の主人公降臨。

胸が高鳴ります。

…… え？ 僕だけ？

例えば少年の場合 … 1

d e

H I B I K I S i

例えば、だ。

ホラーだとか、アクション系だとか、そういう世界に自分が放り込まれたと想像してほしい。

何でも構わない。化け物でも、ゾンビでもいい。

そこにいる自分は、はたしてどう行動するだろうか。想像してみてほしい。

戦う？ 仲間を集める？ 立てこもる？ 何かの力が発動する？ ヒロインを守る？

思い浮かべただろうか。

答えは、全て。今考えたこと全てを実践しないと、自分が生き残ることは、出来ない。

つまるところ、自身の潜在意識は、自分にとって必要なことは状況に応じて瞬時に考え付くことができるものなのだ。

。

「だから、何なんですか？」

「いや、結局やれること全部やらないと心残りが出来るんだな、と」

だから、何の話なんですか……。と俺の隣の銀髪の少女——祇園、鈴——は呟いた。

「……軽口を叩いている場合ではないですよ、巽野さん。今どういう状況か分かってるんですか？」

勿論分かっているとも。

——龍ヶ峰市の四区の内の一つ、東区に入った俺、巽野響輝と自身も俺と同じ存在であると名乗った祇園鈴は、北上する最中にまだ生き残っている人間を発見した。

俺としては別に見捨てても身捨てなくてもよかったのだが、俺の横を走る大鎌使いの少女はそんな俺の態度をお気に召さなかったように、冷やかな視線を浴びながら、人々との協力を図ることにしたので。

それで、もうお決まりのパターンとも言えるか、逃げまどう身一つの人間では戦力にならないため、必然的にどこかへ立てこもらなければならなかったのである。

そこが、俺達が今いる、私立龍ヶ峰東高等学校である。

そして、教室（何階のどこの教室かなんてものを気にしている暇はないのだ。少なくとも二階より上である）の窓から外を窺う鈴に俺は叱咤激励を受けていたのであった……。

「こんなところか？」

「わかっているならいいです。……全く、あなたは危機感が足りないのではないですか？　どこか、何かを諦めているような気もしま

すが」

大鎌を肩に担いで端正な顔を向けている鈴がため息と共に言う。

『ふん、銀髪よ。“ような”ではない、諦めているのだ、こいつはこいつの人生は既に仮初のものでしかない、そういう意味では諦めているというよりはやる気が無い、の方が正しいか』

「五月蠅いぞ、ハーテッド。最近しゃべってないと思ったら何だ。俺に関するネタばれは止せ」

『……常識を覆されたコンピューターの身にもなってくれ』

なれるか。俺はれっきとした人類だ。

「……では、“逸れ者”とは、“鍵”とは、何なのでしょうか……」
急に目を伏せた鈴がかすれるような声で言う。

何を言い出すかと思ったら、何だよ。俺より事に精通してるだろうが、お前の方が。

「世界の法則。決められた、理不尽な規則。運命。宿命。どの言葉で表しても、私にはいまだに納得できない。どうして、“あの子”は死ななければならなかったのか……」

……どうやらこいつにも色々と事情があるらしい。踏み込むつもりは微塵も無いがな。

例えば少年の場合 … 2

「私は“逸^{はく}れ者”です。人間からほんのちよつとだけ逸れた存在。私にも、対応する“鍵”はいました」

もう、ずいぶん昔の話ですが。と鈴は付け加えるように言った。

「いました、ってことは……」
やはり、この街のように……。

「はい。私が住んでいた町も、この街のように……。そして、その時に私と対応する“鍵”であつた親友は、あの男……。 “支配^ル者”に取り込まれたのです。私が今この閉ざされた街にわざわざ入っているのも、あの化け物に報復するためという理由が大きいです」

「報復……」

報復。憎き相手に、自分の大切な人を奪つた者へ、復讐の鉄槌を。そう言う祇園鈴の無表情な顔は、酷く、哀しげに俺の目に映つた。……いや、過剰表現だな。

正直に言おう。俺は、この目の前の“復讐”という残留呪念に囚われている少女を、かつての自分に重ねていた。

その眼は何かを決意したかのように据わっており、武器を握る手はそれを目標へ振るう時を待ちながら震えている。そうだ。こいつは、俺に似ているのだ。

そもそも、俺はそんなに人と関わらないタイプの人間だ。なのに、

あの浜辺で俺はこいつと大して警戒することもなく話していた。

分かっていたのだ。いや、解っていたのだ。恥ずかしながら、歡喜に震えていたと言ってもいい。自分と同じ匂いがする者を見つけ、“俺”はこの歪みきつた心のどこかで、安心感を得ていたのだ。

「……？ どうしたんですか？ 人の顔をじろじろと眺めて。舐めるように」

舐めるようには余計だ、誤解を呼ぶだろうが。

「あなたは、私と“同じ”です。纏っている空気、眼のくすんだ輝き、戦う時の拳動。すべてが、どこか共通している」

いいツーマンセルですよ、と少女は言った。

余計な御世話だ、と俺は言った。

「……気付かれましたね」

しばらくして、鈴が透明な窓から外を——それも、空を——見ながら、顔を歪ませた。

「飛行ができる羽を持った“恐鬼”です。あれは……あえて言うなら鳥人間のようなものでしょうか」

いまさらだが、俺達は見張りの係となっている。

残りの人数の中にも、戦闘意欲のある人が二、三人いたのだが、彼らには残りの非戦闘に属する人々に（こちらの方が多数である）付いてもらっている。

俺たちみたいなガキを信用出来るのか。

きつと彼らは俺達と出会ったときにそう思ったに違いない。俺も信用されるとは思っていなかった。

だが、彼らの目の前で祇園鈴がその華麗かつ残忍な鎌さばきで百足のような“恐鬼”数体を瞬殺した後は、誰もが俺達の話をまじめに聞くようになっていた。

俺達である。当然、何故か俺も含まれている。

全く、何の冗談だよ、頭痛が止まないぞ。

『響輝よ』

「何だ」

突然ハーテッドが話しかけてきた。

『お前は、どうするつもりなのだ。この際だから聞こう。聞いてやる。……お前は、生きる気はあるのか？』

「無いね」

即答である。清々しいまでに。全然清くないが。

『では、なぜお前は今ここに要る？』

「居るからだろう？」

『答えになっていないぞ、誤魔化し馬鹿が』
馬鹿は余計だ。阿呆は認めよう。

「俺はな、ハーテッド。正直なところ、厭なんだ。この街が。こんな理不尽な世界が。だが、」

俺はそこで言葉を区切る。

「だから、見届けてやることにした。俺は戌海を逃がした。だから、俺はあいつがこの街で死ぬまでの時間くらいは生きてやろう、そう思っただけだ。これは、俺の意志であって、俺の意志ではない」

ハーテッドはそれっきり黙る。

呆れているのか、理解しかねているのか。

何にせよ、何も問うてこないことほど気が楽になることは、ないのだった。

例えば少年の場合 … 3

突然、悲鳴が聞こえた。

「何だ!？」

「階下からですね」

冷静なツーマンセルは何事にも冷静だ。誰も暑くならない。熱くならない。

続いて、階段をどたと駆けあがる音。

そして、俺達のいる教室のドアが乱暴に開かれた。

「不味いぞ、お嬢ちゃん!」

外で息を切らしているのは、大柄でかつ、引き締まった身体をしている、二十代後半くらいの男。

名を宮島功という。元陸上自衛隊に所属していたそうで、この状況を真っ先に打破した数少ない人間の内の一人だ。

「どうしました?」

俺は答えず、鈴が覚めた口調で答える。

「下の、正面玄関だが、バリケードがそろそろ破られそうなんだ。怪物共の影が見え隠れしている状況だ。……どうすればいい?」

どうやらこの男、この冷酷銀髪少女のことを退魔師か何かだと思っ
っているらしい。

いささか勘違いと言いが、まあ、こいつの白装束がそのイメージを掻き立てていることだけは確実だ。正装を着るのは良い心

がけだと思っ思考も俺は持ち合わせているが、その格好はやはり目立つだろう。色々な意味で。

「とりあえず、皆さんを落ち着かせながらバリケードの強化をしてください。パニックになったらそれまでです。あなたは見たところかなりの技量を持っているようですが、他の非力な方々はおそらく“恐鬼”が侵入してきたら逃げきれないでしょう」

「あ、ああ。とりあえず、全員に呼びかけてみよう。何かあったらまた頼んだぞ」

「ええ。遠慮は必要ありません。生き残りたければ、そのための努力は惜しまないべきです」

……しかし。

こいつ、何でこんなに話し上手なのだろうか。一種の才能か。『話術の一環ともいえるな。人を導いて行くのに適切な人材とも言える』

「俺と比べるなよ」

『比べぬよ』

その時。いや、正確には俺と鈴の二人共の意識が窓からそれた瞬間。

「キイヤーアアアアアアア——」

奇声と共に後ろの方の窓が盛大に碎け散った。

乾いた音を立てながらガラスの破片が散乱する。

その上にそれらを踏みしめている、影。

“それ”は形容するなら、まさに鳥人間といったような風貌をしていた。

いや、確か欧米にハーピーとかいう妖精もどきの伝承があったな。そんな感じだ。

例えば少年の場合 … 4（前書き）

100話目になりました。

感想、誤字など指摘がございましたら、遠慮なく言ってください。
僕の士気が上がります。

例えば少年の場合 … 4

——はたして、俺も……いや、この街に生き残っている人間が皆、異常な状況に流され、侵され、穢され、望まずとも受け入れてしまっていたことになど誰が気付けたことだろう。

生物としての生き残るための本能が、人々（俺も含む）は大きく二つに分かれていた。

一つは、諦めて死を待っている者。

もうひとつは、先ほどの宮島のように、戦うことにより、生き残ろうとしている者だ。

『さて貴様はどちらなのだろうな、響輝よ』

さてな。どちらでもないんじゃないか。

どうやら俺は“逸れ者”らしいし。

「キイイイイイイイッ!!」

“鳥人間”が奇声を上げながらこちらに飛びかかってくる。

「巽野さんっ!」

「はいはい」

俺は懷から一丁の銃を取り出した。

フレームの色は、メタリックな銀色。

今俺が構えているのは、シルバーモデルのベレッタM92F。

世界最強の軍隊とも詠われる米国の全四軍が使用する世界で最も代表的言えるハンドガンだ。

1985年にハンドガン・トライアルの結果、採用されたなかなか

か高性能な銃である。

何故俺が今こんなものを所持しているのかについては、この学校に来るまでのいきさつと、東区中央

商店街での乱闘を思い出さねば語れまい。

幾体かの恐鬼に追われながら逃げ込んだ、商店街の一角にあった古めかしい猟銃店。

ライフルなど、鎖で縛られていたであろう猟銃達は既に少し頭の回る生き残りの人々に持って行かれた後だったが、このハンドガンはそのカウンターにあった鍵付きの引き出しの中で見つけた物である。

俺はこう見えて几帳面なのだ、嘘ではない。血液型もRH+のA型だ。いたって普通の人間である。

セーフティは外してあるそのグリップを握り、こちらに飛びかかってくる“鳥人間”に照準を合わせ、装填していた銃弾を、放つ。

ぱあん、という乾いた音と共に、“鳥人間”の眉間に風穴が空いた。

しかし俺の身体、妙にチューンアップされている気がする。命中率……。

「先ほども述べた通り、あなたは身体能力が普段とは格段に上昇しています。そういう風になっているのです、“逸れ者”は」

「……さつきから気になっているんだが」

「はい？」

こいつ、この手の話題だと、いつもいつもこうだ。

「お前、“鍵”や“恐鬼”のことになると……なんだ。根拠というか、自分の意見と言っか……。何なんだ？ 世界の法則だとか、そうなっている、だとか」

「ああ……」

鈴が少し口ごもる。

「……分かっていないんです。何も」

「分かっていない？」

「はい。私は“鍵”の少女に会った。“逸れ者”になった。戦うべき相手、斃すべき敵は“恐鬼”。それだけです。後は死ぬか、生きるか。決まり切っていて理不尽な法則なんです。逃げることもできず、止めることもできない」

面倒な言い回しだな、全く。

つまり、お前はその明治初期からずっと、相手の正体も分かっていて、自分がどういう存在かも理解していて。……それなのにその理由が解らない、というのか。

「……そうですね」

鈴が力なく答えた。

例えば少年の場合 … 5

決まり切った法則。

変えることの出来ない鉄則。

復讐と言つ名の楔。

そこから抜け出せない少女。

“恐鬼”に関する事を除けば、やはりこの少女——祇園鈴——は
幾年か前の俺にそっくりだった。

分かってしまうのだ。

こうして隣で辛そうに顔を歪めているこいつを見るだけで、何を
感じているのが、伝わってきてしまう。

悔しさ。辛さ。憎しみや呪念。

「……余談です。この状況には関係ありません」

鈴が気を取り直したように言う。

「今回は取り逃さない、私は“あの子”にそう誓ったのです。逃げ
られなくても構いません。止めることが出来ない方が気が楽です。
でも……」

そこで鈴は俺の方に近づき、至近距離でこちらを見つめてきた。
何のつもりだ。

「あなたには、私のようになってほしくない。“鍵”を失って彷徨
うだけの咎人^{とがひと}になってほしくない。今度は失敗しない。“あの子”
のために。私を庇って死んだ、あの子の為に……！」
少女の瑠璃色の瞳が俺を見据える。

続いて、連鎖していくように悲鳴が連なっていく。

「不味い……まさかッ!!」

鈴が駆けだし、教室のドアを開けた瞬間。

あゝあゝ ああああああああ……あ……………

全ての悲鳴が、途絶えた。

例えば少年の場合 … 6

「……ッ。これでは……」

鈴が急いでドアを開け、下続く階段に向かって走りだした。
俺もそれに続く。

階段を何段か飛ばして飛び降りていき、すぐ下の階へ。

「まさか……でも、そんな……」

鈴が焦ったように駆けて行き、人々を匿っている教室のドアに手をかけ、

勢いよく開けた。

「うっ……」

「なっ……」

そこに広がっていたのは、地獄だった。

いや、血の海が広がっていた。

文字通り、血で出来た海である。

何かが焦げ付いたような臭いが鼻をつく。

「な……」

さすがに俺でも気が動転した。

ところどころに見える肉塊や、骨の破片の様なモノが眼に入り、
心が決られる。

「ここにいた人は、……全滅ですか」

鈴が残念そうに、いや辛そうに言った。

「そう、みたいだな。……だが、こんなことを出来るような奴が出てきたら俺たちじゃ相手にならないんじゃないか？」

確かここにいた人の数は七人。

その全員が殺されたのか。

殺された。死んだ。居なくなった。

「……この焦げ臭いにおい。^{セラフイム}光球を使われました」

せらふいむ？　なんだそれ。天使か何か？

「鉄の物体を高速回転させて飛ばしてくる光球。今最も遭遇したくない敵……この閉鎖都市を囲った張本人である、^{ルラー}支配者の十八番です」

ルラー……。

確か、この状況で言っているいわゆるラスボスみたいな奴——黒ローブの男——のことだったか。

だが、そんな奴がどうしてこんなところに来てるんだ？

例えば少年の場合 … 7

「… いたい“支配者”は何を考えている？」

確かに、俺が目覚めた浜辺で“狗”を斃した時に、祇園鈴は言った。

『“狗”によって自分と俺の存在が支配者知られてしまった』と。だが、何故いきなりこんなところに現れた？

“鍵”を逃がした俺を真つ先に殺しに来たのか、はたまた幾度か交戦しているらしい鈴にとどめを刺しに来たのか。

「さあ……、どちらでもないですか？」

鈴が教室を出ながら言う。

「“支配者”は試合好きです。自身は戦闘狂ではなく、むしろ傍観し、達観し、卑下し、見下すだけ。盤上の駒を転がしていいように操って戦うモノです」

傍観者……いや、ゲームマスターか。

「気取りだと言っています。自身の隔離した空間でもだえる獲物にちよっかいを出すこともままあります。要するに、解らないのです」またか。また分からない、仕方ないと逃げるのか。

……なんだ？ 俺は何を正義感の強い奴みたいなことを考えているんだ？

おかしいぞ。こんなキャラ、俺ではない。

「先ほどあなたに言ったように、“逸れ者”は“鍵”の影響を色濃く受けます。今回の“鍵”戌海琴音の持つ“鍵”の持つチカラは、きんしつちやうわ琴瑟調和。簡単に言うと、皆を仲良くさせる能力です。戦闘には全

く使えないチカラですが、なにせ元のチカラが大きすぎる」
チカラ……。

「“鍵”にはそれぞれチカラが宿っています。魔法とか呪文とか、そういうものではなく、単に体質の延長線上にあるような能力です。あなたはかなり歪んだ性格をしているようですが」
バレてるし。

「“鍵”の影響を受け、あなたの人格はかなり負担を負っています。少々角が取れてしまっているのでしょうか」

それも世界の法則ってやつで受け入れる、と？

「強制しているわけではないです。ただ、あなた自身、もう運命の歯車に組み込まれてしまっている以上、逃げることは出来ませんからね」

そう言うつと、鈴は自虐的に笑った。

。

高校の昇降口周辺には、幸い、恐鬼どもはたむろしていなかった。

「居場所が把握されかけている以上、私たちには隠れるという選択肢はありません」

私達つて。俺を巻き込むなよ。

「巻き込みまふっ……」

「……………」

「……………」

おう、どうでもいい場面で舌噛みやがったぞこいつ。

「……………」

鈴が顔を伏せている。

「おい、大丈夫か？ さては、舌を噛み切ったな。馬鹿め」
「ッ！」

冗談の通じない鈴がきつと顔を上げた。目じりに光るものがある。そんなに痛かったのか。

「わ、わたしはっ」

話すのも億劫そうだな。大丈夫か？ 俺もたまに舌噛むからな。痛いぞあれ。

「あ、あなたなんか、ばかにされるよふっ……！」
染みるんだよなこれが。口内炎になったりするし。

「い、痛いでふ……」

「最初から素直に言えよ全く。大丈夫か？」

そう言いながら、俺は仕方なさに鈴の頬を撫でてやる。

……ん？

撫でてやる？

「あ……」

何をやってるんだい？ 巽野響輝。持ち前のブリザードライはど
うしたよ？

「や、やめてください、強すぎま……あうっ」

鈴が銀色の髪を振り乱しながら顔を振って逃れる。

「……あれ……」

「『あれ……』じゃないでふよ……」

『大丈夫か？』って。何だよそれ俺のキャラじゃねえし。

「な、なんで急に優しくなるんです……痛っ」
まずった。俺は今確信した。

俺は今、やはり、確実に、性格が丸くなりつつある……！

『大丈夫か？』

「言っなあああ！」

「も、もう……何でそんな、撫で、ななな撫でたりなんか……」
不味いぞ。なんか勘違いしてるのが一人いる。

「おい鈴……」

「な、なんですか」

……………。

「どうでもいい場面で舌、噛むなよ」

「……………！」

じゃきん。

なんだまたミスったのか？ ついには大鎌まで出てきたぞ。
やはり俺は性格が調整しきれていない状態にあるようだ。

というかさつきは誤解を解く場面じゃなかったのか俺よ。
なんで煽るようなことを言った。

性格変化という名の人格崩壊か。情緒不安定か。

「巽野さん、いや、響輝さん」

「……何でしょうか？」

「今から、龍ヶ峰総合病院に向かいます。走ります。よろしいですか？」
「はいいななりと」

「では、私より遅く着いたら、首を刈ります。よろしいですか？」

「はいなんなり……え」

鈴が身を素早く翻し、道路を駆けていく。

え？

俺死ぬじゃん。終わりじゃん。じゃんじゃん。

『響輝』

「何だ？ ポンコツハーテッド」

『お前が、悪い』

「……」

はあ……。

……よし、走るか。

……全く。

何の冗談なんだ……。

いかに少女が辛くとも … 1

「だいたい、響輝さんが悪いんですよ」

俺の目の前で、銀髪の少女が大鎌を携えて立っている。

「全くだ」

「開き直らないでください」

結局俺は驚くべきスピードで道路を駆けていく祇園鈴に追いつくことが出来ず、走り込みで土下座することにより、ようやくお許しを得た。単に引かれただけかもしれないが。

「場所はこまめに移動した方がいいようですね」

鈴が目の前にそびえる龍ヶ峰総合病院を見上げながら言う。

「そうだな」

俺はそれに感情を込めず答える。

龍ヶ峰総合病院は、龍ヶ峰市の中で一番大きい病院だ。

なんでも、少し前に一度そうとう難しい手術に成功したらしく、名声は高いらしい。

そういえば、この街が閉ざされてしまってから数日が経過しているな。

外はどうなっているんだ？

「外……ですか」

そのことを問うと、鈴は難しそうな顔をして少し上を向いた。

「……口で説明するのは難しいのですが、今“街”は外界から隔離された空間にあります。今外では、この街は無かったことになっているのです」

「無かったことに……だと？」

「はい。文字通り、亡くなっているのです。既にこの街は存在自体がなかったことになっています。地上から、歴史上から、消えて亡くなっているのです」

そんなことが……。

「知っている者は、その現象を時間錯誤と呼んでいます。歴史が修正されることは、世界に多大な負荷を与えるのです。いくつもの矛盾が生まれています。しかし、そこに私たちが突く隙があります」

隙……な。

「はい」

鈴が先んじて病院の入口に歩いて行く。

俺はそれに続く。

いかに少女が辛くとも … 2

病院には誰もいない。まあ、当然だが。

「奴らはここにはいないのか？」

無人の病院なんて、絶好のシチュエーションだと思うが。

「奴らにシチュエーションなんか関係ありませんよ」
前を歩く鈴が振り向かず言う。

リノリウムの床が歩くたびに乾いた音を立てる。

これでは音が立ちすぎる。ここでの戦闘は避けた方がいいな。

「そうですね。元より、救命用具を頂いたらここに用はありませんし、すぐに出ますよ。“恐鬼”は人間の居る数だけ存在します。それはつまり、数で勝れないですが、人があまりいない場所の方が安全だということなのです」

人の数だけ恐鬼は存在し、人のそばには恐鬼が存在する。
仲間が多い方が、むしろ危険……。

「ですね。助けを求める人々は助けます。ですが、それ以外は……」
どうかしてるな。

この世界の仕組み自体、間違っている。

「ですが、それが現実です」
相変わらず冷たい奴だ。俺みたいだ。

「人聞きが悪いですね。響輝さんに似てるだなんて、この上無い屈辱ですよ」

酷い言われようだ！

「あまり騒がないでください。奴らに気付かれます」

鈴が医療室に入り、懷に救急バンなどを入れながら言う。
その時だった。

「きゃあああああああああああああー！」
「！」

悲鳴……だと！？

「生存者がいたんですか！？」

鈴が焦ったように言う。

「行くのか？」

しばらく鈴が俺を見据える。

「……当然です。人として。私はまだ、人でいたい」

鈴は思い直したように、俺を見、言った。

いかに少女が辛くとも … 3

まるで風のように院内を駆ける鈴を俺は追う。

しかし、最近俺活躍してないな。まあ、する気もないが。

「ここですね」

鈴が西棟と書かれた掲示の前で立ち止まった。

「強力な“恐鬼”の気配がします。死なないでくださいよ、響輝さん」

誰が死ぬか。元より俺はお前について行った方が戦力増強になるからここにいるのだ。

そもそも俺は生きる理由がない。

あの時、橋から落ちた時に死んだってどうでもよかったのだ。

俺は今、ただ生きているだけなのだ。植物状態となんら変わりない。

「そこまで卑下されると私まで気分が悪いです」
扉を開けた鈴が言う。

五月蠅えな。最近忘れかけていたが、俺はそういうキャラなんだよ。

「まあ、私も同じ“逸れ者”だという理由からあなたと一緒にいるだけなんですけれどね」

その通りだ。お互いの損益が一致しているだけであって、所詮、お前と俺……いや、人と人の関係性などそれだけのものではない。たった少しの不都合性や不合理性があるだけで、人は人を切り捨てる。

いらないものと判断する。

「御託は聞き飽きました。まず生存者を捜しましょう。恐鬼に遭ったら斃してください」

そう言つと、鈴は振り返らずに、右の方へ歩いて行つた。

「おい……」

「二手に別れましょう、と言ってるんです。私は中央階段から。響輝さんは裏の非常階段から上に行ってください」

……命令するなよ。まあ、従うけれどな。

「御託は……」

「わかつたようっさいな」

せいぜい頑張つてやりますよ。

持ち物はバタフライナイフとベレッタ。

なんとも心細いが、鈴が言うには俺の身体能力は向上しているらしい。実感は無いのだが。

戦える。今の俺なら。せめてその力、俺が復讐に燃えていたところに欲しかった。

既に鈴の姿は見えない。

……仕方無い。やるしかないな。

俺は非常階段に続く扉を開ける。鍵はかかっていない。上に登ろう。

そう思つた時だった。

「ッあ……!」

耳をつんざくような鋭い音が上から反響してきた。

銃声だと……！？

生き残りには銃を持っているやつがいるのか。
警戒しなければならぬな。

俺は階段の一段目に足をかけた。

いかに少女が辛くとも … 4

コンクリートで固められた地面を踏みしめ、階段を一段一段登っていく。

一歩踏み出すたびに乾いた音が鳴る。

…… 良く考えると、ホラーアクションとかでよくある病院内での戦闘は、人間側にとってはかなり不利な条件が揃っているよな、などと考えてみる。

リノリウムは底の堅い靴だと音が立つし、病院には曲がり角も多い上に、災害時の安全のためか、建物自体かなり頑丈で、なにより音がよく反響する。

相手が積極的に攻めて来ないと、ホラー映画の主人公たちはどうしようもないのだろうか。

まあ、狙う側にとってはどうでもいいことか。

『しかし響輝よ。貴様、戌海が死ぬまでの時間とは言ったが、それは具体的にいつまでだ？』

「うつ……」

そういえば。

あること無い事言っただけで逃げていたが、ここで突かれるか。しかし、結局のところ、人間が生きるのに理由なんて無いぜ？

『それも逃げの一手であろうが』

「うつ……」

最近のこいつは痛いところばかり突いてくるな、全く。

などとくだらないことを考えながら、壁の階表示を見る。

三階。その上は四階だが、確かここは七階まであるはずだ。

そう思った時だった。

「くあっ……」

再び、階段に反響して銃声が響いた。

くそっ。騒音被害だ。

しかし、相手が銃を持っていて、俺がその前に立って、はたして交渉など出来るのだろうか。

仮に仲間を増やして、“支配者”や恐鬼どもに戦いを挑んだとして、だからなんなのだろう。

俺はどうしてここにいます？

戌海の代理？ 否、それは他愛もないただの戯言だ。逃げ場の無い狂言でしかない。

……そうだ。俺は怖がっているのだ。

昔も今も変わらない。復讐の炎が思考を焼き尽くし、それ以外のことを考えられなくなった。

そして、その復讐が果たされた後には、その炎のあった空間にぽっかりと穴が空いた。

炎は消え、後には冷たい風が吹き荒れるだけ。

俺は人が怖いのだ。もしかすると、あの戌海の偽物以上に。

……そうだ。何故気付けなかったのか。

いや、気付きたくなかったのだ。自らの手で封印していた。

俺は冷静沈着を越えて冷酷無情の域に達しつつある人間だ。自覚している。

人を寄せ付けけないオーラを放って生きてきた。いや、むしろ死んできた。

だが、本当は恋しかったのかもしれない。
姉さんを失ってから、俺は両親にもどこかよそよそしく接するようになった。

俺は、きっと怖かったのだ。

化け物に対する恐怖よりも、それはずっと大きい。
だからこそ、俺は恐鬼にとって異常でイレギュラーなのかもしれないかった。

「……いけないな。柄じゃない」

何をいまさら考えているのだか。

俺はそういうものは捨てたのだ。人とはかわりたくない。

『それは自分を騙しているだけではないのか？』

「そうなのかもな」

……全く、こいつはいつも……。

だが、結局のところ、俺は後悔しているのだ。

戌海を逃がしたことに。

仮に再びあいつに会ったとしても、俺は何も言えないだろうな。

——六階にさしかかったときだった。

ぴし……

「？」

急に壁にひびが入った。

なんだ？ 地震なんか起こってな……。

『響輝！ 上だ！』

「ッ！」

その声にとっさに身体をかわすと、さっきまで俺が居た場所を突きぬけていく“何か”があった。

何だ……？

さすがに壁を破るような相手とは戦える自信がないぞ。

そう思った時、開いていた非常口の向こう、七階の廊下の方から、叫び声が聞こえた。

「どけ！ ガキが！」

否、怒号だった。

いかに少女が辛くとも
∴ 4 (後書き)

短い(汗

いかに少女が辛くとも … 5

怒号のした方を振り向くと、そこには一人の男が立っていた。

「どけつつつてんだろぅが！ 死にてえのか！」

黒っぽい緑っぽい…… ロングコートを着ているその男は、腰だめにシヨットガンを構えていた。

猟銃、軍において近接銃撃戦で最強とも言えるシヨットガンを持つてんのかよ。

逆らったら俺も蜂の巣だ。

そう考え、急いで男の方へ駆け、後ろに回る。

「くたばれ！！」

方向転換してこちらに突っ込んでくる“それ”に向かい、男が引き金を引いた。

「ぐあっ」

耳も押さえてないのに近距離でシヨットガンの銃声を聞いてしまった。

くそつ。音が聞こえない。

続いて、銃の側面のレバーを引いた男が、減速した“それ”に向かって再び銃を放つ。

「っ」

今度は耳を塞いでいたが、しかし、この男、手に入れたばかりであろぅこんな凶器をいとも簡単に使いこなしているとは……。

何者だ？

二回、何十個もの鉛玉に引き裂かれた“それ”は飛んでくる勢いのまま、俺と男のすぐ横を吹っ飛んで行き、後ろの壁にぐちゃっと嫌な音を立てて激突した。

「……………」

なんとも荒々しい戦い方だ。

慣れてるなんてもんじゃないぞ。この男、完全に要領を分かってやがる。

「おい、ガキ」

「何だ」

ショットガンを（今見れば銃身と銃底を切り落としてあった）懐にしまったらしい男がこちらを振り向いた。
かなりの長身である。

「お前、“逸れ者”か？」

「な……………」

何……………！？

俺はとつさに数歩分退いた。

足が血だまりを踏む。

振り向くと、さっき斃された恐鬼の遺骸が見えた。
その瞬間、戦慄する。

こいつ、“街”が閉ざされる前に俺が見た、空を飛ぶ深海魚だ。
まだいたのかこいつ。

お互い不憫だな、本当に。

と、俺が勝手な同情を死んだ“深海魚”に与えていると、男がい
ら立ったように言った。

「おい、お前、戌海琴音の……今回の“鍵”の逸れ者だな」

「なんで……」

こいつ、戌海のことを……。

あいつは誰にも遭遇させずにこの街から逃がしたはずなのに。
こいつ……。

「なぜ戌海のことを知っている!!」

……我ながら馬鹿で信じられない行為だったな。

いや、俺は早く戌海の事を忘れたかった。だから、条件反射的に
身体が動いたのだ。

「……ずいぶんあの娘にご執心だな、クソ餓鬼」

「くっ……」

なぜか頭に走った激情に、俺は懷のベレッタを男の眉間に当てて
いた。

同時に、俺の腹にも男の持つショットガンの銃口が押し当てられ
ている。

「どうした？ 俺の予想では、今回の“鍵”の“逸れ者”はかなり
性格の歪んだ奴だと思っていたんだが、熱血漢だったとはな」

「……違えよ」

俺がベレッタを下ろすのと同時に、男もショットガンをしまった。

「あんたは何だ？ この“街”に取り残された人……じゃないな」
「そうだ。俺はこの“街”に外から入ってきた」

何……？

この街に外から入ってきただと？

そんなこと、可能はずは……。

「不可能じゃない。俺は“狩り人”だ。お前らとはまた違う存在だから」

そう言つと、男は廊下を歩きだした。

「この先に生き残つて立てこもっていた人達が居る。手伝えクソ餓鬼。目的が同じなら文句は無い」

ガキガキ言うな。俺にはちゃんと巽野という名前がある。

「そうか。俺は“狩り人”、浅滅燎次。以後、よろしく頼むぞ」
男はそう言い、コートを翻した。

いかに少女が辛くとも … 5（後書き）

浅滅さん合流です。そろそろ佳境ですね。

かくて少年は破滅に向かう … 1

——さて。

ここで話をまとめよう。

俺、巽野響輝は今から数日前、この街に越してきた、一介の高校生だ。

そして、こんな街に来てしまったばかりに、位置外の高校生になっちゃった。

地球上のありとあらゆる生命体の中でも、人類はかなり特殊な存在だという。

それは、全ての個体がそれぞれに独自の思考回路を有し、それにより、心境の変化、すなわちは“感情”や“心”を持っている、ということだ。

無論、犬や猿なども、感情の表現はする。だが、複雑な言語を操り、物を扱う人類とは一線を期しているだろう。

個々の感情、世界観は確かに存在する。しかし、この世界は解れることもなく、未だに歴史を刻み続けている。

銀髪の少女——祇園、鈴——は言った。

「世界の均衡が保たれるのは、人間の感情が溢れ、暴走する前にそれを喰らうものが存在するからなのです——」

つまるところ、恐怖に鬼と書いて“恐鬼”^{おに}と読む、異形の者たち

もこの世界には必要な歯車の一つというわけなのだ。

しかし、その均衡は長くは続かなかった。

人でありながら人を凌駕するエネルギーを秘めた存在、つまり、ここで言うところの“鍵”。

感情を喰らうだけの存在である“恐鬼”の食欲をも暴走させ、自らを求めさせる。

人自体を喰うようになった恐鬼を元に戻すことは出来ない。

仕方なく、いや、必然的に、恐鬼の存在を知る人々は闘いを始めた。

神話における悪魔や魔物、昔話の妖怪など、それら全てが食欲に狂った“恐鬼”だと言われている。

人は知らずして知り、世界はそれを受け入れる。

……否、“変えることの出来ない法則”、だったか。

しかし、俺は何のためにここにいるのか。

俺の唯一無二の友であるハーテッド曰く、

『お前がいるのはお前がここに居たいと思っっているからであろう？』
だそうだ。

しかし、世界にとっては“鍵”は異分子だ。
受け入れつつもそれを排除するための暴走。

世界は“鍵”を敵視する。

世界の側には“恐鬼”があり、暴走が故に人を暴食する。

……では“鍵”の側には何があると言うのか。

鈴や、俺が数時間前に出会った浅滅という男によれば、それが“逸れ者”と言う存在なのだそうだ。

“鍵”の宿主である人間の、最も想いを寄せる人間が突然変異の如く変質する。

その人の思いは関係なく、“鍵”は変貌させる。

ある思想家、哲學家は言う。人は逃れられない宿命の下で生きると。

だから、その変貌も、ただ一人の人間が生きる人生でしかないのだと思う。

だから、

だから、

だから……。

されど、俺は破滅へ向かっていく。

それすら世界は、“鍵”は、定められたことなのだというのだろ
うか……。

かくて少年は破滅に向かう
… 1 (後書き)

中間点です。

かくて少年は破滅に向かう … 2

「……それで？ あんたは何で“街”の外から入ってこれたんだ？」
俺は目の前の椅子で胡坐をかいている男に言う。

「あんたじゃない。浅滅燎次だ。俺はお前らとは違う存在だ」
違う存在……？

恐鬼、鍵、逸れ者、支配者と来て次は何だ？

「俺はお前らともまた違う。“鍵”を保護する者だ」

「“鍵”を……保護だと？」

“鍵”側の、保護する存在は俺や鈴のような“逸れ者”ではないのか。

「ふん、お前やあの大鎌は勘違いをしている。お前ら“逸れ者”は所詮名の通り逸れ者。この世界の法則に巻き込まれただけの存在にすぎない」

「なに？」

俺が巻き込まれただけの存在……。

部外者？ ……被害者だというのか？

そんなことが……。だが、こいつは恐らく俺よりも恐鬼に関係している。

“こいつの言っていることの方が正しい”。

「俺は、関係などなかったのか……？ 最初から」

「そうでもない」

浅滅は懷からショットガンを取り出し、薬莢を入れる部分を確認している。

「お前は要するに戌海琴音……“鍵”が最も身近な存在と認識している存在なのだ。まがいなりにも人ではない者に思われている者なのだ。せいぜい誇れ」

「誰があんな奴の側近で喜ぶか」

サイドは“鍵”、“世界の法則”。

“鍵”には、俺や鈴のような“逸れ者”、浅滅のような存在。

“世界”には、副作用でありながら鍵を排除する“恐鬼”。

ツーサイドに分かれての生存競争。

「俺はただ巻き込まれたにすぎないのか」

「だが関わっていることだけは確かだ。……おい」

浅滅が俺の襟元を掴む。

「巽野響輝と言ったな。“逸れ者”、確かにお前は巻き込まれたただけだ。だが、お前は見ただろう。銀髪の大鎌使い、祇園鈴を」

浅滅がショットガンの銃口を俺に向ける。

「あいつも“鍵”の親友であり、巻き込まれただけの存在だ。だが、奴はそれでも運命に抗っている。奴はすでに一介の“狩り人”クラスの力を持つまでになった。“支配者”とて、奴の侵入を知った時は歯ぎしりしただろう。奴を動かしているのは、明確な意思だ」
「……」

「復讐の意志。唯一無二の友への情。“鍵”を失った今でも奴が恐鬼を狩り続けているのは、それがゆえ。……お前には無いのか？」

「……戌海に対する、情が……か？」

そんなことを言ったところで……。

「今この“街”に戌海はいない。それなら、支配者だって手が出せないはずだ。“恐鬼”がどれだけいようと、俺や鈴が狩りつくしてしまえばいい」

あんたもいる。

ならいいじゃないか。戦えばいい。戦って、斃せばいい。

「過信するな、ガキが」

浅滅が銃口を俺の腹に押しつける。

「それに、そうもいかないのだ。お前らが負け試合の茶番をしている間に、戦況は……試合はかなりの変容を見せている。まず一つ」
浅滅が一層その眼光を鋭くした。

「……戌海琴音は“今、この街にいる”」

……なに……？

「は……なんだそれ。何で、戌海が街に……、だってあいつは俺が、確かに外に……」

「だが、“鍵”がいなければ、この街は永遠に救われない。だから、俺様が再びこの“街”に連れてきた」

……何だと。

「お前が、連れてきた……、お前の所為か!!」

「黙れ餓鬼が！」

かくて少年は破滅に向かう … 3

「“支配者”は周到な奴だ。奴は街を囲いきるまでに戌海琴音が出て行くことも視野に入れていた」

声を落ち着かせながら浅滅あさけしが言った。

「この空間を解放するには、“支配者”を倒さなければならない。だが、それだけでは駄目なのだ。その時、空間内に“鍵”がいなければ、街は永遠に異空間を漂うことになる」

「だから……、戌海を連れ戻したのか」

「そうだ。物わがりの悪いひねくれたガキに一つ聞こう。……おまえはなぜ戌海琴音を逃がしたのだ？」

それは鈴が言っていた。

戌海の中の鍵、その持つ琴瑟調和という能力の所為で、俺の性格は変化しつつあるらしい。

その過程ですっかり魔が差して、助けようと思っちまったんだろ
う。

……それ以外に、あり得ない。

「お前は歪みそのものみたいな奴だな。……いいか？ お前は“逸れ者”であり、戌海を助けた。好いてもいないのに」

「だから……何だ」

「いつ死んでもいいとも言いたげな顔をしておきながら、人を助け、“恐鬼”を狩る」

「……」

「矛盾。行動の矛盾。感情の矛盾……」

浅滅が黙る。

俺は腹部に押し当てられた銃口を見つめる。

「はつきりしろ。今ここでお前の意志を言え。それでもまだ死にたいというのなら、今、ここで俺が殺してやろう」

「ぐっ……」

俺は……。

『……選べ、響輝』

何を……選べというんだ。ハーテッド。

『自分に嘘をつかず、と言えばベタになるが、そういうことだ。茜が死んでからのお前の人生は、全てを拒絶し、否定し、悲感に暮れ、ただの虚寓と化していた。それを切る時が来たのだ』

嘘なんて、ついていない。俺は、俺の為に生きてきた。それだけだ。

固執なんかしていない。姉さんのことはもう振りきったはずだ。

俺はもう独りでも生きられる。

誰にも頼らない。解決し、踏み潰し、生きる。

「その機械もなかなか面白い事を言う。因果に歪まれた、悲劇の少年でも演じているつもりなのか？ ふん、甘えるな。お前だけじゃない。お前だって、ただの一人の人間でしかない。誰にでも悲壮に暮れる時はある。諦めたい時だってある。それを知ってなお生き続けるからこそ、人はそこで確固たる“一人”として輝くのだ」

うるさい。

『響輝。お前は手を差し伸べてくれた人々をどうした？ 何故受け入れられなかった？ 何故拒絶した？ 皆はお前のことを一心に考えて、助けてやろうとしてくれていたというのに、貴様はどうしてそれを拒否する？』

うるさい。

うるさい。

「選べ、さもなければ、お前を……」

そこまで言ったところで、浅滅が口をつぐんだ。

「クソッ……奴か。こんな時に……！」

やつ……？ だれだそれ。ルラーのことか？
どいつもこいつもうるさい。

カッーン……カッーン……

「くっ……“支配者”め。今度こそ
あさけしがショットガンをとりだす。

ろつかのはしの、 magari かど。

そのむこうから、“そいつ”……“支配者”はあらわれた。

その手で、戌海琴音の胸倉を掴んで……！！

「何……！？」

あさけしがあわてたようにさげぶ。うるさい。

『戌海琴音……やはり、この街に……』

うるさい。

「……ふはは、どうやらずいぶんいいタイミングで出て来れたようだ。やあ、“狩り人”に“逸れ者”。久しいな。今回は貴様らにゲームの佳境を見せてやろうと思ひ、わざわざ貴様らの求めている“鍵”を連れてきてやったぞ」

「う……くっ……響……きくんっ……」

“支配者”が、いぬかいのくびすじをつかみ、たかだかともちあげた。

からだが、ちゅうについている。

「では、まだまだ五体満足な貴様らの為に、一つ宣戦布告をしてやろう」

そういつと、“支配者”はそのままいぬかいのくびをにぎるてに、ちからをこめはじめた。

「ぐっぐっ……響輝……ぐっ」

「まさか、貴様！ 止める。今のこいつにそんなものを見せたらどうなるか……！」

となりであさけしがさけぶ。うるさい。

「……そうだ。今ここでこの“鍵”の首をへし折れば、その“逸れ者”はどうなるか……ふふふふめりっ。」

いやなおとがした。

……いぬかいの、くびをへしおる？

「止める！ “支配者”！ ……くそっ！ おいガキ！ 見るな！」

「ふはは、では、後半戦だ」

「響……きつ……ごふっ……」

「き。ばき。」

めのまえで、いぬかいのくびがへしおられた。

「……いぬ、かい……」

戌海が死んだ？

いま、こいつに首をへし折られて？

死んだ？ 俺なんかに想いを寄せたから？

姉さんのように？

死んだのかいなくなったのかねえさんのようにおれにかかわった
からにどとはなすこともわらうこともなくともにあるくこともあさ
あうこともなにも……

かくて少年は破滅に向かう … 3 (後書き)

深刻なエラーが発生しました (響輝君に)。
…… なんちゃって。

かくて少年は破滅に向かう … 4 (前書き)

やっぱり、どんな人でも、孤独は辛いものです。

かくて少年は破滅に向かう … 4

「巽野!!」

浅滅がすぐとなりでさけんでいる。

うる……さい。

「ああ……いつ見ても素晴らしいなあ、人が堕ちる瞬間は。……ふふははは、“狩り人”浅滅燎次、“はぐれ者”巽野響輝。もっと私を楽しませてくれ!」

“支配者”の、ちのそこからひびくような、わらいごえがつるさい。

くびから、せんけつをほとばしらせている戌海をひきずりながら、やつは、ろつかのかどからすがたをけした。

「待……て」

からだか、うごかない。

ふとしせんをしたにむけると、俺のりょうつでが、すみのように、まっくろにそまっていくのが、みえた。

「不味い、巽野! そのまま“漆黒化”が続けば人でなくなってしまう。早く抵抗しろ!」

ていこう……?

おかしなことをいう。

俺は戌海をころしたあいつを、殺さないといけないんだ。いますぐ、おいかけないと……。

おいかけ……な……いと。

……あれ？
からだのぜんぶが、まっくろになっている。からだが、うごかない。

「うごか、な……イ、イイイイ、イイイイイイ……」

「チッ……堕ちたか。……戌海琴音には悪いが、こいつはここで狩らせてもらっ……」

チャキッ

「アサケシ……コレハ……」

「“漆黒化”。恐鬼や鍵の存在を知る人間が、感情を暴走させると起こる世界の自浄作用だ」

俺は……やはり、マキコマレタ、ただのニンゲンに、スギナイの力……。

所詮、タダのブガイシヤなの力……。

「そつだ。実際はそうなのかもな。だが、お前は今までこの死んだ街にいなから生きてきたじゃないか！ 何故今になって暴走する！」

ナゼ……？

ソレは、戌海ガ、殺サレたカラ。モウ、俺ガ生キル必要ガナイカラ。

“街”が歴史カラ消エ、そこにスンでいた人々は、外ノ人の記憶カラは『いなかった』コトにナッテイルのダロウ？ 浅滅、お前ガ、ソウ言ったンダ。

ジャア、母さんのノ記憶カラモ、俺の存在ハ、消エテ亡クナツテイルノダ。

……つまり、モウ俺に帰ル場所は、無い。

もう何モ、何モカモ……！

「だから、暴走すると？ ふざけんな！！ よく見れば分かったはずだ。あの戎海琴音は……」

「嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼あああああああああ……！！！！」

モウ誰モ俺ノ味方ナドイナイ否モトカラ居ナカッタノカモ知レナイ
タダ俺ダツテ普通ニ生キテイタカッタダソレダケダッタノニ

「止まれ！ 巽野、もう止める。それ以上まで踏み込めば、本当に
お前を斃さないといけなくなる！」

嗚呼、視界ガ真ッ暗ニ染マツテ行ク……

モウ、墮チヨウ。モウ、還口ウ。

モウコンナ世界ハイヤダ。

独リボツチハ嫌ダ。

ダカラ、俺ハ――

「甘ったれるっ、なああああああああ……！！」

「なっ！？」

「ニイツ！？」

酷く、乱暴に。

大仰に、乱雑に。

大胆にも、階下から天井をぶち破るといふ手法を取り、俺の目の前に現れたのは、

「甘ったれないで下さい！！……いや、ふざけるな！！！」

よろけながら大鎌を携え、体中を瓦礫と血に染めた、

「……祇園、鈴……」

だった。

かくて少年は破滅に向かう … 4（後書き）

ウイルスが入り込み、深刻なエラーが発生しました。

でも、ウイルスには絶対、ワクチンがあるものなのですよ。

かくて少年は破滅に向かう
… 5

「ふざけるなッ!!」

ソウ、かすレルヨウナ声で、今一度、祇園鈴が叫ンダ。

「リン……俺ハ、フザケルナンテコト……」

何故お前マデ現レル。

お前モ俺ヲ否定スルノカ。

「さっきその“魔弾”が言っていた事を聞いていなかったのですか！ 辛いのはあなただけじゃない！ 皆、みんなが全てを投げ出して、自由になりたいと思っている！」

「御託ハ、聞キ飽キタ……」

「でもッ！」

ソコデ鈴ハ、どんっ、と鎌ノ柄ヲ地面ニ叩キツケタ。

「でも、あなたが今、ここで諦めたらどうするんです!? 一体誰が“鍵”を……戌海琴音を救うというんですか!!」

ナニヲ……言ウ……

戌海ハ、今サツキ、“支配者”ニ首ヲ……。

「この……強情者がああああ!!」

「グハッ！」

瞬時ニ、距離ヲ詰メタ、鈴ノ拳ガ、大鎌ノ峰ガ、腹ニ当タル。
「あなたはっ！」

がんっ

「どうしてっ！ そんなにもっ！」
がすっ ばきっ

「歪んで不信でめんどくさくて！」

「グッウウ……」

何度モ殴ラレテイルノニ、身体ノ、ドコニモ痛ミヲ感ジナイ。
「冷静になって、よく考えなおしてみてください！ “支配者”に
とつての勝利は！」

邪魔者ヲ消シ、戌海ノ…… “力”ヲ取り込ムコト……
「私達にとつての勝利は！」

戌海ヲ奪還シ、街ヲ救済スルコト……

「では、“支配者”の言う“試合”^{ゲーム}とは何ですかッ！」

「ソレガ、戦ッテ勝敗ヲ……」

「では、後半戦とは…… はあ、何です、はあっ…… か……」

後半戦……。

…… マサカ……。

「…… そう、です。試合^{ゲーム}はまだ、終わっていない」

「あの、戌海の折殺劇は…… 俺を錯乱させるための…… 茶番……？」
「…… その、通りです……。いわば、集団幻覚のようなもの。心の
揺らいでいた、隙間。“支配者”は響さんの隙間につけ込んだ」

…… 畏？ 間接的に、いやむしろ直接的に、俺達側が自滅するよ

うに……。

「わかりましたか？」

「……ああ」

だが、この、身体……。

“漆黒化”という現象で真っ黒な炭のようになってしまった俺の身体は……。

「現時点では、漆黒化を解く方法は、解っていない」
浅滅がよろけながら言った。

「そもそも、漆黒化が途中で止まっているの光景自体、初めて見た
どれだけイレギュラーなのだ、お前は」

「……知るかよ」

そう答えながら、俺は、礼を言おうと鈴の方を向いた。

……のだが。

「……ぐすっ……、うつつ……」

「……」

「うつつ……ぐすん、……」

「……」

簡単に言おう。

“恐鬼”との歴戦の猛者、大鎌使いの少女、祇園鈴は、今、俺の
目の前で、嗚咽をもらしながら、

……泣いていた。

かくて少年は破滅に向かう … 6

いたたまれない気持ちになった。

こんな感情は久しぶりだ。何だか、酷く、申し訳なく、哀しい感情。

「うつつ …… 響輝 …… さん」
「 …… 何だ、よ」

俺より背の低い、俺より年長者の少女が顔を上げる。
その端正な顔は、今、涙に濡れていた。

「あなたと別れて、病院を探索していた時に …… 、急に、あなたの心が揺らいだのを感じま …… した」

「 …… 」

俺は黙ってしまう。話に驚かされたからでも、いまさら恐怖にものいたわけでもない。

ただ、この泣いている少女に対し、無性に情けなく、謝りたい気持ちになってくる自分に対して、驚愕していたのだ。

「それから …… だんだん、あなたの心が …… 壊れて、真っ黒になっ
ていつて …… 」

「 …… 」

「 …… 嫌だったんです」
急に、鈴は言った。
「 …… 何がだ」

「……あなたの眼を見た時から、感じていた、この、感情。……あなたは、酷く、とても酷く、私に似ていた。鏡を見ているような感覚でした。まるで、常に自分を見せつけられているような、羞恥にも似た感情」

……そう、か……。

今分かった。

俺は確かに感じていた。この少女の話を聞いた時からずっと。同族意識に近い何か。むしろ、感情の拠り所を探し合うかのようなやりとり。

俺に、似ているのではない。

……否、俺が、こいつに似ていたのだ。

こいつが自分の“鍵”を失ったのは、はるか昔。それこそ俺なんか一片たりともこの世に存在していなかったころ。

そのころから、何十年、何百年もの時を、この少女は復讐のために生きてきたのだ。

……いや、闘ってきたのだ。

……いつだったか、自問自答した問題。

『なぜ俺みたいなのやつが、こんな少女と行動を共にしているのか』

……深く考える必要もない。答えは酷く単調なものだった。

“俺は、この少女が、祇園鈴が壊れるところを見たくなかったのだ。”

そばにいたかった。同じものを見ていたかった。

きつと、鈴もそうなのだろう。

ようやく分かった。どこことなく、警戒心も抱かずに接していた理由。

鈴が、時間を浪費してまで、打ち上げられていた俺が目覚めるのを待っていた理由。

「……どうしようもなく似ているのか、俺達は」

「……そうですね」

鈴は続ける。

「私も、あなたが壊れるところを見なくなかった。同じ存在が壊れるのを阻止しなかった。理由なんて、実際は軽い物なのですよ」

「そうだな」

「だから……あなたが壊れて行くのを感じた時は、胸が……張り裂けそうでした」

一言ずつ、紡がれていく言葉。

その言葉は、俺を氣遣ってくれている少女の、ほんの一片の、心の欠片。

「誰もあなたの味方じゃない？ そんなわけじゃないですか。あなたの心の叫びが聞こえました。……“独りぼっちは嫌だ”」
やめろ、復唱するな。

「そんな言葉、あなたからは聞きたくなかった。諦めてほしくなかった。何より、あの“支配者”の所為であなたが壊れるなんて、あ

つてはならない」

「……」

「どうして、思い込むんですか？ 一度よく見回してみなかったんですか？ あなたの周りには、きっと、たくさんの味方がいてくれたのに」

俺はその言葉に、息をのむ。

かくて少年は破滅に向かう … 7

「あなたの周りにはたくさんの人がいたはずです。あなたが歪んでしまふ前にも、その後にも。きっと皆があなたを心配して、気遣ってくれていたはずです」

「……それは……」

一言ずつ、ただ、たしなめるかのように、鈴は言う。

「あなたは拒絶しすぎた。あまりにも孤独過ぎた。きっと誰もが、あなたが心を閉ざしてしまったと思って、関わるのをやめていったのだと思う」

「だから、それは俺が……」

「でも」

鈴が語調を強める。俺に反論する権利は無いらしい。

「きっとそれは大きな勘違いだったんじゃないですか？ あなたは待っていた。自分の歪んだ心を見ても、自分と接しても、変わりなく、普通に接してくれる人を。こんなあなたにも、心からの笑顔を向けてくれる人を」

「……」

一つ、一つ。叱られているわけではない。優しい口調。

でも、今の俺には、それがあまりにも苦痛に思えて仕方なかった。思い出す、顔。母さんや、親父。学校のクラスメイト達や、姉の知り合い。

みんなが、俺を見てくれていた。

……なのに、思い出せるのは、心配そうな、自分の声が届いていないと確信した時の、皆の落胆の表情。

拒絶。圧倒的で、看破することのできない心の壁。

「それが、引つ越した先、自分の暗い過去なんて知りもせず、声をかけ、笑いかけてくれた、お隣の、ただの女の子。“鍵”であり、このクソったれの運命に巻き込まれた少女、戌海琴音だったのではありませんか？」

「……………」

返す……言葉も無い。

「あなたは表面上は変わっても、心の底では求めていた。確信を持つて言えます。なぜなら、…………わたしも同じだから」

「何だ……………」

ぎゅっ。

「……………」

俺の言葉は、そこで中断された。

「だから、わたしは辛かった。心配…………してたんです…………よ…………この…………大うそつき……………」

俺の背中に手を回し、その華奢な身体を押しつけて、祇園鈴は再び泣きだし始めた。

「やっと…………共有できる…………人を見つけたんです…………長かった…………さみしかった…………よう…………。独りぼっちは…………嫌…………嫌なの……………」

「……………」

本音だった。

いや、衝撃とも言おうか。
抱え込んできた感情。

この小さな女の子が抱えている何百年分もの感情が、今、俺に向
かって流されていた。

ならば少女は悲愴に浸り … 1 (前書き)

そういえば。

この作品、いつのまにかヒロイン二人になってますね。
あべし。

ならば少女は悲愴に浸り … 1

「ずっと……ずっと一人だったんです……」

「……そうか」

「誰も、助けも、仲間も、家族も……緑も」

「……そうか」

高峰、緑。

この“逸れ者”……鈴の“鍵”。

“支配者”の試合に敗北し、奴に飲み込まれた、過去の少女。

鈴の唯一無二の親友。

「誰も、皆、私にはついてくることが出来ないんです。私は、見た目もあの頃から全然変わっていないし、長く生きる……半永久的に不変な存在」

押しつけられたその表情は俺には見えない。ただ、さらさらと揺れる銀色の髪が、鈴の悲愴感をありありと示していた。

「よく……聞きませんか？ 不老不死の何かとの人間ドラマとかで。寿命の違いから、相入れることのできない、二つの存在。今まさに私はそんな状況なんですよ。……そして、あなたも」

鈴が顔を上げた。

不覚にも、その顔が泣きはらした、“ただの少女”のように見え
てしまった俺は、

……かわいい、そう、思ってしまった。

「あなたは取り返さないといけない。この、試合に勝利しなければならぬ。勝つて、私が見ることのできなかった未来を見せてほしいのです」

鈴の目的。

孤独な戦いを続ける少女が求めるものは、“仇討ち”と、“同類探し”。

そして、自分がたどり着けなかった未来を見つけること。

「……ふふっ」

鈴が少し笑うと、身体をゆっくりと離れた。

「……あなたが闘うと言うのなら、私はあなたの鎌となりましょう。あなたが諦めると言うのなら、今度こそ、死に損ないも終りましょう。私はあなたに会ってしまった」

一度、言葉を切り、鈴が涙をぬぐう。

「合わせ鏡と言うべきなのでしょうね。いやむしろ、逢わせ鏡ですか。それを見てしまったから、私はその幻想をぬぐうことができないのです」

「何とでも言えよ、全く」

なんだこいつ、ちっとも可愛くねえ。

「本当、冗談じゃないな、全く。お前も、ハーテッドも、期待が過ぎるぞ」

「あなたがそれだけの人間だということです。歪みに歪んだ冷たい少年さん」

……ふん。

全く、キャラじゃない。毎度毎度思っぜ。どうもこの街じゃ、俺は俺らしくいられないらしいな。

でも、それもいいかもしれない。

不変であればあるほど、人はそれを恐れる。

ならば変わればいいのかもしいが、それがまた難しいのだ。人は変わり行き、そうしてようやく一つの存在として確立する。

ならば俺は、どちらを選ぶのか。

「……全く、何の冗談だ。……でもまあ、どちらに転んだところで、悪くないさ。復讐姫の大鎌使いさん」

「……ふふっ」

「……ははっ」

鈴が間をおいて吹き出すと同時に俺の口からも笑いが漏れた。

「あっ！ 今、笑いましたね？」

「笑ってない」

「笑いましたよ、確かに聞きました。驚きですね。あなたが笑うところなんて想像も出来ませんでしたよ」

酷い言いようだな、おい。

まあ確かに、ここ最近笑ったことなんてなかったな。

そう言う意味では、この目の前の少女も、戌海と同等に、俺の変化を助長しているわけか。

「……おい、お前ら」

「はい、何ですか？“魔弾”」

「五月蠅いな、シヨットガン野郎」

「お前ら……。まあ、いい」

少し離れたところで煙草を吸っていた浅滅あさけしが飽き飽きしたとしても言いたげに、その煙草を床で踏み潰し、こちらに向かって歩いてくる。

「話は全てが終わってからにしろ。今は“鍵”の奪還が最優先だ」
「よく言いますよ。この“街”に“鍵”を連れ戻してきたのはあなたでしょう？　ならどうして“鍵”は相手の手に渡っているんですか？」

「うつ……それはだな……」

浅滅が痛いところを突かれた、とでも言いたげに顔を歪ませる。

「確かにあなたも相当な実力者です。同業者の中でもかなりのレベルでしょう。でも、“支配者”を侮ってはいけませんよ。奴はゲームマスターです」

「……それくらいのこと、分かっている。“鍵”は必ず奪還する」

「当然です」

鈴がゆっくりと歩き始める。

「別棟に生き残りの人々が居ました。今も待たせています」

「まだ生き残りがいるのか？」

「はい。これは私の持論でしかありませんが、結局、自分のやったことは自分に返ってくるものなのです」

だから助ける……と？

「はい。では、いきましようか」

「五月蠅いぞ“大鎌”。お前に指図される筋合いはない」

しぶしぶ、浅滅がそのあとに続く。

「あ、おい、鈴」

「何ですか？ 響輝さん」

「頭、瓦礫の破片がまだくっついてるぞ」

そう言い、俺は鈴の銀髪を手でさらっと撫でる。

「……よし。これでいい」

銀色というか、白色は汚れが目立つからな。

俺を追って、壁なり何なりを破壊してきたらしい鈴は、いまだに、身体の内側がぼろぼろだった。

何だか……あれだな。

人に心配されるのも……。

「な……何なんですか。あなたは」

「はい？」

何だか鈴が怒ったような、困ったような表情でこちらを見ている。

「……もう！ 前言撤回です。あなたはずっと冷たいままでいいです！」

何を言ってるんだこいつは。

「何で、何で急に人を気遣ったりするんですか……ほんと、困るんですよ、そういうのは……」

鈴が胸のあたりを握りながらこちらを見る。

何か問題があったか？

……いや、無いと思うのだが。

『ははは、茶番だな、響輝』

「いきなり話し出したと思ったら何だ、ハーテッド」

『だから茶番だと言っている』

「な・に・が・だ！」

『……変わったな』

「あ？ よく聞こえなかったぞ」

『……フツ。まあせいぜい生き続けるといいさ』

……訳がわからん。

「もういいです、しばらく喋らないでください」

「扱い酷いな」

例え訳がわからなくても、だ。

訳が分からなくても、そんなこと、この街に来てからはしょっちゅうだしな。

今更驚かねえよ。

『まあ、そういうことだろう』

ハーテッドは笑った。

俺は……やはり、笑うしかなかった。

ならば少女は悲愴に浸り … 2

リノリウムがわずかな病院内の明かりに反射してうつすら光っている。

その中に響く三つの足音。

「しかし、お前、事情は分かったが、何で壁ぶっこわしてまでそこまで来たんだ？ 別に普通に階段を上ってくればいいだろうに」

「えっ……」

前を歩いていた鈴が足を止める。

「そ、それはですね……」

急に声が不安定になった鈴が片手に持った大鎌を下ろす。

「それは、えーと、何と言いますか……。響輝さんが壊れて行くのを感じたら、居ても立つてもいらなくなつて……。あーもう！ 何なんですか！？ 今はそんなことどうでもいいでしょう！」

なんか怒られた。

「ほら見る、少年。あいつはあんな奴なんだよ。見たかよ？ あの顔」

「あなたは五月蠅いです！ 黙つててください」
わざとらしい浅滅のからかいにも過敏に反応する。

よくわからんな。

『お前もつくづく嫌な奴だな、響輝』
「今度はなんだよ」

『いいか？ 人にはな。聞かれたくないことというものがあつてだな……』

何か機械が人間について語り出したし。

「ここが西病棟の三階です。たしか、この奥に……」
そう言いながら、鈴が廊下の突き当たりの大きな扉を開け、すたすたと中に入って行った。

「はあ……まだ生き残りが居たと……」
俺もそれに続いて部屋の中に入った瞬間、

「は、な……」
俺の顔に、二丁分の銃口が突き付けられた。

「うおおっ!？」
反射神経（どうやらこれも強化されているらしい）を無意識に使って銃口をかわす。

「こいつ！ 嬢ちゃんをつけてきやがったんだ！」
横目で見ると、がっしりした男がその手にライフルを持っているのが見えた。

「この外道！ ここで八チの巢にしてやる！」
もうひとつの銃口は、若い青年の持つ、マシンガン。

こいつら、何勘違いしてやがる……！

「こんの……」
「はいはい通りますよーっと」

俺が激昂しようとした瞬間、俺と銃口の間を、浅滅が悠々と通って行った。

ならば少女は悲壮に浸り … 3

「な、何だこいつ！ 蜂の巣にされてえのか！」

青年が手に持ったマシンガンを浅滅に突きつける。

「浅滅！」

「うるせえな、少年。よく……見ろッ！」
ガシャッ

浅滅が自分に突きつけられたマシンガンを軽く殴る。

俺の眼にも見えない速度で振るわれた腕が、若者の手に握られたマシンガンを粉々に打ち砕いた。

「な……」

「何いつ……！？」

若者が慌てたように声を上げたコンマ数秒後、さすがの俺でも理解した。

「モデル……ガン……？」

「そうだ」

悠々と先に進む浅滅が振り返って言う。

「クソッ……」

今度は大柄の男がうめく。

「じゃあ、これも……」

「いや、それは本物だ」

ライフルの方は本物かよ！

駄目じゃねえか。蜂の巣は無くても腹に風穴が開くぞ。

「無駄さ。所詮、銃弾の一発や二発、俺に当たったところで何も起こらん」

そうかよ。

いまいち分からない。

“逸れ者”と“鍵”の関係性は理解した。相互関係に似たようなものだ。

だが、こいつの名乗る、“狩り人”というものは一体何なんだろうか。

話のネタにも上がらないが、“鍵”にも“逸れ者”にも、話によれば関係のあまりない存在らしい。

奴は“鍵”を守るとか言っていたが、おそらく直接的な関係性は無いのだろう。

“鍵”のことを知っていて、おそらく戌海の居場所をも知ることが出来るらしい。

ならば少女は悲愴に浸り … 4

“狩り人”。

ロングコートの男、浅滅燎次は自らをそう呼んでいた。

“狩る”ということは、おそらく“恐鬼”を狩る、という意味合いなのだろうが、どうしてそれが“鍵”と関係することになるのだろうか……。

「この野郎！ 舐めやがって……」

ライフルを持っている男が銃口を浅滅の方に向けようとした。

が、

「ド素人が。銃ってのはな！」

瞬時に後ろに回り込んだ浅滅に、自分がショットガンの銃口を背中に突きつけられていた。

「撃ちあいが重要なんじゃない。問題は、速射だ。いかに速く敵を捕捉し、弾を放つか。それが出来なければ、銃で相手を斃すなんて芸当は死んでも出来ないぞ」

「あ、う……あ……」

背中に突きつけられている物が何なのか、大体想像がついたらしい。

男は、口をばくばくさせながら、顔を恐怖に歪ませていた。

「もうそのくらいにしたらどうです？」

振り向くと、先に入っていた鈴が、大鎌を携えてこちらに戻ってきていた。

「ふん、こんな気弱な連中、助けて何になる？」

浅滅がさつとショットガンをしまうと、それを突きつけられていた男がぐりと崩れ落ちた。

「逃げられない、追いつめられた人々を助けずに身捨てたら、もうそれは人間ではありません。非力な者を守るための、闘うための力です。私はまだ、人間でいたい」

鈴が再び言う。

「だからどうしたと？ ただの人間なんて掃いて捨てるほどいるんだ。俺は俺に必要な物しか手に入れない」

浅滅がそう言い、部屋の壁にもたれかかる。

「黙っててください」

鈴がさつと言い、身をひるがえす。

「響輝さん」

「何だよ……」

俺は結局何も参加出来ていないけれどな。

「速く来てください。皆に紹介しなければなりません」

ただ少年は辛みも喰わず … 1

夢を見た。

暗く、暗く、深い場所で一人、膝を抱いて座っている夢。

右も左も真つ暗で何も見えない。

手を伸ばしても、何も掴むことができない。

「で？ これから何をするの？」

声が聞こえた。

前を見ると、さらつと髪を揺らしてこちらを見る、戌海琴音。

「……お前か」

イレギュラー
の姿をした、異常な“恐鬼”。

「そう、私です。久しぶりだね、響輝君、偽物です。紛い物の被れ者です」

“偽魔女”がこちらを見てにやりと笑う。

しかも既に偽物であると大言壮語してやがる。

「でもさ。私も思うんだけど、どうせ死ぬなら今死んだらどうなの？」

「……………」

しかしなあ。

何だか、死ぬ気も最近薄れがちなんだよな。別に、生きてても死んでてもいいかな、と。

「はつきりしてよ、ほんとにさ。私も面倒なんだよね。響輝君が何を恐怖しているか、最近分かんないんだよ」
分からなくていい。分からなくていい。

「いや、私もターゲットを仕留めてこそその“恐鬼”なわけだし」
何言ってるんだこいつ。

人の夢にまで出てきて何を吹っかけてきやがんだ。

ただ少年は辛みも喰わず … 2

「つれないなー」

うっさい。

しかし、あれだ。

分からないものだな。

「何が？」

人の因果というか、そのあたりのことだ。

俺だって、復讐に燃えていたころは、こんな事に巻き込まれるなんて考えてなかったからな。

「何？ 私に愚痴らないでよねー」

“偽魔女” が面倒臭そうに腰に手を当てて言う。

しかし、お前も暇な奴だな。

「ていうか、何で響輝君、私と普通に話してるの？」

五月蠅いな。性格が交差しすぎていまいち現状把握に努めることができないんだ。

「まあ、実を言うと、結構暇なんだよね。私の出番はまだなわけだし」

出番もクソもあるか。

お前なんか二度と出てこなくていいぞ。一生夢の中で漂っている。「はいはい。なんか響輝君機嫌悪いみたいだし、今回はもう帰りまーす」

なんなんだよこいつ。

ただ少年は辛みも喰わず … 3

「――」

声が、聞こえた。

「――ん」

俺をまどろみと睡眠から呼び戻す、声。

まるで鈴の音のような、凜とした音色。

「――き――さん」

うるさいな。俺は眠っていたんだ。

どいつもこいつも俺の邪魔ばかりしやがって。……別に何かをしている最中という訳でもないが。

しかしあの“偽魔女”め。出たい時に出てきやがって。

出るなら本物の方に出てほしかったところだ。全く。

「――響輝さん！」

「ぐはっ！」

いや、分かったた。今起きようとしてたのに。

「起きてください、響輝さん。起きてください」

「いや、痛いから。柄は止める峰もやめろ」

もう起きてるから。

「死なないでください！ 響輝さん！」

「死んでないッ！」

痛い痛いお前何か俺に恨みがあるのか？　あるなら今のうちに言
つとけよ。

「いえ、別に」

無いのかよ。

「ここ最近響輝さんの態度がらしくないので、鬱憤を晴らさせてい
ただきました」

敬語にム力つくなよ、俺。もうこいつと戦っていけないぞ。

「もう、眠気が覚めるまでそこにいてください」
鈴が部屋の外に出て行く。

「よお、兄ちゃん。目は覚めたか？」

ふと顔を上げると、ライフルを持った男がこちらを見下ろしてい
た。

あの時銃を突きつけていた男か。

「俺は五十嵐という。お前は？」

「……巽野響輝」

「そうか。まあ、よろしく頼むぜ」

そういえば、休息を取る前に一通り残っている人々の紹介はされ
たが、この人だけはされてなかったな。

「ああ。実銃を持ってるのは俺とあと二人だからな。俺は見回り係
さ」

「そうですか」

そうか。今は化け物共との負け試合の最中だったか。

五十嵐が部屋から出て行く。

「はあ……」

『ほう。お前がため息とは、珍しいな』

「五月蠅いな。ほつといてくれよ」

『む。五月蠅いとはなんだ。もう話してやらんぞ』

「すいません」

しかし、暇だな。

ここは恐鬼の襲撃は無いのか。

「ガキの癖に生意気な。お前なんざが敵を侮るのなんて百年速いぞ」
浅滅が俺が壁にもたれて眠っていた部屋に入ってきた。

「お前がその台詞を言つと何故か様になるな」

「当然だ。俺にしてみれば、人類は全員年下だからな」
そついやそつだ。

！
特にすることも無いので、そんな事を吟味しながら、人類皆年下
などと叫びながら部屋を出て行く浅滅を眺める。

ただ少年は辛みも喰わず … 4

ここにいる生き残りは見た目はかなり武装しているように見える。

鈴に全員の紹介をしてもらった時も、ほぼ全員が装備していた。ウージー、M何とか、俺と同じベレッタやデザートイーグルなど、映画で見たような銃や武器ばかりだった。

それもそうだ。ここに隠れている人々の武装は、3つを除いてすべてが精巧に作られたモデルガンや模造刀。

だが、それらをいくらちらかせたところで、“恐鬼”どもは臆しない。

ならば、それらの武器は何に対して脅威を発揮するのか。

『すなわち、モデルガンや模造刀を前にして勘違いするような者とは……』

「……人間、だな」
その通りだ。

最悪こうなるだろうとは考えていた。

すべての人間が等しくお互いを尊重しながら戦えるはずがない。

つまり、こうだ。

今ここに立てこもっている人々が今最も恐怖しているのは、化物ではなく、他の人間に対して略奪行為を行っている、人間。

いわゆる悪知恵の働く、不良や暴走族に相当する人々だ。

立てこもっている人の話だと、彼らはこの状況になってすぐに武器を手に入れ、法や規則に縛られない環境を利用して化け物や生き残りに向かって暴虐の限りを尽くした。らしい。

『まあ、定番か』

「ああ。……定番だな。むしろ、いつかこうなるとは思っていた」
むしろ、戌海に逢わなければ俺だって独りで暴れまわる狂人と化していたに違いない。

琴瑟調和……か。

俺にとって、その能力は凶となるか、吉となるか……。

また、少女は黒に出逢う … 1

SIDE

KOTONE

……なんだろう。

この眠気は。

何だかずっとこうしてこのまどろみの中にいたい……。

「ん……」

身体を起こす。

「ここは……」

なんだろう。物凄く高いところにいる気がする。

見ると、どうやら私のいるところは、かなりの高度で、かつ小さい密室であるらしい。

「何だろう……ここ……」

向かい合わせの小さな席に、横や前後に外に見える窓。

「ここは……」

観覧車の部屋の内の一つ……だ。

「どうして……こんなところに……」

私は確か、浅滅さんに会って、龍ヶ峰市に戻ったはず……。

「でも……ここは……」
竜ヶ峰市の中央部。

個々の自治区と化している北、南、西、東の四区が共同で管理す
中央区の、龍ヶ峰市唯一のテーマパーク、ロストランドの目玉アト
ラクシヨン、大観覧車だ。

どうして私はこんなところに……。

確か“街”との境界である教会に行つて、そのあと……。

「うっ……」
思い出せない。

覚えのない場所に居るということは……私は敵に連れ去られたの
だろうか……。

そう思いながら、赤い雲の浮かぶ黒い空を見上げていると、視界
に一つ、黒い物が入った。

「あれは……」
シルクハット……。

それも、真っ黒な。

でもここは、ほとんど観覧車の頂上近くに値している。

こんな高さに、ふよふよとただのシルクハットが浮いているはず
がない。

また、少女は黒に出逢う … 2

「シルクハット……でも何でこんなところに……」

じっと見ていると、シルクハットはふよふよと、蝶のように緩やかに回りながら下降し、自分の入っているゴンドラの窓の前に滞空した。

「……………」

なんとも言えずにその様子を見ていると、

「よい、しょつと」

という声が聞こえ、シルクハットの内側から、によきつと、仮面をつけた顔が現れた。

「うわっ!？」

急に空中に飛び出してきた仮面に、思わずゴンドラの中で飛び退く。

ぐらぐらと、ゴンドラが揺れる。

続いて、シルクハットの中から、一枚の大きな黒いマントが飛び出し、足も胴体も無い、シルクハットとその下に仮面、その下にマントという、不完全な人型を作り出した。

それらはまるでそこに身につけている“何か”が居るかのように、一糸乱れぬ動きをしている。

マントは何かがあるかのように膨らんでなびいている。

その様子を困惑しながら見ていると、

「やあ、お嬢ちゃん」

“それ”が、拡声器を通したかのような声で話しかけてきた。

「……誰？」

「誰って……見なかったのかい？ お嬢ちゃん。せっかくコミカルに登場したのに」

いや、はつきり言っただけで恐怖でした。

「オイラはただの黒い帽子さ」

そう言っただけで（仮面のせいで顔は見えないが……むしろ頭すらないように見えるが）、“それ”はけらけらと笑った。

仮面は縦に線が入っており、私から見て左側は真っ黒に塗りつぶされており、右側には、白地に赤く、狐のような切れ目と、にやり笑っているかのような口の線が描かれていた。

「黒い……でも、“恐鬼”^{おに}何でしょう。私を見張りに来た“支配者”^{ルラー}の手下？」

そう言っただけで、強気に出るも、“それ”は、

「あいつの配下……ね。まあ、そんなところかな。オイラはただのブラック・ハット“黒帽子”。それだけさあ」

笑っているのだろう、帽子をゆらゆらさせながらわたしの方を見ている。

また、少女は黒に出逢う … 3

「なあ、お嬢ちゃん。君は自分がどういいう存在か分かっているのかい？」

唐突に、空中を浮遊している“ブラック・ハット黒帽子”が話しかけてくる。

「私……は、“鍵”。私の中には、人では持ちようのないチカラを持った何かが入っている、でしょ？」

「おやおや、これはたまげたね」

そう言って、“黒帽子”は何もない空中にぽんっ、というコミカルな音と共に、白い手袋を二つ出した。

しかし、その先にあるであろう腕はない。

白い手袋だけが、そこにまるで腕も手もあるかのように、マンツの動作に連動しているのだ。

「自分がいかに危険で重要な存在か分かっていながら、そんなに強気に出られるのかい？ お嬢ちゃん。囚われの御姫様はずいぶんと賢いようだ」

白い手袋が『訳がわからないよ』、とでも言いたげなジェスチャーをとる。

「私は……確かに巻き込まれただけかもしれないけれど、私が死なない限り、この中の“鍵”は取り出せないんでしょう？」

「まあ、確かにそうだね。君は立派な当事者だ。騒動の中心に居ると言っても過言じゃあないだろうさ。ただ……」

そう言つと、“黒帽子”は仮面……顔をゴンドラの窓ぎりぎりま

で寄せてくる。

「君を想い、君の為に戦ってくれている人のことはどうするつもりだい？」

私の為に……戦っている人？

浅滅燎次のことだろうか。

それとも。“恐鬼”と戦えるような人が居るとでも言うのだろうか……。

「ああ。そうか。そうだったね。君は忘れていたのだったか。うんうん、不憫な話だよ本当に」

意味深な事を云いながら、仮面が相槌を打つ。

「忘れている……？ 何を？」

確か、浅滅もそんなことを言っていたような気がする。

「お嬢ちゃんがこの街で出遭った、最も大切で、それでいて最も邪魔で、理解しえない……そんな存在のことさ」

あいつも立派な当事者だね、と言いながら、仮面が一回転する。

「誰……？」

誰のことだろう。家族のことだろうか。

それともクラスメートの内の誰かか。

「ああ、哀れだよ、君たちは。繋がっているのに、繋がっていない。矛盾に溢れた関係性だ」

そう言いながら仮面がまた一回転した。

「誰のことなの？ 私が忘れてるって……」

「いやいや。それを思い出されるとオイラも面倒だからね」

“黒帽子”がゆつくりと離れて行く。

「待つて！ 分からないよ！ 教えてよ……」

「それは無理な相談さ、お嬢ちゃん。オイラにも立場つてものがあるからね。それに、そろそろ奴が来るころ合いだ。オイラはしばらく潜むとするよ。じゃあお嬢ちゃん、また、^{ゲーム}盤上で遭おう」

そう言う声と共に、“黒帽子”の仮面、マント、手袋が順にシルクハットの中にすぽっと入って行き、残った黒いシルクハットは現れた時と同じように風に流れるかのように夜の闇に消えて行った。

「……忘れてるって、言われても……」

忘れてるのなら、私が自分で思い出すことは不可能ではないのか。

「ふふ、ずいぶんと困惑しているようだな、“鍵”よ」

「ッ!？」

振り向くと、窓の外に、黒いローブと、それを着ている、一人の男。

「……“支配者”……!」

「そのまま困惑し続けるといい。お前の恐怖は、お前の力だ。それが膨れれば膨れるほど、後で喰らう時の楽しみが増えるというものだ」

黒ローブが夜風になびき、男のがっしりした体つきが見て取れた。

“支配者”。この街を囲い、人々に恐怖を与えた張本人。

背筋に寒気が走る。ただ会話しているだけだというのに、この威圧と恐怖。

幾度もの絶望と恐怖を与え、見続けてきたことを、格の違いを一瞬で分からせる。

「あなたは、どうしてこんなことを……」

「理由を訊こうと云うのか？　ただの人間の分際で」

五月蠅い。あなたに何かを言われる筋合いは無いわ。

「ふん、まあよい。私がこの力を持ってして、困う理由か。そんなことは決まっている。法則だからだ」

「法則……？」

「そうだ。動物でいえば本能に近いか」
「何が何だかさっぱり。」

「分からなくても仕方あるまい。今の貴様はただの人質だ。私は絶対的勝利の布陣において、相手を弄び、圧倒する」
相手……。

忌まわしき逸れ者と狩人を圧倒し、破壊する。と支配者は言う。

また、少女は黒に出逢う … 4

逸れ者……。

確か、浅滅の言葉の中にその単語があつたはずだ。

「“鍵”に想われ、それがゆえに人と異常の狭間に立たされた人間。“逸れ者”はあくまで世界の法則に逸れた人物。すなわち、人間も関わる世界の法則にも多少は作用されないものなのだ」

「法則に……抗える存在……」

「その通り。世界は法則を捻じ曲げられることを何よりも恐れている。だから、その異分子を“鍵”と同様に排除しようとする」

「今殺されて、襲われている私達の方が異分子で、要らない存在だつていうの？」

「その通り。無論、個々の感情は置いておいての話だ。単に、大本の世界自体が、拒んでいると言つことであつて、我々には逆らう権利もある」

「だったらどうして……」

「ならば聞こう。“鍵”よ」

“支配者”が腕組をして余裕の笑みを浮かべる。

「生き物は生きて、そして死ぬ。寿命をまっとうして天に召される。それが世界の道理だしよう。ならば、なぜ人は寿命をまっとうできずに死ぬのだ？」

いきなり何を言い出すのだろうか。

「自殺、事故、寿命以外での死亡。それ自体、十分に法則からは外

れている。人間は食物連鎖のように何かに食われたり、食ったりの関係性をもはや持つてはいない。ならば、圧倒的優位な安全圏で生きるのが道理ではないのか？」

確かにそうだけれども……。

「それなのに、人は感情を暴走させ、それがゆえに人を殺す。それを防いでいるのは本来の恐鬼だ」

何が悪い、と支配者は言った。

それすら少年は拒絶する
… 1

I SIDE

H I B I K

「ひゃあああああっほおおおおおおおおお……!!」
「ぐっっ!!」

破裂するような金属音。

「おいおいこの餓鬼、てんで話にならないぜ!」
いかにもなライダージャケットを着ている金髪の男が下劣に笑いを漏らす。

「死亡フラグを立てておいてこのザマかよ!」
チェーンソーから取り出した刃のみを振り回している男が叫ぶ。

「黙……れ……」
体中が痛い。

四方八方から飛び交う刃が、銃弾が、鈍器が、俺の四肢を、心を、全身を破壊していく。

まだだ。まだ、終われない。

こんなところで、俺は死ぬことは出来ない。

「俺は……死ぬわけにはいかない。殺さず、殺せずして、この状況を打破する。ああ、やってやる。やってやるさ。眠れる獅子は、恐ろしい……」

右手にバタフライナイフを。

「ぎゃあっ！」

腕を切りつけられた男が悲鳴を上げる。

左手にベレッタM92Fを。

「あああああ、足が!？」

血を噴き出しながら、左方で銃を構えていた男がもたえる。

盾は必要無い。

戦う。斃す。殺さない。

俺は……。

数時間前。

「おい！ 嬢ちゃん！」

俺と鈴が居る部屋に、五十嵐が飛び込んできた。

「何があつたのですか？」

ライフルを持った五十嵐が焦ったように状況を説明する。

「奴らがやってきた！ 諦めていなかったんだ、あいつら！」

「鈴、あいつらってのは……」

誰のことだ？ “恐鬼”か？

「いえ、人間です」

人間……だと？

「はい。先ほど、ここに立て籠もっている人から聞いたと思います

が、ここの人々が恐れているのはむしろ、恐鬼よりもその人間達なのです。ここら一帯を縄張りに行っていた暴走族と、それらの仲間が、救護用具と、その……女を求めて襲いかかってきた、と」

「それは訊いた。そして、もう一度そいつらが来るかもしれないということもな」

なるほど。

しかし、正直、恐れるに足らないと言っべきか。

こちらには、大鎌使いに狩り人のショットガン使いがいる。並みの人間では、歯が立たないだろう。

「おい、俺を巻き込むな。現時点で最重要なのは、“鍵”の奪取だ。そんな連中にかまっている暇はない。さっさと行動を起こすべきだ」

横に居た浅滅が云う。

こいつはどうやらその人間との戦闘にやる気ではないらしい。

「まずい、来たぞ！」

もう独り、若者が報告に駆けこんできた。

戦闘……か。

それすら少年は拒絶する
… 2

「響輝さん！」

「……何だよ」

駆けこんでくる人々に指示を出していた鈴が俺の方を向いた。

「あなたは窓の外を！ 見張りをお願いします」

「分かったよ」

部屋にかけられたカーテンを少しめくり、外を見る。

……空は相変わらず赤と黒の混じった色をしている。
だというのに、街は真っ暗だ。

うつすら見える街灯、電灯。

「……ん？」

……と、動いている赤い光を見つけた。

何だ、あれは……。

「おい、鈴」

「何ですか？」

鈴も顔を出す。

「……ライトだ。乗り物の」

「いえ、バイクの物です。ここへの襲撃者の持ち物ですよ」
バイクだと……？

つまり、暴走族か。

「そうですね。そうとも言います」

だんだんライトが近くに来ている。

「不味い。体制を立て直さないといけないんじゃないのか？」

「そうですね」

そうこうしているうちに、いくつかのライトが病院の玄関前に来ていた。

「くっ……まずいですね。早くこちらからもアクションを起こさないと」

鈴がそう言って部屋を出て行こうとする。

「……おい、鈴」

「今度は何ですか！？」

バイクに乗っていた人間が降り立ち、こちらの部屋の方を見上げた。

男が数人。女も少し居る。

見てみると、男のうちの一人が、何かをこちらに向かって構えた。

「あれは……」

「……バズーカ！？」

次の瞬間、

視界が……、真っ赤に染まった。

それすら少年は拒絶する
… 3

……… 体中が、痛い。

何だこれ。ウェストブリッジから落ちた時のデジャヴじゃないのか。

ゆっくり目を開ける。

「……………」

視界に入るのは、横向きになった地面。
目の前に雑草が生えているのがうつすら見える。

しだいに記憶が戻ってくる。

確か、あの時暴走族の内の一人が構えていたのは、種類までは分らないが、バスター力の類。

視界が真っ赤になったのは、おそらくあの部屋の窓に弾が着弾したから。

では、何故俺は地面に伏しているのか……。

考えるまでも無い。

落ちたのだ。確か、見張りをしていたあの部屋は三階……いや、四階だったか。

窓際に居たのが不味かったのか、はたまたバスター力を視認した瞬

間に飛び退かなかったのが原因か。

なにせよ、今の俺の身体はぼろぼろだろう。骨も何本か折れているかもしれない。

「ッあ……」

ゆっくりと腕に力を入れ（折れていなかった）、半身を起こす。

「全く……、何の冗……くあッ……」
駄目か。まだ、身体がきついか。

『大丈夫か？』

「お前……壊れてなかったのか」

『当然だ。そう作られているからな』

「そう、かよ……」

全く、死にかけた。

しかし、何で俺はバズーカと認識した時にその場から逃げなかったのか。

『覚えていないのか？』

ハーテッドがいぶかしげに言った。

「……何をだ」

『まあ、隠すことでもない。貴様、このバカ者は、あの時とっさに庇ったのだ』

かばった？ ……誰をだ。いや、何をだ？

『あの大鎌の少女だ。お前は自分の身体が壊れる可能性も厭わずに、バズーカの弾丸からあの娘を守ったのだ』

「……なに……？」

俺が？ ……この俺が？

「人を庇った？ 馬鹿な！？」

『事実だ。我も見ていたからな』

そんなことが……。

我ながら、馬鹿なことをしたものだ。

「……鈴は？」

『襲撃者の対応に追われている。ここには誰も救援に来れないだろうな』

「……そうかい」

それすら少年は拒絶する
… 4

ゆっくりと身体を起こしていく。

しかし、俺の身体もずいぶんと頑丈になったものだ。鈴は嘘を言っていたわけではないらしい。

耳をすますと、うつすらと人の喧騒の様な音と、銃声が数発聞こえた。

戦闘は始まっている。

速く。

早く行かなければ。

少しずつ歩みを進めるが、俺の脚は三歩歩いたところで停止した。否、せざるを得なかった。

なぜなら。

「おい、ここにガキがいるぜ」

「いつの間に降りてきてたんだこいつ、とにかくリーダーに連絡だ」

連絡……。

現れた二人の男の内、一人が懷に手を入れる。おそらくレシーバ
ーか何かを持っているのだろう。

「なあ、ハーテッド」

「……何だ？」

おそらく俺が言いだすであろうことを分かって、ハーテッドは返す。

「二度。してしまったことって、何度やっても同じことだと思うか？」

『どうだろうな。それは人に訊くことでもないと思うが』

「それもそうか」

そう思いながら、目の前を見据える。

「リーダー、ガキが一人下にいます、どうしますか？ …… え？
今忙しいから後にしろ？ 何ですか」

どうやらそのリーダー格ともめているらしい。

まあ、とにかく連絡を終える前に闘い始めようと思ったのだが。

次の台詞を聞いた瞬間。

「ははあ。さては女子大生でも捕まえたんですね？ ほらやっぱり。
お楽しみもいいですけど、他にすることもあ……」

身体が、動いた。

自分でも驚くくらいだった。

恐らく折れていた左腕をポーチに突っ込み、筋肉がきしむのを感じながら瞬時にバタフライナイフを展開し、レシーバーに投擲する。

「うおっ!？」

ナイフがレシーバーに突き刺さり、驚いた男がそれを地面に落とす。

「こんのクソ餓鬼！ 舐めんじゃ……」

ざくり。

「ね……え……?」

一歩で距離をつめ、レシーバーに刺さっているナイフを抜き、男の腹を掻つ切る。

「あ……腹が……痛……ぐふっ」

柄に持ち替え、顎にアッパーをかける。

一人。

「あ、……え……何だ、こいつ……」

すぐに振り向き、もう一人の頬に蹴りを入れ、

「ぐはっ!」

吹っ飛ばうとした先に回り込み、わき腹にバタフライナイフを垂直に刺す。

「あゝあゝあああ!? 痛い、痛い痛い痛い!」

「痛……ぐふっ……」

ナイフをねじりながら、片方の手で脳天に拳を叩きこんだ。

男が気絶し、動かなくなる。

『響輝。お前止めたわりには腕が上がって無いか?』

「気のせい……だろ」

俺は進む。

筋肉が悲鳴を上げる。

骨がこすれる音が耳に響く。

それでも俺は歩く。

「どう……して……」

私は身体を張って私を庇った目の前の少年……異野響輝を見る。

“逸れ者”となっているため、身体が爆発することはなかったよ
うだが、バズーカの弾丸の直撃を受けたのだ。ただでは済まないは
ずだ。

拡散するはずの爆風が一点に……響輝さんの身体に集中していく。

無意識に力の一種を使ったようだ。

「ぐ……は……」

響輝さんが壊れた窓から落ちて行く。

衝撃のあまり、私は声が出ない。

どうして。

どうしてなの……？

まず浮かんだのは、疑問。

どうして……響輝さんが、私を庇う？
庇って……何になる？

そもそも、響輝さんは進んで人を助けるような人ではないはずだ。私が生き残りの人々を助けようとしても、見向きもしなかったのに。

“琴瑟調和”。

ふいに、その四文字が頭をよぎった。

夫婦や友人が仲むつまじい事のたとえだが、転じて、ここでは人の暴力的な感情をおさえる効果をもたらす、今回の“鍵”の能力。

きつとこの少年とは、非常に相性のいいものなのだろう。

サレド少女八朦朧二 … 2 (前書き)

そつえば鈴サイドは初でしたね。

「響輝さん!!」

とつさに破壊された窓際に駆けより、落下した響輝さんの行方を確認しようとする。

が。

「ッ……!!」

顔を出そうとした瞬間、頬を一発の銃弾が掠める。

熟練した“逸れ者”なら銃弾など余裕で見切れるものなのだが、この時私は焦っていた。

「嬢ちゃん! 顔を出すな、狙撃されちまうぞ!」

部屋に駆けこんできた五十嵐がなおも行こうとする私を抑える。

「でも……でも、響輝さんが!!」

「無駄だ! ここは四階だぞ! 落ちたら助からない!」

「でも、大丈夫なんですよ! 身体の方はまだ壊れていないはずです! 今行けば助けられるんです!」

「だから落ち付けって言ってるだろ、嬢ちゃん!」
五十嵐が怒鳴った。

「今出て行ったら嬢ちゃんでもただじゃ済まねえ。それに、今は下での戦闘を優先するべきだ」

「……っ、……そう、ですね……」

肩で息をしながら、どうにか冷静さを取り戻す。

大丈夫かどうかは五分五分だ。

自分たち“逸れ者”の身体がどれほどまで頑丈なのか、正確なところはわたしも知りえていない。

ましてやあんな高火力の火器を撃たれたことなど一度も無かった。

響輝さんが無事かどうかは、今は分からない。

でも、今は建物に籠っている人々を助けるべきだ。

階下に行つて、“狩り人”を動かさないと……。

「響輝さん……、死なないで下さいね……！」

私は、鎌を持ち、五十嵐と共に部屋を出、階段の方に駆けて行った。

S I D E

H I B I K I

来ている。

そう、感じた。

身体の中の、恐怖を感じる部位がこれでもかという具合に蠢いている。

バズーカの着弾音。銃撃戦の音。

ほとんど静まり返っているこの“街”でそんなものを鳴らせば、自然と集まってくる。

恐怖がやってくる。死がやってくる。

その姿は変幻自在。魑魅魍魎すべてを淘汰し人を喰らう。
恐れよ鬼。

……ならば俺は何だ。

今、体中を傷だらけにしてもなお立っている俺は何なんだ。

「……冗談だ。狂言だ」

『不条理とも言っな』

お前の相の手はいつも微妙だよな。まあこの際だからとやかくは
言わないが。

ナイフの刃が小刻みに振動する。

かち、かちと金属音を鳴らしながら、俺は月下の下、今だ生きる
者を求めて飛来する異形の物達を見上げた。

『それで、どうするつもりなのだ？』

腰でハーテッドが話しかける。

「襲っている奴らを無力化する」

俺は端的に答えた。

『ふむ。“襲われている人を助ける”ではないのか？』

「……意味は変わらないさ。ちなみにこの場合、その奴らには“恐鬼”も含まれるからな」
『分かっている』

手元にはナイフが一本。ベレッタが一丁。ただし、銃弾の補給は無い。

地上を歩く“恐鬼”はまだここの戦闘に気付いていないようだった。

だから今警戒するべきなのは、空を移動できる“恐鬼”。

羽根を持つ、異形のモノども。

ハンドガンでは五階建ての病院のはるか上空を狙撃することは出来ないだろう。

なら、まずは病院の中に入らなければならない。

「……だがッ！」

病院の正面玄関の近くの道に出て、俺は歩みを止められた。瞬間、足元の土が何かが当たったかのように抉^{えく}れる。

コンマ数秒遅れて、乾いた音が耳に反響した。
『狙撃か！』

ハーテッドが声を上げる。

顔を上げると、病院の端の方、三階の端の窓できらりと光るものがあつた。

もうあそこまで入り込まれているのか……。
もしかすると、大半の人が助からないかもしれないな。

『だが、やれることはやる、であろう？』
言われなくても。

銃弾が髪の毛をかすめる。
俺は無造作にポケットからベレッタを取り出すと、弾を装填し、
片腕を上げた。

グリップを握り、引き金を引く。

ぱあん、というお決まりの音と共に、三階に居た狙撃手が銃を取り落とした。

そのまま銃は落ちて行く。拾いに戻るには、一度一階まで下りなければならぬ。

病院内の狙撃手は無力化。

次は。

「おい、ガキが一人でのこのこ歩いてるぜ？」

「あらボクウ、こんなところで遊んでちゃ駄目じゃないの」
正面玄関の前で佇んでいる、太り気味の男と、にやにやしている女。

おそらく見張りなのだろう。

「おいクソ餓鬼、止まれよ。止まらないと……」
男がポケットからリボルバーを取り出す。

「撃つちまうぜえ？」

「駄目よ。せつかく子供を見つけたのよ。たつぷり苛めてあげないと」

男も女もにやにや笑っている。

そうだな。しばらく忘れていた。

そういえば、大人からしてみれば、俺はただの子供なのだ。

こんな狂った街でも、未だにそんなくだらない年功序列に似た何かが残っているらしかつた。

結局のところ、生きるか死ぬかなんて、個人の技量次第だということに。

サレド少女八臍臍二 … 4

閉ざされた街。

いわば、そこは狂気と恐怖の溢れた化け物の巣窟。

それと同時に、法も秩序も人徳も外道も関係の無いただの盤上でもある。

“支配者”はゲームマスター。

俺達や“恐鬼”、そのすべてが盤上^{ゲーム}の駒。

駒は自分勝手に動き回り、誰も想像の出来ない方向にゲームは進んでいく。

祇園鈴はこの闘いを負け試合と称した。^{ルージング・ゲーム}

理由は、所詮、自分たち“逸れ者”と“鍵”は世界に見放された要らない存在だから、だそうだ。

「クソ餓鬼が！」

そう男が叫び、引き金に手をかける。

瞬間、銃弾が腕をかすめる。

だが俺はそれを感じない。

意識の全てが標的に集中していた。

地面を蹴り、ナイフを展開しながら走る。

「ちょ、何なのこのガキ！」

女が包丁を取り出し、こちらに切りかかる。

が、その刃は俺のナイフのギザギザした峰に受け止められる。

いわゆる、破壊峰。くぼみに相手のナイフなどをはめ、相手の刃をへし折るための峰だ。

思いつきりナイフを曲げるように手首をひねり、それと同時にばきつ、という音がする。

「なっ……」

根元から刃をへし折られた女が驚いたようにたじろぐ。

その瞬間を逃しはしない。

「ぎゃあっ！」

女の懷に拳を打ち込み、翻える。

「おい、手前、化け物か……！？」

男の方に向き、ナイフを構える。

「……半分はな」

「お、おい、待ってくれよ。止せて。分かった分かったら」

男が焦ったように言い、ハンドガンをぽいと捨てる。

「ほら、これで俺の武器は無いぞ！俺は攻撃出来ない。だから見逃してくれよ、な？」

「……」

俺はナイフを閉じ、ポケットに収める。

そして、男を置いて病院の正面玄関の方へ歩きだ――

「——なんてなあっ！！！！」

男が懐から大型ナイフを取り出し、無防備な背中に斬りつける――

「——黙れ」

「な……」

俺の手はそのナイフの刃を受け止め、握りしめている。

隙間から血が流れ、地面に滴る。

「な、何なんだよ手前、頭おかしいだろ！？ 普通手で受け止めるか？ 手だぞ！？」

ポケットからベレッタを取り出し、男の眉間に突きつける。

「……お、おい、待ってくれ。今のはちょっとした気の迷いなんだ。な？」

弾を装填し、引き金に指をかける。

「おい、マジかよ！？ 止めてくれ、頼むから、な？ おい、止めるって。お——」

引き金を引く。

ぱあん。

いい音がした。

男が泡を吹いて転がっているのを見ながら、俺は病院の正面玄関

をくぐった。

「くっ！」

相手の弾丸を鎌の刃で防ぎ、私は後ろを振り向いた。

「浅滅さん！ 状況は！」

しばらくして声が返ってくる。

「屋上に“恐鬼”どもが来ている！ のんびりするな！」

非常階段の上の方から浅滅の怒号にも似た叫び声が聞こえてきた。

「こんの小娘があああー！」

階段の下から銃を構えていた男がナイフを引き抜く。

銃の方は弾切れらしい。

落ち着いて、相手の隙を見つけ……一閃ッ。

「ぎゃあっ！」

男が胴体に鎌の峰を喰らい、床に叩きつけられる。

「……」

これまで戦闘した賊は五人。

いずれも無力化したが、それにしても人数が多い。

「……でもそれがどうしたっていうんです」

自問を即座に否定し、階段を飛び降りる。

後ろからはここに籠っていた人々の中でも、戦闘力が全くない者がついてきている。

中には学生の姿もあった。

その数、十人。

「殺させません。絶対に……」

浅滅は上で恐鬼の相手をしている。

別に人間の救出に興味などない、というのが彼の主張だった。

それはいささか私には理解のしがたい考え方だが、黙って彼のやりたいようにさせている。

その方が、下手に仲間割れするよりははるかにマシだ。

……響輝さんは大丈夫だろうか……。

ただ、私はその心配だけはぬぐうことは出来なかった。

——その男が現れたのは、それから数分後のことだった。

「よお、お嬢ちゃん。ちょっと待ってはくれねえかい？」

私達が歩いていた通路の後ろから、急に声がかかり、振り返る。

見ると、自分たちからそう離れていないところに、一人の男が立っていた。

まだ若い顔立ち。二十代前半か、後半か。

「お嬢ちゃん、少し殺気出し過ぎだぜ？ 俺達は救命用具が欲しいだけなんだ」

「それと、女……でしょう？」

そう問うと、男は少し驚いた顔をし、すぐに笑い始めた。

「ふふふ、あーっはっはっはっは！！」

しばらく男は腹をかかえて笑い続ける。

私や人々は、怪訝そうにそれを見ているだけだった。

「なんだよ知ってたのか。まあな。極限状態ってやつ？ ほら、よくあるだろ、ホラー映画とかではそういうシーンはつきものじゃねえか」

男が笑う。

「それでも、この人たちを危険な目に遭わせるわけにはいきません。大鎌を構え、ひょうひょうと構えている男の方を見据える。

「おー、こわ。わかったわかった。とりあえず救命用具だけでもくれんかい？」

「いきなり襲撃してきてよく言えた口ですね。どうせ私達を殺しても手に入れるつもりなのでしょう？」

そう言った瞬間、それまでにへらと笑っていた男の表情が豹変した。

「いちいちうつせえな！！ いいからよこせつつつてんだろぅが！！」

目は血走り、怒りの表情をあらわにしてこちらを睨みつけてくる。とんでもない形相だ。

後ろに居る人の内の、一人の女学生がひっ、と声を上ずらせる。

「……………」

この男は危険だ。

直観的にそう感じた。

「そういえば、下に居た女子大生……だったか？　なかなかの上玉だったぜ」

「ッ！！」

その言葉に、身体が勝手に動く。
ほとんど条件反射だ。一瞬にして、視界に相手の姿しか入らなくなる。

が。

「ははは、ばーかッ」

男はさつと懷から拳銃を取り出すと、私の後ろを狙って、撃った。

「なッ、しまッ……」

急停止した時にはもう手遅れ。

「ぎゃああッ！！」

後ろに居た中年の男性が腹から血を流して倒れていた。

しまった。やられた。

そう思ったのもつかの間、庇うべき存在を攻撃されたことで、私の眼には既に男しか入っていなかった。

「おいおい嬢ちゃん。焦りは禁物だぜ？」

そう男が言った途端、両脇の通路からそれぞれ一人ずつ男が飛び出してきた。

「ッ！！」

とつさに身をひねろうとするも、大柄の男達の手からは逃れられず、私は一瞬で床に組み敷かれた。

「おいおい嬢ちゃん。焦り過ぎだろ？　おい」

腕を振り上げようとするも、大鎌は手首をひねられた痛みで手放してしまった。

「はい、これで武器は無し、と。活きの良い嬢ちゃんだな。楽しませてくれそうだ」

そう言つと、男はぺろりと舌舐めずりをした。

不味い……。

完全に相手の思つっぽだ。

このままでは……。

人間、自らの危機を理解すると、悪い想像が止まらなくなるものだ。

「くッ……」

度重なる戦闘を繰り返し、身体にも疲労が見え始めている。

男達の組み伏し方は実に正確だった。

いくら身体が丈夫になろうとも、関節や骨の位置が変わるわけではないので、相手の行動を封じることの意味のある関節技を受けてしまうと、大抵の“逸れ者”は無力化されてしまう。

この男、思った以上に計算高い上に狡猾だ。

「リーダー、この娘、どうするんですかい？」

私を組み伏しているうちの一人が今だ銃を構えている男に訪ねた。

「連れて行くぞ。活きのいい娘は好物だ」

後ろでおびえている人々に銃で威嚇しつつ、男が答える。

「おいおい嬢ちゃん、抵抗はするなよ。後ろの弱そうな連中を撃ちまうぜ？」

「……」

何も言い返せない。

かといって、私がここで力任せに男たちを跳ね飛ばしたら、その間にこの男は後ろの人々を何のためらいも無く撃つだろう。

今の私は、とてつもなく無力だ。

嫌な想像が私の頭を駆け巡る。

これから自分が、どんな凌辱を受けるのか、想像しただけで怖気が走った。

「んー、そうだな。 お前らにもおこぼれやるからよ。 ここで襲っちまうつてのはどうだ？」

突然、男がとんでもない事を言い出した。

「ええ！？ いいんですか？ リーダー」

私を組み伏している男が二人とも、私の苦しげな表情を見る。

「ああいいともさ。 やりたいことは全てやる。 それが俺らのポリシ―だろ？」

男たちが顔をにやつかせる。

気持ち悪い。「冗談じゃない。

何で私が、こんな目に……」。

襟を掴まれ、力任せに吊りあげられ、服をはだけさせられる。

恥辱の極みだ。だが抵抗は出来ない。

後ろに居る人達に逃げるよう言いたいが、男が銃を向けている以上、無謀な賭けはできない。

「さつてと。 じゃあ俺から……」

と、男が言い始めた時だった。

「あ…… ああ…… あ……」

ふと耳に入る、声にならないような声。

目だけを向けると、震えていた女学生が、私達の方を指さして怯えたような声を出していた。

最初、私はそれがこれから始まるであろう酷い光景を暗示したものだと考えた。

男たちもそう感じていたに違いない。

ただ、少しして、その怯えようが尋常ではないことに気付く。

「な……なによ、“あれ”……」

その指が私達を通り越した、さらに向こうを指していると気付いた時、その“感情”は訪れた。

「あ……ぐッ……」

特に何を見たわけではない。何かに触れたわけでもない。

ただ、急に心を抉^{えぐ}る、激しい呪詛の念。

猛烈な吐き気が頭を襲った。

そして、それが自分の抱く、“支配者”への復讐の念にも似ていることに気付いた時、私は背後の通路の先にいるモノが“何”なのかを悟った。

「な……なんだよ、あいつ」

男の銃を持つ手ががたと震えている。

対する私も震えを抑えきれない。奥歯がかち、かち、と音を立てる。

私を掴んでいた男の手が力無く離れ、身体が床に落ちる。

ゆっくりと振り向く。

「……………」

その姿を見たたん、身体の震え、危機感がさらに高まった。

左腕はチェンソーの刃が絡みついてあらぬ方向へ折り曲げられている。

右腕は切り傷だらけで、ほとんど皮一枚で胴体につながっている。

左足は脛^{すね}辺りに風穴が空いており、ろくに歩けそうもない。

唯一傷の無い右足で、そのぼろぼろの身体を支え、“その人”は立っていた。

赤ではなく、真っ黒な血を歩くたびに噴き出しながら、後ろに漆黒の血だまりを作りつつ、

一步、また一步とこちらに近づいてくる。

顔面も漆黒。左眼と思わしき部分には、電球のように光る光点が一つ。

「……………」

おそらく知っている人にしか判別できなかっただろう。

変わり果てた“巽野響輝”が、そこにいた。

からくも彼は漆黒に … 1

「……へっ」

私の横で佇んでいた男が、気を取り直したように、拳銃を“巽野響輝”に向けた。

そして、その顔に余裕ぶった表情を浮かべる。

「な、何だよ。こっちにはな、銃だつてあるんだ。おい！」

男が、私の後ろで未だに呆然としていた男に叫ぶ。

「……は、はいッ！ 何ですか？ リーダー」

「何ですか？ じゃねえだろ！ さつさとその娘を押さえろ！」

「は、はいい！」

男が動けない私を再び押さえ込む。

「……っ、う……う……」

それに対して私は、……泣いていた。

何故かはわからない。

ただ、こちらに近づいてくる“それ”が、響輝さんであること。それがどうしようもなく悲しかったのだ。

「そうだ！ そのまま押さえてるよ！ 逃がしでもしてみろ、おま……」

威勢のいい男の声が、そこで途絶えた。

銃を持っている男の視線は、私を取り押さえている男の眉間に釘

付けになっていた。

つられて視線を向けられている男も、上を見上げた。

そこ——私を組み伏している男の眉間——には、一本のナイフが深々と突き刺さっていた。

「……ええ……？」

どうしてこんなものが？ とでもいいたげな声を出した直後、男の眼球がぐるりと白眼をむいた。

「あ……れエ——」

キーの外れた素っ頓狂な声を上げて、男が後ろにどさりと倒れた。

「くッ……畜生。ふざけやがって！」

男が銃の引き金を引く。

「へ……へへッ、手前ら化け物に銃が効く事くらい知ってんだよ力スガッ！」

続けざまに二発。

一発目は“巽野響輝”の肩をかすめ、二発目が顔面に当たった。銃弾の勢いに負け、身体をのけ反らせている。

が、そのまま倒れ込むことはなく、“巽野響輝”はゆっくりと顔を戻し、再び歩き始めた。

「お、おい……何で死なねえんだよ！」
さらに二発、男が銃を放つ。

二つとも胴体に直撃したが、周囲に真っ黒な血を迸らせただけで、“巽野響輝”の歩みは止まらない。

「く、来るな……斃れるよ！ 来んなよ……！」

さらに二発。これでリボルバーの弾丸は尽きた。

「何で……何で……!!」

もはや男には周りすら見えていないらしい。弾薬の尽きたリボルバーの引き金を引き続けている。

そこで、“巽野響輝”の歩みが止まった。

そして、折れてチェーンソーの刃が絡みついている左腕をこちらに向ける。

その手に握られているのは、くすんだ銀色のベレッタ。

間髪入れず、銃声。

乾いた音が病院内を反響する。

折れた腕で撃つても、弾丸の軌道は安定しないだろう。しかし、ところどころ黒い血のこびりついたベレッタから吐き出された弾丸は、男の左腕と、その肘から先を見事に引きちぎっていた。

コンマ数秒後、その傷から鮮血が吹き出す。

「えあ？ ……あれ、これ……俺の……腕？」

男が虚ろな目で通路に転がっている腕を見て、自分の左半身を見る。

「あ……ああ、あ、あ、ああああ!! 痛え! 痛えええええええ!!」

そして、そんな絶叫と共に床をのたうち回り始める。

その絶叫が響く中、涙はとうに引き、私は頭を回転させていた。

……このままでは、響輝さんが人殺しの罪をさらに重ねてしまう!

だが、あのような姿については一度だけ見たことがある。

世界の自浄作用、“漆黒化”の末期形態。

要するに、今まさに、巽野響輝という人間は、この世から消えかけている状態なのだ。

からくも彼は漆黒に … 2

……しかし、不可解なこともある。“漆黒化”の進行を促進させる方法は二つある。

前の、それこそ“支配者”が幻覚でちよっかいを出したりしなければ、起こらないのだ。

もう一つの方法が、自らが漆黒化を望んだ場合。

だが、彼が進んで闇に堕ちるとは考えにくい。
いや、でも何か理由があれば……。

……理由……。

しばらく考えるが、答えは出ない。

……とにかく、響輝さんを止めなければ。

その姿を視界に入れたとたん、また自分の内に流れ込んでくる負の激情。

その感情が今の彼を形作っている全てだった。

それと同時に、まるで自分が壊れてしまったかのような錯覚が溢れてくる。

……そして、再び思い出す。

この人が自分に酷く似ているということ。

どうしてこんなことに……。

悲しみよりも怒りの方が勝り、私の心を抉り始める。

「……ッて」

“巽野響輝”が再び男の方に歩いてくる。

「……ば、化け物オオ！！ 無理だ！殺されたくねえ！」

腕から血を流しながら男が、足をふらつかせながら横道の方に歩いて行く。

「響輝さん……」

“巽野響輝”が目の前で止まる。

が、私が呼びかけても何のリアクションもなく、“巽野響輝”は横道の方を向いた。

からくも彼は漆黒に … 3

「響輝さんッ！！」

あの男は左腕を銃弾にもがれた。
おそらく出血多量で助からない。それでもまだ“異野響輝”が追
おうとするのは、すでに人としての理性や判断力が残っていない証
拠。

どうしてこんなことに……。

「……………」

ふと、前に彼に向かって言った言葉を思い出した。

——『あなたが闘うと言うのなら、私はあなたの鎌となりましょ
う。あなたが諦めると言うのなら、今度こそ、死に損ないも終りま
しょう』

……何だ。わかっていたではないか。
そう言ったのだ。

言ってしまった。

言葉の強制力、なんてものではない。
同じ、全くの同じ、見た目ではなく、中身やしぐさの共通点。
一枚の鏡の裏と表。

それに逢^あってしまうことは、ある意味一種の麻薬。
自らがこうである、という事実を常に見せつけられているような

羞恥。

私もただ、出会ってしまったのだ。

彼と“鍵”のように。

物語を左右するのは……否、盤上を翻弄するのは、決まってイレギュラーな存在。

彼について行けば、私はこの復讐の楔を解き放てると思っていたのだ。

そう、ある一種の依存性。それこそが、私の感情。彼に対する無表情を形作る全て。

だった、はずなのに。

「ッ……」

思わず立ち上がり、“巽野響輝”を後ろから抱き締めた。

漆黒の血液が白い和装にしみこみ、色を変えていく。

それでも“巽野響輝”は、ただ機械仕掛けの人形のように、男の駆けて行った方へ向かうとする。

だが、私が抱きしめていた事も相まって、片足だけで立っていたその身体が床に倒れ伏した。

「響輝さん……。……響輝さん!!」

顔面には黄色の球。

表情なんてものはない。

それでも呼びかける。

「どうして！？ どうしてあなたはそうやって、一人で抱え込もうとするのですか！？ 人々を守る？ “鍵”を奪還する？ “恐鬼”と斃す？ 寝ぼけたことを言わないでください！！」

それまで私の腕から逃れようとしていた“巽野響輝”の身体が停止する。

「“鍵”……戌海琴音を奪還して、敵を倒してハッピーエンド？ 笑わせないください！ みんなが最後に笑えても、そこにあなたの骸が転がっていたら駄目なんです！！」

もう言葉を濁さない。私は最後に、親友に伝えきれなかった。
二度と、その過ちは犯さない！

「あなたが死んで、堕ちて、それで何もかもが解決すると思ってるんですか！？ 違います！！ 確かに、あなたも私のように大事な人を守れなかった。復讐までして……確かにそれを聞いたなら、誰もあなたを認めないかもしれません。死ぬしかないと思ったのかもしれません！！ でもッ！！」

だから。せめてこの人を――

「死んだら終わりです！ たとえ誰もあなたの帰りを待っていないなくても、私がッ！ 私……が……」

「……あなたを、待っていてあげます」

――失いたく、ない――

「……はあ」

ふと、そんな間の抜けたような声が聞こえ、上を向く。

涙でくらむ視界に映る、その人の顔。

「……全く。何の冗談なんだか。お前に慰められるようじゃ、俺はこの先生に残れないかもしれないな」

響輝さんを覆っていた漆黒の液体がはがれおちるように床に流れて行く。

元の位置にもどった両腕を鳴らしながら、響輝さんがこちらを見下ろした。

からくも彼は漆黒に … 4

響輝さんが苦笑いを浮かべる。

「……“漆黒化”した状態で受けた傷は戻ったら反映されないらしい」

——まあ、もうなることはないだろうがな、と響輝さんが続けた。

「一体、どうしてあなたはこんな方法で……」

いや、むしろどうして“漆黒化”から戻ってこれたのか。

本来世界に見捨てられたら、消えてしまっはすなのに。それすら覆したとでもいうのか。

「そうではないさ。俺だって人間だ。でも……帰ってこれた。そういうことだろ？」

「ごまかさないください。わたしはあなたが何故“漆黒化”したのか、と訊いているのですよ？」

響輝さんがうつ、と言葉に詰まる。

「……いや、なあ、ハーテッド」

『うむ。仕方ない話だ』

なぜ話を濁すんですか。

「いや、別に」

『うむ。特に問題ではない話だ』

「……もしかして、理由がない、とかじゃないですね？」

「『ッ！』」

響輝さんが視線を逸らす。

「あ、あなたって人は……」

「いや、仕方ないだろ？ さすがに全方位からナイフに銃弾についてのは、な？」

「五月蠅いです。ていうか、理由を言ってください」

「五月蠅いのはお前だろうが。気が付いたらああなってたんだよ」

「防衛機構だと？」

「そうだ」

自動発動？ 世界の排除機能が？

「その話自体どうなんだよ。誰に訊いたんだ？」

「そ、それは……そう言われてるわけでして……」

「ほらな。そもそもお前は“漆黒化”が何なのかすらわかってないんだろ？ なのに俺が消されようとしてるなんて考え方は決めつけがすぎるってもんじゃないのか？」

「そんなことはありません！ 一度見たことがあるんです。狩り人が一人、感情を暴走させて死んだところを。だから、間違いじゃないはずです」

「だが、俺は戻れたじゃないか。お前が呼びかけたおかげで」

「はうッ……」

不意打ちだった。

途端に、先ほどまで自分が叫んでいた台詞が頭の中を駆け巡る。

「ああ、あ、えーと、ですね。あの台詞は、えーと……」

「……ありがとう」

「えっ……」

一瞬、何を言われたのか、分からなかった。

それほどまでに、私は巽野響輝という人間を冷酷だと、そう見ていたのかもしれない。

だから、その言葉に、私の顔面は業火の如き温度で赤面した。

「えっ、今、何て……」

「何度も言わせるな。ありがとう、それだけだ」

「……ふふっ」

自然と、笑みが漏れた。

「……そんなにおかしいか？」

「いいえ、ふふっ……別に、おかしくなんか……ふえっ……」

「笑いたいのか、泣きたいのかどっちかにしてくれよ……」

「響輝……さん」

「何だ」

何だか、あんな事を言ってしまったせい、歯止めが効かなくなっている。

そんな、気がした。

「ぎゅって、してください」

「はあ!？」

たじろぐそのしぐさが面白かった。

「ちょ、お前、それはどうかと……」

改めて思う。

この人は、とても優しいのだと。

からくも彼は漆黒に … 5

H I B I K I s i d e

「——響輝さん!!」

——声が、聞こえた。

意識は闇の中。どうして自分がこの闇に包まれているのかも思い出せない。

ただ自分の名前が聞こえる方へ、ひたすら意識を向ける。

目を開けたら、そこには祇園鈴が泣きじゃくりながら俺を抱きしめていた。

……何だこの状況は？

そしてすぐに理解する。思い出す。

“漆黒化”。俺は闇に堕ちかけていた。

それまで思い出せなかった記憶が枷が外れたかのように溢れだしてくる。

あの時、どこにそんなに武器があったのか、数々の武器で武装した人々に囲まれ、俺は死を覚悟した。

その時である。

——おや、諦めちゃうのかい？ 面白くないなあ。

拡声器か雑音混じりのボイスレコーダーを通したかのような声が、頭に響いた。

——君はいわば成金や龍王みたいな存在だっていうのに。ああ、将棋のことだよ？

なんだお前は。ついに俺は幻聴まで聞くようになってしまったのか。

——オイラは通りすがりの“黒帽子”さ。

まあ、何でもいいさ。それで？ 幻聴よ。何が言いたい？

——幻聴じゃないってのに。まあいいや。君の質問に対する回答は、これさ。

……『“漆黒化”をするんだ。それですべて解決する』

声はそう言っていた。

だから、俺はその内なる声に意識を委ねた。それだけだった。

祇園鈴の声は言っていた。確かに聞いた。

『……あなたを、待っていてあげます』

……全く、何の冗談なんだか。

『きゅって、してください』

これは冗談だろ。

「響輝さん、あなたはいつもいつも、いつもいつもいつも！」

「いや、すまない。これに関しては、謝ろう」

「何ですか、その譲歩したみたいな態度は。あなたは人に心配をかける才能がありますよ」

相変わらず酷い言いようだ。

だが、その顔は涙を流しながらも微笑んでいる。

まあ、それはともかく。今はだな。

「おい、鈴」

「……何ですか？」

「……その、あれだ。服、直せよ」

「え？」

鈴が下を見下ろす。

何があつたのかは知らないが、酷くその和装を乱れさせた鈴が、顔を真っ赤にした。

「あ、あああああ！！ 見ないでください！！ 見ないでください！！」

「ぐああッ！！！」

次の瞬間、大鎌の峰が俺の腹にめり込んでいた。

意識が遠のく。

からくも彼は漆黒に … 5 (後書き)

空気を变えるにはこういうイベントを起こしてがらっと変えるとい
い、とどこかで聞いた覚えがあります。

次から新章です。

そして佳境は訪れる … 1

人は、恋をする。

だがそれは永遠の物ではないらしい。

俺は恋なんてしたことが無いからわかりっこないし、何をど素人が、という話なのだが、何はともあれ愛が永遠でないのなら、はたしてそこに意味はあるのだろうか。

ただ、限られているからこそ、その希少価値が跳ね上がるのだという説もある。

だからといって、永遠の命を求める人が居なくなるわけではないし、“そういう”人並みはずれた連中の生き様に意味がないと断言はできないだろう。

…… ああ、何考えてんだかな。

近頃、自分のなかの他人に対する感情と言うか、冷たい部分が柔らくなっているような気がする。

琴瑟調和……か。戌海の力がそれほど強力なのは知らないが、俺の心が溶けはじめているのなら、それは、傍目にはいい能力なのだろう。

俺にとっては、……どうなのか。

まだ結論は、出ていない。

―。

声が、聞こえた。デジャヴである。

「あ、起きましたか？」

どうやら俺は仰向けに寝かされているらしい。

背中の方にやわらかい感触があった。

目を向けると、鈴がわきに座っているのが見えた。

「あばら骨が何本か折れていたのと、腕の筋を痛めていましたね。他にも火傷が少々。……全く、これだけで済んでよかったものを。もし首から落ちていたら助からなかったかもしれないよ」

鈴がカルテのようなものを見ながら言う。

「……お前が診たのか？」

「まさか。生き残りの中に医者の人がいたんですよ」

そう言う鈴は、最初に会った時よりずいぶんと風変わりしていた。着ていた白い和装は暴走族と戦った時に駄目になってしまったらしい。

今の鈴は、白ではなく、黒い服を着ていた。

無造作に伸ばしていた髪をまとめ、いわゆるポニーテールにしている。

「どうしたんだ？ 髪なんかまとめて」

「えっ……？」

鈴が自分の身なりを確認する。

「ああ。これは仕方ないですよ！ 服が駄目になっただけで、別に、別に……」

鈴が慌てたように言った。

そして佳境は訪れる … 2

しばらく言葉を交わさなかったが、ふと、思い出したことを口にしてみる。

「戦闘は、どうなったんだ？」

まずはその確認だ。俺がどのくらい眠っていたのかも、知らなければならぬ。

「人間同士の抗争ですか……」

鈴が言葉に詰まったかのようにこちらを見た。

「……何かあったのか？」

「……はい」

間をおいて、鈴が話し始めた。

「響輝さんが眠っていたのは、あれから三時間です。あの後、リーダーを失った連中は尻尾を巻いて逃げ出していきました」

そうか。だが、連中が出て行ったのは良い事のはずだ。そんな詰まる部分があるのか？

「いえ、ここからが要なのです。彼らがバイクに乗っていたのは知っていますよね？」

ああ。最初に確認したしな。

「彼らが逃げて行ったのは中央市街の方です。きっと彼らの根城があったのだと思います」

鈴が一息つく。

「それから五分くらいした後、……市街の方から、妙な音がこだましてきました」

「妙な……音？」

「はい。最初は小さかったのですが、次第に連なるようになって、よく聞いたらそれは……」

「……悲鳴と、爆発音、だったんです」

重々しそくに鈴が言った。

ふむ。悲鳴はまあ人が襲われたものだろう。
では、爆発音は……。

……すぐに、脳内で結論が弾き出される。

「……連中か」

「……はい」

成程な。“街”のこんな状況で爆発するものがあるとしたら、それはおそらく炎上した乗り物以外にないだろう。

したがって、それらの音は逃げて行った連中のものである可能性が高い。

それらの音は彼らの出したものなのだろう。

それも、きつと彼らにとって最悪の形で。

「……だが鈴、奴らはけっこう人数が残ってたよな。あいつらが全部逃げ出したとして、それらがほぼ連なるようにして襲われるなんて、ちょっと度が過ぎた感じがしないか？」

「……？ ということですか？」

鈴が俺の包帯を取り替えながら言う。

というかお前は見張りとか行かなくて大丈夫なのか。なにも襲撃

を回避しただけで“恐鬼”どもを止められたわけではあるまい。

「それは浅滅が対応しています。あの人の戦闘には基本、味方が必要ありませんから。むしろ浅滅に殺されてしまいます」

そうなのか。いや、よくわからんが。

「度が過ぎた、というところ。つまり、それだけの人数が一斉に負けるわけが無い、という意味合いですか？」

「……まあ、そういうことになるな。奴らも武器を持ってるわけだし」

ただ地面を這ってるような恐鬼には負けないだろう。

つまり……。

「中央市街には、奴らの持っていた銃弾や、生半可な武器では太刀打ちできず、バイクのスピードをも凌駕する“恐鬼”がいる……と？」

「……そういうことだ」

俺は天井を見ながら答えた。

そして佳境は訪れる … 3

「それで、これからどうするんですか？」

しばらく暗夜と化した街並みを眺めていた鈴がこちらを向いた。

「これからどうする？ 可笑しな事を言うなよ」

これまではお前が行き先もやることも決めてきたじゃないか。

今更どうして俺に訊く必要がある。

そもそも、俺達の目的である戌海の奪還は俺が舵を取ったところで、達成することができないぞ。俺は戌海の居所さえ知らないんだからな。

「いえ、別にあなたに全てを任せようというわけではありませんよ。“狩り人”には“鍵”を探知することができます。浅滅が合流したことで結果的にこちらでもやりやすくなりました」

“狩り人” …… な。やはり“鍵”サイドの陣営は力量関係が微妙すぎる。

「 …… それで？ 今、戌海はどこにいるんだ？」

しばらくして、鈴が返す。

「今“鍵”がいるのは …… 竜ヶ峰市の中央市街にある遊園地、『口ストランド』です」

「 …… 中央市街、か」

「はい」

厄介なことになったな。

そう言うつと、俺は目を閉じた。

響輝さんが目を閉じた。

「少し眠るといいですよ」

「……ああ……」

そう呟くのが聞こえる。

その声にはいつもの無表情なものとは異なり、少しの安堵感が込められていた。

私は再び窓から空を見る。

響輝さんが動けるようになったら、この病室を出て、浅滅や皆と合流し、中央市街へ向かう。
おそらく中央市街に入れば、“鍵”をめぐる生存競争は終局へ向かうだろう。

“支配者”はそこに居る。“鍵”……戌海琴音も。

負けない。今度こそ。

あなたのために。あの子のために。

この命に代えても、このゲームに勝って見せる……！

そして佳境は訪れる … 4

規則正しい寝息が聞こえてくる。

どうやら響輝さんは眠ってしまったらしい。

そして、私は再び黙想を始めた。

……ふと、響輝さんの方を見る。

いつも自分以外のすべてに対して威嚇姿勢を崩さない彼も、この時ばかりは普通の寝顔を浮かべていた。

急に胸の内に駆け巡る“何か”を感じ、私は目を逸らす。

……この気持ちは何だろうか……。

そんな理由もわからない、得体の知れない動揺を隠すため、別のことを思案する。

彼は、どうして戦っているのか。

生きるため、と言ってしまえばたやすい話なのだが、彼からはそのような空気を感じることは出来ない。

……しばらくして、答えは見つからないだろうと自問自答を止め、別の思案を始める。

「私が……、待っていてあげます」

あの時、“漆黒化”した響輝さんに向かって言った言葉を、今一度復唱してみた。

“彼”に戻ってきてほしい。その一心で叫んだ言葉の数々。

それは“逸れ者”である響輝さんにだからこそ、残酷なほどに通
用するものだった。

大事な人を死なせてしまい、その復讐のために、人を殺した。

自分は人でなし。悲しみと怒りのあまり、そんな方法しか取るこ
とが出来なかった。

きつと、そんな後悔を抱えながら、この人は今も生きているのだ
ろう。

「でも、忘れないくださいよ、響輝さん。私も……同じなんです
から」

私も、人の事を言えた立場ではない。

ただ、復讐を果たしていない。

私と響輝さんの差はそこにある。私は今だに、憎き敵を斃せてい
ない。

……それでもなくとも、私と彼は同位相に存在する“逸れ者”なの
だ。

もう一度、響輝さんの寝顔を見る。

彼の寝かされているベッドの傍らで椅子に座っている、私。

手を伸ばして、彼の頬に触れてみる。

……温かかった。それはまさしく、人の温もりだった。

どんなに迷っても、“漆黒”に堕ちても、この人は変わるることな
く“異野響輝”なのだ。

そして、それはこれからも変わらないのだろう。

そして佳境は訪れる … 5

きつと、この人はこれからも、例え“琴瑟調和”の影響を受けたところで、人を遠ざけるその冷たい姿勢が完全に克服することは出来ない。

それを自分でわかって、行動しているのだ。

……私は、そんな彼の居場所になりたいと思っている。

でも。

こちら側に共通する目的は、戌海琴音を奪還し、守ること。それすなわち、響輝さんの生きる目的もそれであるということ。

“鍵”とそれの“逸れ者”には切っても切れない縁があり、二つは相互しあう関係にある。

その両者の関係は、いかなるモノの干渉をも退け、ただ法則に従って廻り続けるものとなるのだ。

それは磁石の極の考え方に近いだろう。“鍵”がN極、“逸れ者”がS極。

“鍵”と“逸れ者”は魅かれあう。

一方で、同じ存在である“逸れ者”同士が引かれ合うことは……ない。

ないはずなのに。

……この気持ちはなんだろう……。

再度、その自問が脳内に浮かぶ。

いつもの白い和装を着ている無い所為か、それとも、あんなこと

を叫んでしまったせいでたかが外れてしまったのか。

頭の中でいい訳というか、勝手な理由をつけながら、私は立ちあがった。

そして、片方の膝を彼の眠るベッドの上に乗せる。

ぎし、と古いそれは鈍い音をたてたが、響輝さんは目を覚まさなかった。

そのままもう一方の足も動かし、ものの数秒で私は響輝さんの上を膝で跨いでいた。

そのまま、彼が怪我人だということすらも忘れ、彼の胸板の上に頭を乗せる。

「……響輝さんが悪いんです……」

消え入るように囁きながら、仰向けに寝ている彼に身を任せ、背中 に手をまわした。

「あなたが、私を助けたりするから……」

這うように上に進み、彼の顔がものの数センチというところで停止する。

「庇ったり、するから……!」

心臓が早鐘を打つ。

右手で垂れ下がっているポニーテールと耳横の髪をかきあげ、ゆっくりと彼の口に私の唇を重ね――

（――ヤメロ）

「ッ!」

そんな声が頭に響き、私は反射的に跳ね起きる。

（――ヤメロ、イラナイ、トモダチ、コイビト、スベテ、イラナイ）

それはいわば、本能の叫び。

「や……やだ……」

小声で反論をする。

本能に、抗う。

そして佳境は訪れる … 6

逸れた者同士の輪唱を防ぐ、法則が故の本能。

（――イラナイ、ドウセ、シヌ）

「死にません……、響輝さんは、死にません！」

こんな法則なんかには、負けたくはない。

私は、私の意志でこの運命に抗ってやる……。

（――ハグレモノ、タガイヲ、ホロボス）

「法則なんて関係ない！ 私は……」

頭を振って無理やり声をかき消し、もう一度響輝さんの身体を抱きしめる。

「……だったら」

失いたくない。

もう、自分がとても儚く脆い存在に思えてきて……。

「あなたは……」

消えてしまいそうで……。

「あなたは誰の為に、戦っているのですか……？」

本当に、自分が生き残るため……？

過去に失った守り切れなかった人のため？

“鍵”である戌海琴音のため？

それとも……？

その先は、いくら響輝さんが寝ていても問いかけることは出来なかった。

ただ、彼がそこに居てくれる。

今の私には、その確かな温もりを感じることが出来るだけで、十分だったのだから……。

。

「……だけど、それも盤上の展開の一部。君たちは、楽しませてくれるよね……？」

“街”にはもうほとんど響く音が無い。

つまり、生存者はもうわずか、ということ。

「だけれどオイラは、“黒帽子”。オイラの出る幕があるといいけれどね……」

闇夜に浮かぶシルクハット。

それは再び、暗闇の中に紛れて行った。

そして少年は目的を惑う
… 1

H I B I K I s i d e

「だ、だから違いますッ!」

目を覚ますと、ベッドのわきで鈴が真っ赤になって怒鳴っていた。

その視線の先には、五十嵐達がにやにやしながら立っている。

「あ、起きましたか、響輝さん」

「ああ」

腕や脚はもう大丈夫らしい。またずいぶんと頑丈になったもんだな、俺の身体も。

「んで、何を話していたんだ?」

「えっ……」

鈴が言い淀む。

「ああ、巽野。お嬢ちゃんがな、俺達が来た時、お前にしがみついたガハッ!」

五十嵐が腹を押さえてうずくまる。

「で、恐鬼はどうなった?」

「ああ。ここに来ていた恐鬼の大半はあの暴走族のバイクにつられて行ってしまったからな」

成程。俺達が片づけるのはそれほど多くなかったのか。

「それで、だ。“鍵”の奪還に関してだが、こいつらには居て貰うことにする」

壁にもたれていた浅滅が言った。

「まあ、確かにこの人たちには“鍵”の奪還にはあまり関係ないが……」

確かに逃げてるだけの人々には関係の無いことだとは思うが……。銃が三丁しかないっていうのに、ここに人をおいて俺達が出て行っても大丈夫なのか？

「奴らが大笑してこいつらを襲う確率は低い。たまたま“恐鬼”が数匹来ることがあるだろうが、やりすぎせば問題ないはずだ」

それに、と浅滅が続ける。

「非戦闘員をこれから先につれて行くことは出来ない。俺達三人でこれだけの人数を庇いながら“支配者”に挑むのは無謀だ」

「まあ……そう、か……」
妥当な論ではある。

「そうですね。皆さんにはこの病院にいてもらいましょう」
冷静さを取り戻した鈴が頷いた。

そして少年は目的を惑う
… 1（後書き）

編集して追加いたしました。ついでに誤字も直しました。

そして少年は目的を感う … 2

「この病院の近くに自衛隊のバギーがある」
院内のどこかで見つけたのだろつ。地図を広げている浅滅が言った。

「2ブロック西の道に乗り捨ててあるのを屋上から見つけた。まずはあれを確保する」

「質問です」

鈴が鎌の手入れをやめて浅滅の方を見る。

「何だ？」

「とりあえず、ここに居る人々の安全を確保したいんです」

「……ふん。で？ 何か案があるのか？」

浅滅が挑発するように言う。

「はい。ここに皆さんを置いて行くわけですから、少しでもこの人たちの危険性を減らしたいんです」

「鈴、まさか俺達が囷になるとか言うんじゃないよな？」
なんとなく先が見えたので聞いてみる。

「……何で分かったんですか」
鈴が拗ねたように言う。

「いや、お前の言いそうなことだと思つてな」

「……まあいいです。とにかく、私達がそのバギーを見つけたら、大きな音を出して、恐鬼どもを誘導したいんです」

「ふん、お前の考えそうなことだが、わざわざ俺達の敵を増やして

どうする？ 無用な闘いは避けるべきだ」

浅滅はあくまで否定的な態度を崩さない。

そして少年は目的を惑う … 3

「どうしてあなたはいつもこうなんですか！」

鈴が我慢がならないといったように叫ぶ。

「五月蠅えな。お前みたいに甘い考え方では、いつか痛い目を見るぞ」

浅滅が言う。

確かに両方の意見には参同すべき部分もあれば、反対すべき部分もある。

浅滅の言うことはもつともだ。

考え方に差はあるが、目的を最優先するべきというのも正しい。戌海を奪って“支配者”を斃しさえすればいいのだからな。

ただ、鈴の言うことも倫理にかなっている。

無駄に死んでいい人間なんて存在しない。正論だ。人として、その考えを失ってはいけない。

「問題にしているのは時間だろ？ 浅滅、こっちはかなり寄り道ばかりしてるが、のんびりしていたら戌海が取り込まれてしまうんじゃないのか？」

訊くと、浅滅は何をいまさら、とでも言いたげに舌打ちをし、

「“鍵”が討たれる心配は、今のところ無い。だが、時間の問題でもある。少なくとも、俺達が生きている間は無いだろう。チカラを取り込むのには時間がかかる。その上、取り込んだ後はしばらく行動が出来なくなる。奴が好き好んで隙を見せるとは思えん」

と言った。やけに詳しいな、お前。

「奴は既に三人の“鍵”をその身に取り込んでいる。この、一帯を異空間に閉じ込める能力もそのうちの一人のものだ」

…… お前、一体いつからあの黒ローブと戦ってたんだよ。

「かれこれ二百年と少しか？ どうでもいいだろうが、そんなこと」
「……」

もう何だかキャリアがどうか以前の問題だな。 まあ、気にしないが。

「響輝さん」

「ん？」

鈴が横に来る。

「ここからは私達は互いを庇い合う余裕はおそらく、ありません」

「……まあ、そうだろうな」

「だから、だから絶対に、私が危なくなっても、庇うなんてバカなことはいしないでくださいね？」

と、鈴は微笑みながら言った。

「……」

一瞬、言葉に詰まる。

自分がこいつを庇ったことを思い出したわけではない。

こいつのこの笑顔が、あまりにもあの時を彷彿とさせるものだったからだ。

「そんな真似をしてあなたまで怪我をしては元も子もないですから」
そう言って部屋を先だって出て行く鈴の微笑みは、

あまりにも、あの時の姉さんの微笑みに、そっくりだった。

そして少年は目的を惑う … 4

五十嵐が人々を先導しているのを横目に、俺も部屋を出ようとす
る。

「おい、巽野の坊主」

急に五十嵐がこちらに寄ってきた。

「……逃がしちゃいけないぜ？」

そして、俺の耳元にそう囁く。

「……なんのことだ？」

いきなりそんなことを言われても何の事だかさっぱりだぞ。

そう言つと、五十嵐は少し驚いたように首をすくめながら、首を
横に振った。

「……そうか坊主。お前も苦労してるんだな」

なぜか同情するような表情をされ、肩を叩かれる。

何だと言つんだ、全く。

「まあ、ちよっかいをかけなくても、祇園の嬢ちゃんに攻める派み
たいだからな。うんうん」

と、五十嵐は一人でふっかけて一人で納得して仕事に戻ってしま
った。

『頑張れらななくてもいいぞ響輝。お前はそれでいい……わけが
ない』

「文法しっかりしろよ」

何なんだ？ どいつもこいつも。

頭を抱えながら、慌ただしい病室を後にする。

…… 中央市街、か。

この街に来る前に、一度ガイドブックというか、パンフレットを見たことがある。

竜ヶ峰市の市庁があり、この街唯一のテーマパーク、“ロストランド”もある、まさに街の中心部とも言うべき区画だ。

まあ、市庁はもう機能していないし、どの区にいたところで危険であることに変わりはない。

…… 『恐鬼にはシチュエーションも何も関係ない』。いつだったか鈴が言っていた。

「不味いな」

病院の玄関で立っていた浅滅が苦い顔を浮かべてこちらを振り返った。

「どうしたんだ？」

「見ろ」

浅滅が顎で外を指す。

目を向けると、外にうつすらと白い霧のようなものが漂っているのが見えた。

「何だ…… 霧か何か？」

「その通りだ。あれが濃くなるに連れて、あの中での戦闘はこちらに分が悪くなる」

「…… どうしてだ？」

「奴らの中には視覚を必要としないやつもいるからな」

浅滅はそうとだけ答え、玄関の扉を開けた。

そして少年は目的を感う … 5

ガラスのはめ込まれた正面玄関のとびらを開く。

「すぐに閉める」と言う浅滅に従い、後ろ手に扉を閉めた。
後ろから鈴が続く。

幸い、バギーにたどり着くまでに恐鬼と遭遇することは無かった。

……しかし、少し気になるな。これまでは、いく先々で恐鬼と戦闘を繰り返してきたのに、この静けさは何だ？

「……あなたは人の話を聞いてなかったんですか？」

隣で鈴が呆れたように息を吐き出した。

「先ほども私は言いましたよ、この病院の周辺にいた“恐鬼”どもは、大半がああの逃げ出した暴走族について行ったのだと。……その後彼等は何かと戦い、恐らくはなすすべもなく殺された。こんな静まり返った“街”で爆発音や戦闘音を派手に鳴らして、そんなことをすればどうなるか……」

そこまで言われてようやく理解する。

「……成程な」

つまり、今この“街”に存在する実体を持った“恐鬼”のほとんどが“中央市街”に集まりつつあるということか。

「……クソがッ！」

突然、浅滅が声を荒げた。

「どっしたんだ？」

見ると、浅滅がバギーの車両に取り付けられているコンソールの前でうなっていた。

「この車両、軌道がコンピューターで制御されているらしい。俺は

機会が苦手だな」

惜しげも無く自慢するように自分の弱点を言うな。

……でもまあ、その程度のこととはどうってことない。

こちらにいるのは人間が三人だけじゃないんだぜ。

「まあ、これくらいのこととはな」

『うむ、これくらいのこととはな』

機械に関する障害はたいして壁には感じない。

「久しぶりだが、大丈夫か？ ハーテッド」

『案ずるな。機械は衰えぬよ』

「……何をするつもりですか？」

コンソールの前に立った俺に鈴が疑問を投げかける。

俺は答えずに、ポーチから一本のコードを取り出した。

「コード……？」

浅滅が疑問をあらわにするが、今の俺に気にしている暇はない。

機械の側面にコードを差し込み、それをハーテッドに繋ぐ。

「本当に大丈夫なんだろうな」

『五月蠅いぞ、響輝。この程度の旧世代セキュリティごとき、我の敵ではない』

機械が言うのだから間違いないのだろうが、こつも超常的なものばかり見てくると、その言葉がいやに頼もしく聞こえてしまう。

自律人工頭脳搭載端末の試作品、No.076 Hearted。親父が実業部の頭である、DSCという会社の作成した新世代型端末。会話、感情のやりとりが可能な、学習型人工頭脳を持った携帯端末だ。最も、ここでいう人工頭脳というのはどこぞのマザーコンピュータのような大それたものではない。

元より、この技術は友達をあまり作らなかった俺の為に親父が考えたシステムなのだ。……いや、だからこそ親父の遊び心も多少なりとも混ざっている。

それがこのツール。パスワード式のセキュリティならば、五年前までくらの技術のものなら看破できる、ある意味犯罪的なツールだ。

まあ、世の中ただの学生だって、趣味の一環で痕跡を残さず記憶媒体を破壊するウイルスを作れる時代だ。これくらいが当然なのかもしれない。

『完了した』

なんてくだらない暇つぶしの思考をしていると、ハーテッドが作業の終了を伝えてきた。

『だが響輝、後にも先に……は一回あったが、これまでだぞ、このツールを使用するのは。みだらに使うものではない』

「わかってるさ」

そういうシステムをも自分で“思考”して自律する端末なのだ、こいつは。

「最近の機械は凄いですね……」

もはや人つ子一人（死体を除く）いない街道を、一台のバギーが疾走する。

運転席には浅滅。広めの後部座席には、道を“恐鬼”に邪魔された時の為に両側のドアのそばに俺を鈴が座っている。

「まあな」

『まあな』

同時に俺とハーテッドが返す。

「そういえば考えてもみなかったですが、こういった類の情報戦を強いられたら私達に勝ち目はないですね。言ってしまうえば、私と浅滅は本来はもつと前の時代の人間ですし」

明治だからな。浅滅に至っては正確な時代すら分らない。

「まあ、シヨットガンでぶっ壊してもよかったんだがな。リスクが

高すぎた」

浅滅が反論する。

「大体な……」

と、俺がそれに返事をしようとした時だった。

「伏せるッ!!」

前を見ていた浅滅が急に叫び、ブレーキを踏んだ。

「ッ!!」

俺と鈴がとつさに車内に張り付き、衝撃を抑える。

そして少年は目的を惑う … 6

バギーは急ブレーキの為か少し道路を滑り、しばらくして停止した。

「ッ……何だ!？」

運転席の浅滅に問いかける。

「……見ろ」

浅滅は苦い顔をしながら前を指した。

「……？」

前を見ると、少し先の道路で“何か”がいるのが見えた。
いや……、“ある”のか？

「あれは……火車？」

鈴が呟くのが聞こえた。

確かに“それ”を形容する言葉があるのであれば、きっと“火車”という表現以外にないだろう。

急停止したバギーの少し向こうでアイドリングしているかのよう
に静かなエンジン音を立てているのは、体中のいたるところから燈
色の火炎を吹き出している、一台の“車”だった。

「厄介なのが出てきたもんだ。こっちが車で来てなかったら、即刻
俺達は皆殺しだったろうよ」

浅滅がそう言い、シートベルト（着けていたのか。何気に律儀な
奴だ）を外し、こちらを振り向いた。

「振り落とされるなよ。ただ、いつでも車外に出られるようにして
おけ。ああいうタイプは破壊しつくされるまで襲いかかってくる。
時間の無駄だ。回避するぞ」

そう言い、浅滅がハンドルを握る。

「まさか振り切るつもりですか？」

鈴が驚いたように言った。

「あの“火車”を見ただろう。車の“恐鬼”は、大抵交通事故にでも遭った人間の恐怖から生み出されたものだ。ホラー映画のものはわけが違う」

「確かにここから中央市街まではまだ距離がある。ここから歩きなのは正直きついかもしれないな」

俺も同意する。

「そういうことだ。……来るぞ。どこかにつかまっている！」

そう叫ぶと同時に、浅滅がアクセルを勢いよく踏み込んだ。

バギーのタイヤがそれに従い、急加速する。

それと同時に、“火車”についているタイヤもギュルルと削れるような音を立てながら回転した。

二台が正面から互いに向かって突っ込んでいく。

「浅滅！」

「五月蠅い、集中できん！」

正面衝突の寸前、浅滅がハンドルを右、左と順に回し、二台の車はかすりかけですれ違った。

「熱ッ！」

「きゃあッ！」

“火車”とすれ違った瞬間、周囲の温度が物質の如何を問わず、急上昇した。バギーの車内の気温も急上昇する。

そして少年は目的を感う … 7

「クソッ、あの火炎車め」

バギーは街道を加速しながら右へ左へと角を曲がる。

浅滅が額に汗を浮かべながら窓を少し開けた。

「追いつかれたら衝突する前に蒸し焼きですね……」

鈴が上着を脱ぎ捨てて。ノースリーブか。こちら上着すらな
いつてのに。

「何をじろじろ見てるんですか」

黒色のノースリーブ姿の鈴がこちらを向いた。

「別に」

まあ服装なんかはこの際……いや、問題だが、問題にすべきじ
やない。

いくつかの角を曲がった時だった。

「なッ……」

浅滅が絶句しかけ、慌ててバギーを横道に向ける。

進んでいた街道の先をちらつと見ると、向こうから“火車”が
迫っているのが見えた。

「待ち伏せしていたのか……」

思わず声を上げる。

「相手にはこちらが向かっているのが中央市街だとわかっていたの
でしょう。こちらがああ“火車”を撒こうと蛇行している間に、最
短ルートで先回りされましたね」

鈴が言う。

確かにそうだ。そもそも相手は本来実体を持たない化け物。こ
の闘い自体、最初からこちらにとって不利な状況から始まっている
のである。

とにかく、あの“火車”を振り切る方法を考えなければ。

……いや、待てよ？

急に頭が冴えだしたのか、頭に何かが引つかかった。

相手は“火車”。車体のあちこちから火炎を吹き出し、近寄るだけでただではすまない。……そう言えば、車つて無機物だよな。

恐鬼の姿はなにも生きてる生物だけではないということか。

「当然です。ただ、その恐怖している物体が動かなければ恐怖を与えるまでには及びません。よって、物体の“恐鬼”にも意志はあります。もつとも、それは思考と呼べるほどの物ではなく、単に本能に従って動いているようなもの。……付喪神、というのを知っていますか？」

まあ、名前くらいは。俺は人並みかそれ以上くらいにしかオカルトには詳しくないからな。まあ、全く興味が無かったわけでもないが。

「世に聞くそれと一緒にだと考えて問題無いです」

鈴が後ろから窓を見て、追ってくる“火車”を確認する。

要するに考えもしない、ただ追ってくるだけの……無人兵器みたいなものか。

なら、闘いようはある。

「浅滅、彩柳川がこの先にある」

ハーテッドの地図アプリを確認しながら言う。google earthではない。ただの地図だ。

「川……そうか！」

浅滅が思いついたように叫んだ。

彩柳川。中央市街と東区、南区の境目に流れている川だ。昔、川のほとりにたくさん柳が生えてそれは美しかったことからつけられた名だと言う。

「そこまで持つか？」

「持たせるんだ。黙ってる」

浅滅が再び角を曲がった。

「見えたな」

バギーが進む街道の先に、川と、その上に架かっている橋が見えた。

振り向くと、“火車”が近くまで迫ってきているのが見える。

「後は勢い任せだ！ 右に寄れッ！」

浅滅が振り向かずにかんた。

「分かった」

左側にいた俺は右側にいる鈴の方に移動する。

「限界まで寄っている。火傷するかもしれないが、耐えろ」

無情だなおい。

「俺も一緒の状況なんだ。いまさら迷ってられるか！」

仕方ない。

そう思い、右側のドアに張り付いている鈴の身体に限界まで寄る。

「暑いです……」

「我慢しろよ。というか、この分だともっと熱い目に遭うぞ。多分」

「きゃあ！ 変なところ触らないでください！」

「俺の意見は無視か」

とにかく、このトンデモカーチェイスは浅滅の技量にかかっている。

バギーが橋にさしかかった。

そして少年は目的を惑う … 8

「来るぞ！」

橋の中盤まで差し掛かった時、浅滅が叫び、ハンドルを強く握った。

“ 火車 ” との距離はおよそ五十メートル。

「行くぞ。落とされんなッ！」

浅滅が勢いよくブレーキを踏み、ハンドルを回した。

バギーの車体が斜めに曲がり、タイヤがアスファルトに擦れる音が響く。

「ぐっつ……」

慣性の法則に従い、車体自体に強力な力がかかる。

鈴の方もとい、前方に身体が押しつけられた。

「うっ……」

その力に耐えていたのも、数秒の間。

すぐに、急停止を機と見た“ 火車 ” が加速し、

斜めになっているバギーに追突した。

「熱いッ！」

「クソッ、ここまでとは……」

もはや火の塊と言っても過言ではない状態の“ 火車 ” が数メートル先にある。

一瞬でバギーの車内が高温に満たされた。

「落ちろおおおおおおおッ……」

浅滅がサイドブレーキを引き、ブレーキとハンドルを握り、衝撃

に耐える。

車体と車体の擦れる、激しい金属音。

耳に金属音が響き、体中が焼けるように痛い。いや、もうすでに半分蒸し焼きの状態なのか。さすがにきつい。熱すぎて意識が一瞬遠のく。

斜めを向いていたバギーの側面に、“火車”の車体が擦れていく。バギーの表面を溶かしつつ、勢いを殺しきれず、“火車”がバギーの側面に沿って、方向転換を余儀なくされる。

そして、すれ違いきった次の瞬間、“火車”は歩道の段差にぶつかり、半回転しつつ、そのまま手すりをジャンプするようにして越えて行った。

しばらくして、ざばあん、と“火車”が水面に飛び込む音が聞こえた。

彩柳川の水面から、“火車”だったものの車体の一部飛び出ている。

「はあ………ったく………」

浅滅がコートのポケットからスキットルを取り出し、中身を^{あお}叩いた。

「………はあ………はあ………」

鈴はさきほどの灼熱地獄に耐えきれなかったらしく、川の水で顔を洗いつつ、身体を休めている。

「……」

そして俺はというと、同じく暑さにやられ、足湯ならぬ足冷やしをしていた。

“ 火車 ” はおそらく暴走する自動車への恐怖が炎という形で表されたものだ。

あの火災が車を操っているのであれば、まずはあの火災をどうにかして無力化しなければならない

火には水。バギーで “ 火車 ” の進行方向を変え、橋の上から川に落とす。

…… なんとか上手く行っただが移動手段は無くなった。ここからは歩きである。

ここまで乗ってきたバギーはコンソール内のコンピュータが熱さのあまり焼き切れてしまい、もはやただの鉄塊と化していた。今もそれは橋の上で静かに細い煙を伸ばしている。

「……ふう。まさか、ここまでのものとは」

鈴が顔を上げた。顔がほてっている。

「ったく。蒸し風呂に来たんじゃねーんだ」

さすがの浅滅でも先ほどの戦闘…… といつかカーチェイスは苦しいものがあつたらしい。

スキットルをしまった浅滅がこちらを向いた。

「そろそろ行くぞ」

「……ああ」

まだ身体にだるさが残っている。

だが、止まるわけにはいかない。こうしている間にも、戌海の危険性は増すばかりだ。

「あの野郎。本気で俺達をこの “ 街 ” で始末するつもりらしいな」

浅滅が言った。

「……どういうことだ？」

「さっきの……“火車”だったか。ああいうタイプの無機物の“恐鬼”は多いが、あそこまで強力な者は滅多にいない。それに、この濃霧も……いや、そもそも奴がこれまでに一つの“鍵”に執着するのも珍しいのだ」

彩柳川の向こう、対岸の北区を覆いつつある濃霧を見ながら、浅滅が呟く。

「幸い、こちらの武器に損傷はない。身体はじきに治る」

そう言い、浅滅が立ち上がった。

「ここからが正念場だ。今回の盤上も、そろそろ終盤だぜ」

「……そうだな」

そう言い、俺も立ち上がった。

「敵を見つけても遅いものはスルーしてください。浅滅はともかく、響輝さんのベレッタには替えのマガジンがありません」

「分かってるよ」

病院に居た人の中に、たまたま同じ種類の弾丸をいくつか持っていた人がいたから、それを貰って、それでも最大装弾数に二発足りない状況だ。

後はバタフライナイフだが、こちらは峰側の破壊峰が攻撃を受け過ぎてぼろぼろだ。刃の方はまだ無事だが、いつ使い物にならなくなるか分かったものではない。

だが、それでもやるしかないのだ。

でもただそれでも少年は … 1

竜ヶ峰市の中央市街。

先ほども説明したが、この区画には市庁もあり、竜ヶ峰市の重要な建物も集中している。

よって、他の区画よりもビルや大きな建物、舗装された大きい街道も多い。

陸を移動する“恐鬼”だけならともかく、飛行するような“恐鬼”が来ると視界の確保に困るだろう。

「しかし、“中央市街”に来たというのに、何もいませんね」
鈴が言う。

「油断するな。これからは“支配者”自体を相手にしていると考えた方がいい。あいつの思い通りに闘いを進められるわけにはいかならないから」

浅滅が言った。

「それで。そのロストランドまではどれくらいの距離があるんだ？」
「……？ 可笑しな事を聞きますね。あなたはこの街の住人でしょう？」

あれ。まだ言っていなかったっけ。

「俺は数日前にこの街に引っ越してきたんだ。別に生まれた時からこの街に住んでるわけじゃない」

だから地理的な話で俺に期待するのはよしてくれよ。

そう言うと、鈴は納得がいったとでも言いたげな顔をした。

「成る程。何で響輝さんはこんなに街の住民の死や争いに無関心なのだろうと思っていましたけれど、そうですね。響輝さんは元々“街”の外の人間なんです」

「街の外の人間であることに意味なんかあるのか？」

そんなこと関係無く“恐鬼”共は襲ってきたが。

「いえ、大したことではないです。ただ、街の外からやってきた人間には、“街”が隔離されていくうえでの記憶への干渉、タイムパラドックス時間錯誤の影響がほとんどないですよ」

それは初耳だな。……ああ、だからあの、色んな建物に描かれていた解読不能の文字が見えたし、変貌していく“街”に対して疑問を持つことができたのか。どうりで、道行く人々はあの文字に見向きもしなかったわけだ。

しばらく歩き、ビルの目立つ街道に入った時だった。

「……？」

「どうした？」

浅滅が問いかけてきた。

俺は上を見上げて目をこらす。

「……あのビルの上、何かいないか？」

「何だと？」

二人も上を見上げる。

少し先にあるビルの屋上。そこに何か、丸い何かがいるのが見えた。

……と、それが屋上をさっと離れ、こちらに落下してきた。

「何ですか？ あ丸いの」

落下してきた丸い物体を見て鈴が言う。

少し先の路上に落下してきたものをまじまじと見る。

俺の記憶が正しければ、あれは……。

「……アルマジロ、じゃないか？」

「何ですか、それ」

鈴が訊いてくる。

「北アメリカからアルゼンチンあたりに分布する哺乳類だ。特徴は、
あのようにボール状に丸まー」

と言いかけた時だった。

「避けてッ！」

鈴が叫び、俺を突き飛ばした。

「ッ……、何を」

と文句を言いかけた俺の目の前を、ぶん、と風を切るような音を立てながら“アルマジロ”が転がって行った。

「……」

「気をつけてください！ あいつ、かなり速いです！」

鈴が叫ぶ。というか人の話は最後まで聞けよ。

まあ、そうしたら俺が死んでたわけだが。

考えていても仕方あるまい。

そう考え、“アルマジロ”の方にベレッタの銃口を向け、引き金を引いた。
が。

“アルマジロ”の甲羅に当たった銃弾はあっけなく跳ね返り、乾いた音を立てつつ明後日の方向に飛んで行った。

「銃が効かない！？ ……響輝さん？」

鈴が叫ぶ。

とっさに“アルマジロ”の方に向き直ると、すでに“アルマジロ”は俺の目の前まで転がって来ていた。

間に合わないー！

そう思った時だった。

「……ふふふ、死にそうだね、響輝君」

そんな声が聞こえ、次の瞬間、

目の前の“アルマジロ”が真っ二つに切り裂かれた。

でもだけどそれでも少年は … 2

目の前で“アルマジロ”だったものが真っ赤な血を断面から吹き出している。

「……」

続いて目の前に、見覚えのある制服を着た、“戌海琴音”が降ってきた。

……否、“戌海琴音の姿をした恐鬼”が降ってきた。

片手に短刀を持った“偽琴音”が身軽そうに地面に着地する。

「……またお前か」

さんざん会ってきたからさすがに分かる。

また出やがったな、偽魔女め。

「……久しぶり、響輝君。元気そうでなによりだよ」

“偽”が微笑みながら片手に持った短刀を腰の鞘におさめた。

「何の用だ？ ようやくお前が俺を殺すシーンになったのか？」

「……ふふふ、それも面白いんだけどね。そうもいかなかったんだよ」

戌海と同じ顔で全く違う雰囲気的笑みを浮かべる“偽”。

「響輝さん、そいつは何ですか？ 何で“鍵”と同じ姿を……」

鈴が近寄るに近寄れない、といったふう遠巻きにこちらを見る。

「……こいつは偽物の戌海琴音だ。俺の恐怖から生み出された“恐鬼”なんだとよ」

そう。こいつは最初に学校で戦った、戌海琴音の“偽物”。

そつえばこいつ、何度か夢にも出てきたな。あの現実感からして、あれがただの夢だとは思えない。こいつは他人の夢に入る能力

でも持っているのか。

「……ふふ、やっぱり焦らないね。自分の命を狙っているかもしれない相手が目の前に現れたのに、響輝君は全然恐怖してくれない」「偽」がつまらなそうに口をとがらせた。

「響輝さんを狙って……？」

「そうだ。こいつは俺を殺すためにここにやつ——」

俺が最後まで台詞を言い終わる前に、鈴は動いていた。

瞬時に距離をつめ、その手にもった大鎌を“偽”に向かって振り下ろす。

が。

「……ふふ、考えなしに行動しない方がいいよ、大鎌の少女」

こちらを向いたまま、抜き身の短刀で後ろからの大鎌を受け止めた“偽”は、そんなことはどうでもいいとも言いたげに、呟いた。

でもだけどそれでも少年は
… 2 (後書き)

短いすね(汗
では、良いお年を。

でもだけどそれでも少年は … 3

「なッ……」

鈴が驚いたように、短刀にはじき返された姿勢のまま後退する。

「……大鎌。あなたみたいな死に損ないが、響輝君の歪みの具現である“私”を斃^{たお}せるとでも思っているの？」

後ろを横目で見ながら“偽”が言った。

「お前……」

何だ……？ こいつから前の、教室の時のような倦怠感を感じない。

「ふふ、前にも言ったよね。“私”は響輝君の記憶から生まれたモノなんだよ。そして、記憶っていうものは、常に蓄積され続けるものだから」

“偽”がこちらに向き直る。

「……“恐鬼”は人の記憶から最も恐怖するものになり、その人が最も恐怖する事をする。その力の度合いやイレギュラーさは、生みの主の因果の歪みに左右される……」

教室でこいつが言っていた事を思い出す。

“恐鬼”は人の恐怖の具現。転じて、それはその人がいかに今までの人生で酷い体験をしてきたかの象徴でもある。

もっとも恐怖する物を前に、普通なら人間は恐怖を抑えきれない。だが俺は、恐怖を感じる以前に、その記憶自体を封印していた。

……いや、その記憶を間違った、“復讐”という形で精算してしまっていた。だから、恐怖や絶望というものの自体、感じない……否、感じている……ということを感じられなくなっていたのだ。

まあ、こいつは俺の感受性の話をしているわけではないだろう。

こいつが言いたいのはおそらく、俺から生み出された自分という存在の構成要素に、俺の“恐鬼”との戦闘経験が更新され続けている、ということだ。

そして、それが指し示すのは、俺が戦闘経験を積みれば積むほどこいつは異常性を増すということ。

「その通り。だから、響輝君が“恐鬼”にとってイレギュラーな存在なら、そこから生まれた“私”も、法則にとっては異常な存在」「偽」が微笑みを浮かべたままこちらに寄る。

「響輝さん！」

鈴がはつと我に返り、再び大鎌を構えてこちらに詰め寄ってくる。「……だから、言っただじゃない」

が、やはり振り下ろされた大鎌の刃は、振り返った“偽”の短刀に受け止められていた。

「響輝さん！ 私が押さえている間に、早くこの“恐鬼”を！」

「あ、ああ……」

いかん。戌海の“姿”を見るのが久しぶりだっただけに、一瞬空気にのまれかけていた。

ベレッタを取り出し、弾を装填する。

「分かってないなあ、響輝君。私、前に言ったよね」

“偽”がそのままの姿勢で振り返り、その眼を俺に向けた。その瞳の色は……、あざやかな紅。

「くっ……」

あの時と同じく、酷い倦怠感が俺を襲った。

「あなたは、“私”に恐怖している。だから、あなたに“私”は斃

せない」

「ッ……な、に……？」

腕が、上がらない。これではあいつを狙えない。

「ねえ、響輝君。取引しようよ」

突然、“偽”がそんなことを言い出した。

「取引……だと……」

何を言っているんだ、こいつは。

「響輝さん！ “恐鬼”からの誘いに乗ってはいけませ……きゃあッ！」

こちらを向いて叫ぶ鈴が“偽”に弾かれる。

「あなたには聞いてない」

後ろを見ながら“偽”が冷たいまなざしを鈴に向けた。

「響輝君、今“私”はある奴に狙われてるんだ。“私”じゃどうしても勝てない相手なんだよね」

「だから、お前を庇えとでも言うのか？」

「ご名答。人外に対抗する時は、あなた達の方が使えるもの」

「それで？ 取引と言うからには、何かこちらにも利点があるんだろうな」

「勿論」

そう言つと、“偽”はこちらに向き直った。

「私に協力してくれたら、ロストランドまで、“恐鬼”のいない道をナビしてあげるよ」

微笑みながら“偽”が言った。

だが嘘臭い。いや、間違いなく嘘だ。

「ひどいなあ。私”は“偽”^{フェイカー}だけれど、嘘はつかないよ」
“偽”がくると短刀を手で回す。

でもだけどそれでも少年は … 4

「ふふふ」

“偽”がこちらを見ながら鼻歌を歌い始めた。シンキングタイム
とでも言いたいのか。

「響輝さ……」

「止める、鈴」

なおも立ち上がるうとする鈴を制する。

「でも……」

今の俺と鈴ではこいつを斃せない。取引に従うしかないだろう。

「……いいだろう。その取引とやら、受けてやる」

「わあ、ありがとう、響輝く……」

“偽”があからさまな笑顔を顔に浮かべかけた時だった。

「……散れよ」

と言う声が耳に届き、その声を聞いた鈴がとつさにその場から飛
び退く。

次の瞬間、

「紛い物があぁッ！」

“偽”の後ろの方の角から浅滅が飛び出し、ショットガンの引き
金を引いた。

乾いた銃声と共に、幾多もの鉛玉が“偽”の方に飛んでいく。

「“魔弾”か。姿が見えないと思ったら、そんなところにいたんだ」

“偽”がふつと笑うと、足元にあった真つ二つの“アルマジロ”
の遺骸を蹴り飛ばした。

“アルマジロ”だったものの断面に弾丸が突き刺さり、ただでさ
え中身の見えてえぐい状態だったそれは、蜂の巣をあけたぐちゃぐ

ちやの、ただの肉塊になった。

どちら、と地面に落ちたそれが真つ黒な塵になり、空气中に霧散していく。

角から姿を見せた浅滅は、そのままひざを曲げ、そばにあった電柱にもたれかかった。

「……クソッ」

「……ふふつ。“魔弾”、こんなところで全力は使わない方がいいよ。ただでさえ、あなたは本来の人間の寿命どころか、“狩り人”の寿命をも引きのばしてるんだから。今回までが限界だろうね」

浅滅が限界……？　どうということだ？

「あれ、知らないの？　響輝君。“狩り人”も“逸れ者”も半永久的な寿命があるだけで、絶対的な不死ではないんだよ。ただ、気力と根性さえあれば、それをちょこっとだけ引き延ばせるんだけどね」

“偽”がこちらを向く。

浅滅。“アルマジロ”がビルの上から落ちてきたあたりから姿が見えなくなっていたが、どこにいたんだ？

「……お前ら、あの“恐鬼”がただ一体だけだと思っていたのか？　浅滅が息を荒げながら言った。

「あついう潰したり高速で移動する“恐鬼”は大抵集団で行動する。俺はその道に隠れていた残党を始末してきただけだ」

「そういうこと。ここからは、ありとあらゆる、魑魅魍魎、奇想天外、怪力乱神、異類異形の“恐鬼”があなた達を襲って来るんだから。私に付いて来るなら、その危険性も減ると思うんだけどな」

そう言い、“偽”が嗤った。

そして偽少女は高らかに嗤う

… 1

「その角の向こう、人型の“恐鬼”が三体いるわ」
先を歩いている“偽”が立ち止まった。

「三体程度なら回り道をしなくても大丈夫です、斃しましょう」
鈴が大鎌を構え、道の向こうに飛び出していく。

「浅滅、大丈夫なのか？」

後ろから先ほどの疲労っぷりが嘘のように歩いてくる浅滅に問いかける。

「問題無い。この程度は慣れた」

浅滅がショットガンを取り出して弾丸を詰め直した。

「——ちよつと止まって」

しばらく歩き、細い路地を抜けようとしていた時、“偽”が手で俺達を止めた。

「どうした？」

「すぐに引き返して反対側に戻って！」

返答せずに、“偽”が焦ったように叫んだ。

慌てて最後尾の浅滅から順に、元来た道を逆戻りする。

「……まだ駄目だよ。音を立てないで」
切羽詰まったように言う“偽”に、俺達はなすすべもなく従う。
路地の方を盗み見ると、反対の街道を“何か”が横切っているのが見えた。

「……何だ？ あれ」

どうやらその“何か”は長いモノらしく、頭部はもう通り過ぎてしまった後らしい。俺の視界に映ったのは、向こう側の街道を通って行く、巨大な長い何かの一部分だった。

“それ”の上半分は鎖帷子のような鱗に覆われており、下半分は“それ”の表皮らしく、見るからに分厚そうな部分が見えていた。

しばらくじっとして“それ”の尾と思わしき部分が完全に通り過ぎ、俺たちは一斉に溜息を吐き出した。

「おい、紛い物。“あれ”は何だ？」

浅滅が“偽”に問いかける。

「あんな大きな……“恐鬼”は見ただけありません。いや、そもそも……あれは“恐鬼”なのですか？」

「そう。あいつも“恐鬼”。この、ロストランドの周りを囲んでいる中央市街の主である、通称、“大蛇”おうち」

“偽”が気を取り直したように語り始めた。

そして偽少女は高らかに嗤う

… 2

「あの“大蛇”^{おろち}には勝てない。巨体は一刀両断するには太すぎるし、鱗も半端なく堅い。戦うだけ無謀だよ」

「偽^{フェイカー}」が言う。

「け、けれど、そんなこと戦ってみないと分からないですよ。何か弱点があるかもしれませんし」

鈴が食い下がる。

「無理だよ。戦ったもの」

“偽”がさらっと言った。

あの“大蛇”と戦った？　どういうことだ？　お前らついに共食いまで始めたのか。まあ、それはそれでこっちにとってはいい話なんだが。

「何か勘違いしてるね、響輝君。“恐鬼”は各自が自由に人間を襲っているだけで、共闘するっていう発想自体無いの。“私”は“恐鬼”の中でも異常性が高く、人間に近いから動かす頭もあるけれど、大抵の、それこそ虫の姿をした“恐鬼”なんかは、ほとんど何も考えちゃいないわ。考えているのは、“支配者”^{ルイ}に属しているということと、敵だけ」

“偽”がもつともらしく語る。

「私が響輝君のところに向かおうとしたときに、ちょうどバイクに乗った人たちが“大蛇”に追いまわされていたわ。たまたま通りかかったら、“大蛇”にもるともターゲットにされちゃって」

あの暴走族、あんなのに追われてたのか。ご愁傷様としか言いようが無い。

……そうか。あいつが、バイクよりも速く、半端な攻撃ではびくともしない“何か”だったのか。仮想敵にしては酷過ぎる感もあるが。

「何とか逃げ切ったけど、あいつは駄目。多分、目に入った人間、敵をすべて喰らうことしか考えてない」

目に入った物、ね。

……いや、目といっても蛇の視力はそんなに良くないはずだが。

「……いや違うな、ピット器官か」

「その通り。奴は獲物が生きている者かどうかを温度で判別する」

蛇が持つピット器官は、温度を感知して獲物かどうかを判断する。厄介だな。

「つまり、半端な目くらましでも誤魔化せないということか」

一定の範囲内に入ったら車と同程度かそれ以上の速さで追いかける。何だそりゃ。遭ったらお終いじゃないか。

「車があれば多分しばらくは追いつかれないけど、時間の問題だろうね。それに、あいつの熱探知を躲すには最低でも建物一つ分の障壁が必要になるわ。直線上にいたらすぐに路地に駆け込まないと、死ぬ」

死。ゲームオーバーだよ、と“偽”が続けた。

そして偽少女は高らかに嗤う

… 3

しばらく“偽”の先導に従い、中央市街の中を進む。

今のところ、この偽物は正確な道を教えてくれている。だが、取引まがいのことをしたからといってこいつを信用するわけにはいかない。

今は本物の戌海みたくにこにこ笑っているが、いつまたあの“黒蜘蛛”と共に俺を仕留めにくるかもしれないのだ。

考えられるのは、おそらく今の“街”での人間側において最強であろう、鈴と浅滅が俺のそばにいるから手出しが出来ないということうくらいか。分断が目的だとしたら、よりいっそう周りに気を配らなければならぬ。

だが、こいつはあの時短刀一本で鈴の大鎌と互角に渡り合っていた。それだけの力を持っているのに正面切って襲いかかってこないのは何故だ？

いやもしかして、本当にこちらの側についたのか？ …… ありえない。いくら異常性の高い“恐鬼”だからといって、人間側に寝返ることなんてあるはずがない。

とするとスパイという可能性が高いな。いやでも……。

「そんなに考えても答えなんて出ないと思うけれど？」

「ッ！？」

前を歩いていた“偽”が突然振り返り、笑いながら言う。

「……聞こえてたのか」

「うつん。分かるからだよ。“恐鬼”はターゲットが恐怖を感じていることが分かるように出来てる。要するに、相手が今何を感じているかが大体分かるんだよ。それで、今響輝君が感じているのは、疑問」

成程な。いちいち厄介な相手だ。

「それに、大鎌。あなた、ずいぶん人間らしい感情を抱いてるね。そんなんじゃ、そのうち虚を突かれちゃうよ」

ついでに、といった感じで、“偽”が鈴の方を向いた。

「……余計なお世話です。あと、私は今でもれっきとした人間です」
「まあ、仕方ないよね。“恐鬼”に勝つのに最も重要なのは、相手に恐怖を抱かないことだもの。それでも、恐怖だけを感じないようにするには精神力が持たない。だから、“狩り人”は自らの感情を殺して活動する」

“偽”が再び前を向いた。

。

しかし、さすがに数時間もの間、“恐鬼”やあの“大蛇”を警戒しながら歩いていると精神力が持たなくなってくる。目の前の“偽”は相変わらず道順を示しているが、信用はできない。

だから、俺や鈴、浅滅もそれぞれ周りを警戒していたのだが、さすがにそれを数時間も続ければ身体にまで影響が出てしまう。

「もう。そんなに信用ないかな」

無いな。微塵も無い。ここまで来てお前に裏切られて、いやそもそも信用していないから裏切りですらないが、お前に嵌められて敗北するなんて結末はごめんだ。

「そう？ まあ、私は構わないけど、あなた達に勝手に消耗されたりいざ戦闘になったときつそうだし。ちょっと休憩しようか」

そう言つと、“偽”は左手に見えるレストランを指さした。

レストランの中は当然、無人だった。比較的建物や内装は無事だ

が、窓ガラスがいくつか割れてしまっている。

割れたガラスが音を鳴らすのに注意しながら、レストランの二階に上がった。

そこには一階と同じく、いくつかのテーブルと椅子がほぼそのままの状態に残っている。

俺はその中でも、一番窓から遠い席に腰を下ろした。

「どうにかあの“大蛇”には見つからずに済んだが、こつも気を配っている」と頭がもたないぞ」

『おい、響輝』

ため息をついていると、ハーテッドが話しかけてきた。

「何だよ、急に」

『ツールを使っていたからか、バッテリーの消耗が激しい。非常電源のあるところに立ち寄ったら充電してはくれぬか。それまでは休眠状態になっておく』

そんなことか。構わないぞ、それくらい。

『……任せた』

そう言うと同時に、ハーテッドの電源ランプが光を失った。PCでいうところの休止状態である。

頭を休めるために何も考えず、しばらくバラフライナイフを開いたり閉じたりしながら時間をつぶす。

鈴はレストランの厨房で食べられる物を確保している。浅滅は一階で煙草でも吸っているのだろう。

「響輝君」

急に後ろから声がかかり、とっさにバタフライナイフを後ろに向ける。

だが、後ろに立っていた“偽”は俺の腕手首をいとも簡単に掴んでいた。

「……放せよ」

「嫌だ」

“偽”は面白そうに言うと、左手で俺の左手首を掴んだまま、こちらに顔を寄せた。

「ねえ、響輝君。教室で言ったこと、覚えてる？」

その顎が俺の肩に乗せられる。

こいつは人間ではないのに、いかにも“ただの人間の女子”のような、ハーブのような香りが鼻腔をくすぐった。

「……何が言いたい」

今ここでこいつに抗っても構わないが、なにせこいつは今はずっとナビゲート役をやっている。理由がない。

「一目惚れだよ、一目惚れ。もう、乙女の純情をないがしろにしないでよね」

もつともらしく言うその言葉にイライラがつのる。

「ねえ、響輝君。今からでもいいよ。私はずっと待っててあげるからさ。全部私に——」

「五月蠅い！」

掴まれていた腕を振り払う。思いのほか、抵抗は少なかった。

“偽”がそのまま一歩下がり、にやつと嗤う。

「何でそんなに力が出たのか、って思ってるでしょ。それはね、響輝君の“私”に対する恐怖よりも、一時的にイライラから来る怒りの方が勝ったからだよ。自分の邪念に対してのストレスが内から来る恐怖より強かったわけ」

どういうことだ？ とっさの事で頭が働かない。

「“恐鬼”と戦う時に戦闘を有利にしたかったら、それを忘れないで。例えば恐怖が押し寄せても、他の想いでそれを上書きしてしまえば幾分か楽に戦えるわ」

……何か引つかかるな。だいたい、それはお前にとって不利な情報だろうが。確かに理にはなっているが、それが本当とは限らな

い。

「これは本当だよ。よく言うでしょ、化け物を斃すのはいつだって人間なんだから。響輝君は私の獲物だよ。他の“恐鬼”になんか渡さない。勿論、“支配者”にだって」

そんな空恐ろしいことを言つと、“偽”は顔に艶やかな笑みを浮かべた。

そして偽少女は高らかに嗤う

… 4

「心で勝っていれば、まだ勝機はあるよ。でも、体格差と思考能力の問題から、“大蛇”は無理だろうけど」

“偽”が俺の向かいの席に腰を下ろした。

改めて、こいつの顔が真正面に来る。寸分の狂いもなく成海と同じだ。ただ性格が違ったためか、若干目元が違う気もする。うる覚えだが。

「そうだよ。“私”は響輝君の記憶の欠片にすぎない。でも、時間っていうものはそれ自体が膨大な情報量だから、“恐鬼”はその源が例え刹那の間の記憶でも人間を越える力を有するの」

人より強くあれど、“恐鬼”は影から人の感情を喰うに留まっていた。

その均衡を、法則を“鍵”というイレギュラーが崩壊させた。

「正確には、実体の無い“恐鬼”が人の記憶から時間を模写し、情報量というエネルギーを糧に存在しているわけか」

どうにか自分の中で結論付ける。

「そうだね。そういうコンピュータに例えた考えの方が分かりやすいかも」

そこで、“偽”はズいっと顔を近づけてきた。

「ね？ 私、嘘は言っていないよ。むしろ響輝君にとって有利なことを教えてあげたよ」

“偽”がどうだ、とでも言いたげにこちらを見つめる。顔が近い。だからって根っこまで信用するわけにはいかない」

こいつには散々痛い目に遭わされているのだ。そう簡単に信用しては相手の思いがままである。

「強情だなあ」

五月蠅い。

「……そう言えば、お前」
「何ー？」

二階を歩きまわっていた“偽”が答える。

「俺の夢に入ってこなかったか？ 二回くらい」

「……」

そう訊くと、“偽”はしばらくぽかんとした後に、

「……ぷっ、あははははは！」

吹き出した。

「まさか響輝君、“鍵”じゃなくて“私”の夢見てたの？」

「う……いや……」

まさかこいつの所為じゃないのか。ウソだろ。

マジかよ。俺ってば情けねえ。

「あははははは！……まあ、冗談は置いといて」
こいつ……。

思わず立ち上がって殴ってやろうとした俺を“偽”が手で制する。

「ねえ、響輝君。こんな話、聞いたことある？」

ならば思いつく限りの罵詈雑言を浴びせてやろうと口を開きかけた俺を“偽”が手で制する。

「残酷な同じ夢を見続けると、三回目で死んじゃうっていう話なんだけれど。……ほら、電車がどうこうってやつだよ」

それなら聞いたことあるな。……いや、確かネットで見たことがある。

「確か名前は……」

「あ、ストップ！」

その怪談だか都市伝説だかの名前を頭に思い浮かべた時、“偽”が声を上げた。

「どうした？」

「そついう、この場合は夢だけど、実体を持たずに広範囲に渡って

人を喰らう“恐鬼”は現象の伝聞と、何より名前に反応するの。だから、今響輝君が“それ”の名を口に出したら本物がやってきちゃう」

「……本物？」

何を言ってるんだこいつは。

俺が聞き返すと、“偽”は微笑みながら、

「そつだよ。私は“偽”^{フエイカー}、だから自分の知りえる本物に基づいて、ニセモノとしての行動をとることができる。まあ、短絡的に言うとなら、後一回“私”が響輝君の夢に入り込んだら、響輝君は死んじゃうわけ」

……え。

一瞬、思考が停止した。

そして偽少女は高らかに嗤う

… 4（後書き）

分かりにくいですかね。

話の中にちよろつと出てきた都市伝説は、知ってる人は知っている
“猿夢”です。

ちなみにフェイカーが言っているのは、本物の現象に対して、アレ
ンジを加えた偽物の現象を起こせる、という事です。
ある意味本物より強い。

そして偽少女は高らかに嗤う … 5

「じゃあお前……」

既に詰んでいたのか、俺の盤上^{ゲーム}は。

「ううん。違うよ。確かに響輝君は今私にチェックメイトされた状態だけど、それだけだよ。まだ負け試合は終わっていない」

“偽”が鼻歌を歌いながらこちらを見続ける。

「……成程。やっぱり、取引ですらなかったか」

取引もへったくれもあつたもんじゃない。俺の命が詰んでいる状態だっというのなら、それをダシに俺を脅せばいいだけのことだ。

「いやいや響輝君。取引は取引。“これ”は保険だよ」

まさに生命保険だよ、と“偽”が言う。笑えねえ。

「最初は、それで響輝君を永遠に眠りから覚めないようにしようか
なつて思ってたんだけど、どうもしくりこないから、これは保険
にとどめておくことにしたんだ」

気まぐれで人の命を弄ぶなよ。迂闊に睡眠もとれやしない。

「……て、あれ？ 響輝君。二回って言ったよね？」

そうだと。俺の夢に“お前”が入り込んで“お前”という存在
が夢の中に存在したのは、今までの俺の人生の中で、確かに二回だ。

「……ふうん、へえ。それで、答え合わせでもする？」

「するまでもないな」

“偽”が少し嬉しげに微笑を浮かべた。

「……よく分かつてるんだ、響輝君。そうだよ。性悪説とか、性善
説と同じ。“恐鬼”は確かに見えざるモノだけど、確かにそこに
存在する。人が感情を持って生まれたその瞬間から、その人の感情
が暴走しないようにそれを喰らう。それが本当の“恐鬼”のあるべ

き姿」

何度も似たようなことを言われたからな。誘導尋問のつもりだったのか？

「……“私”は嘘はつかないよ」

質問の答えにはなっていないが、まあ言いたいことは伝わる。

この“街”にいる人間の数だけ“恐鬼”も存在する、とはつまりそういうことだ。

「……さて。十分休めたよね、響輝君」

まあな。胡散臭い話をされて頭はあんまり回復してないが。

「私の所為じゃないよ」。響輝君が私の独り言を聞いたのが悪いんだよ」

濡れ衣はよせよ。

そう言つと、俺は椅子から腰を上げた。

「響輝さん」

「……なんだよ」

一階に降りると、鈴が鎌の刃を手入れしていた。

「あの“偽”のこと、信用するつもりですか？」

するわけないだろ。何だよいきなり。

「だって、普通に会話してるところを見るとそうは思えないんですよ。てつきり心を許してるものなのかと……」

「それは無いな。ただ、あいつは俺の一部……要するに記憶の一欠

片だからか。妙に敵対する必要性を見失ってしまうんだよな」

「それこそ相手の狙いでしょうに。響輝さんは冷たい時も角が取れている時もどっち道欠点があることに変わりはないんですね」

鈴がため息とともに失礼極まりないことを呟く。

「ただ響輝さん。これだけは忘れないでください。暴走した“恐鬼”というものは、あまりにも残酷で、卑怯でずる賢く、最もひねく

れた手段で目的を喰らいます。騙されないでくださいよ」

何をそんな真摯な顔で言うか。そんなことくらい分かってる。

「そうだといいいんですけれど……」

それでも鈴は心配そうな顔でこちらを見ていた。

分かっている。むしろ、分からないのはあの“偽”だ。何を考えているのか全く分からない。

「確かに、あの偽物が何の目的で動いているかはわかりません。ただ、一つ言えるのは、絶対に、いかなる理由があろうとも、“恐鬼”を信用してはならないということです」

それは絶対条件か？ お前の習慣ではなく。

「絶対条件です」

そう言うと、鈴はレストランの外を確認した。

そして偽少女は高らかに嗤う

∴ 6

再び、“偽”の先導のもと“中央市街”を進む。

「もうすぐロストランドだよ」

しばらく歩いた後、“偽”がそう言った。

薄く霧が立ち込める市街は、どこもかしこも争った跡や血痕が目立ち、もはやこの世のものとは思えないほどに腐朽していた。

「戌海は、あそこに居るのか？」

浅滅に訊いてみる。

「確かにいる。だが、若干次元がずれているな。“支配者”の仕業だろう。そう簡単に渡すとは思えない」

そう言いながら、霧の中につつすらと輪郭が見える、ロストランドの観覧車の方を見ながら浅滅が答えた。

――――

「さあ、着いたよ。ここが、ロストランド。あなた達の目指す、最終決戦の地」

そう言いながら“偽”が目の前にある遊園地の入口を指さした。

「ようやくか。それで、お前はどつするんだ？」

お前の出した条件はここまで俺達を誘導することだろう？ ならば、ここでお前とは決裂するわけなんだが。

「とんでもない。別にここまで来たらあなた達と戦うなんて言っていないでしょ？」

振り返りながら“偽”が言う。

「まあ、そうだが……」

先に入口にある門をくぐった“偽”に、俺達も続く。

ロストランドの中は、かなり広かった。

メリーゴーランドに、ジェットコースター、見えていた観覧車や、他にもメジャーなアトラクションが並んでいるのが見える。なんだ、都会から遠い割には充実しているな。まあ、そんなことを考えている場合ではないか。

そんなことを思案しながら、“偽”の背中を追って歩く。

しかし、本当に人一人いやしないな。ここに着くまでにさらに生き残っている人に会うかもしれない、と思っていたが、このロストランドに入って十分以上経っているのに、いまだに“恐鬼”にすら遭っていない。

……『“恐鬼”にすら遭っていない？

ちよつと待て。何かおかしくないか？

ここは奴らの根城だぞ。なのに入っても何も襲ってこないだなんて、おかしいじゃないか。

「おい、鈴！」

自分の後ろについて来ているはずの鈴に異常を伝えようと振り返った。

……が、そこには鈴はおるか、浅滅すら影も形もなかった。

「ッ！？」

慌てて前に振り向くと、

「くくく、くくくくくくく……」

こちらに背を向けたまま、
“偽”が肩を震わせて、嗤っていた。

そして偽少女は高らかに嗤う

… 7

「くくくつ……」

“偽”がどれだけ息が続くのだろうか、延々と含み嗤いをし続けている。

「……嵌めやがったな」

こいつ。嘘じゃない嘘じゃないと言って置きながら、結局嘘だったのか。

「馬鹿だなあ、響輝君。“私”は嘘は言わないっていつてるでしょ？」

「盛大に言ってんじゃねえか！」

違うよ違う、と“偽”がこちらを振り向きながら言う。

「“私”はただ、言ってることとやってることが違っただけで、口ではちゃんと皆に従ってたじゃない。それに、“私”は『あなた達』を騙すことはしないって言ったけど、別に響輝君個人を“私”の個人的な理由で個別に騙すことをしない、とは言っていないでしょ？」

とんだ屁理屈だ。詭弁にも程がある。

「せっかくこの“街”の中なら自由に動けるんだもの。やりたいことはやっておかなくちゃ」

と、意味不明なことを呟きながら、“偽”が軽快な足取りで後ろに下がっていく。

「鈴や浅滅は……、いや、そもそもここはロストランドなんだろう？ どうして居るべき“支配者”^{ルラー}がいない？」

どこからどう見たって、普通の遊園地だ。間違いなくこの景色は実際のロストランドのものだろう。どうしていまだに何も姿を現さないんだ？

「大鎌と魔弾はちゃんとそこに居るよ?」

そう言つて、“偽”は俺の後ろを指すが、そこには誰もいない。
「でもね、その座標にいるだけで、居る空間が違ふんだ」

“偽”が続ける。

「知つてる? 響輝君。“支配者”の力の内の一つは“牢櫃神蔵”ろうひつかくら。ある一帯を自由に異空間に閉じ込める力なんだよ。それで、これは“牢櫃神蔵”に範囲は劣るけれど、その“偽物”。この空間ぐらいしか閉じ込められないの」

そう、ごめんねとでも言いたげに、十数メートルくらい離れた位置で“偽”が言う。そんな謝りたげな顔をして何の意味があるのか。

「それで、えーっと、どこまで話したっけ。……ああそうそう、夢の話だよ。あと一回で響輝君は“私”に殺されないといけないんだけど。実はここ、取りようによっては、響輝君の意識内、つまり夢と同じものとしてとらえることも出来るわけなんだけれど」
そうかい。よく解らんが。

「そういうことで、響輝君はここで殺されちゃうわけだよ。いや、殺されないといけないの。だから、今ここでしっかりしつぽり、骨の髄から髪の毛の先つぽまで、私が殺し尽くしてあげる。二度と、“響輝君”が苦しまないように」

楽にしてあげるよ、響輝君。

そう言つと、“偽”は腰の短刀を抜き、刃をこちらに向けた。

そして偽少女は身を委ねる ∴ 1（前書き）

今回の話には、“猿夢”がどんなものであるかを知っていないと、
分かりづらい描写が若干含まれます。別に知らなくても若干ですの
で影響はしませんが、興味のある方は検索してみてはいかがでしょ
うか？

そして偽少女は身を委ねる

… 1

ここは龍ヶ峰市の中央市街にある“ロストランド”だ。確かに“ある”場所や座標は同じだが、空間が違う。

ここは存在するはずの無い、偽物の空間なのだ。

「さあ、さつさと済ませてあげるよ。まずは、なんだっけ。……そうそう、最初は“活けづくり”ッ！」

“偽”が叫んだ瞬間、急に辺りが殺気に満たされた。

途端、“偽”の横に紅い軌跡を視認する。間違いない、“黒蜘蛛”だ。

「ッ！」

とつさに横に飛び退くと、そこを“黒蜘蛛”が視認できるぎりぎりのスピードで通り過ぎて行った。

ポーチに手をつ込み、バタフライナイフを取り出す。

「ふふふ、ふふふふふ……」

“偽”が不気味に嗤い、再び今度は右から紅い光が見えた。だが、いつまでも逃げているようでは体力を削られて殺されるだけだ。

幸い、“黒蜘蛛”との戦闘はこれで三回目。なんとか相手の動きにも反応出来る。

“黒蜘蛛”が迫って来るのを感じつつも、その感覚を引きつけ、ギリギリのところ右手を勢い良く振るった。

……確かな手応え。右を向くと、バタフライナイフの刃先には“黒蜘蛛”の頭部が刺さっており、胴体はびくびくと痙攣を繰り返しているのが見えた。

「……へえ」

“偽”がニヤリとした表情でこちらを見る。

「もう“黒蜘蛛”の動きまで追えるんだ。驚いたよ」

散々お前にちよっかいを出されてきたんだ。これ位のことは出来るさ。

「まあでも、まだ足りないな。これなら……どうツ？」

そう叫びながら“偽”が片手を振り上げた。

すると、それに呼応するように次々と“黒蜘蛛”が辺りに出現する。

数は……六体。

「まだ足りないよ、響輝君。苦しみから解放されて死ぬか、それとも別の道に行くか。まだ、“私”は満足できてない！」

その声と同時に、六体の“黒蜘蛛”が一斉にその場から消えた。

……いや、違う。時折視界を横切る紅い光の軌跡が、それらが消えたのではなくやはり、高速で空中を飛び交っているのだということを示していた。

「響輝君はまだ強くない。どれだけ建前を取り繕っても、心だけはただ生きているだけでは“恐鬼”を退けるほどに成長することはないの」

“偽”が聞いてもいないのに余裕の表情を浮かべながら語り始める。

だがそんな話を聞いている場合ではない。

薄闇の中、俺の周りを円を描くようにいくつもの紅い軌跡が動いて行く。

おそらく、最初に“黒蜘蛛”遭った頃なら、俺は何もできずに死んでいたことだろう。

……だが、何故だろう。不思議と、恐くはなかった。

死ぬのが怖くない、というわけではない。ここで殺されるのはまっぴらごめんだ。

怖いものは確かに怖いのに……、何故かこの状況に恐怖を感じることはできなかった。

バタフライナイフを黒い塵になって霧散していく“黒蜘蛛”から抜き、片手で逆手に握る。

……“黒蜘蛛”達の行動に規則があるわけではない。だが、この化け物共がまだ攻撃のタイミングを伺っていることは理解できた。

しばらく、“黒蜘蛛”どもと硬直状態が続く。

「つまらないよ、響輝君。もっと熱くならな……きゃ！」

そう叫びながら、“偽”が上に挙げていた右腕を振り下ろした。と、同時に、周りを飛び交っている紅い軌跡の内の一つが揺らぐ。

「……そこだッ！」

視界に映っていた軌跡が揺らいだ、ということは、今まで俺から見て左右に飛び交っていた“黒蜘蛛”が進行方向を変えたということだ。

従って、揺らいだ方向に向かって刃を突き出せば……！

「……へえ」

“偽”が愉快そうに声を漏らした。驚いたわけではないらしい。突き出したナイフには先ほどと同じく、前脚を突き出した姿勢のまま、“黒蜘蛛”が頭部から突き刺さっていた。

それが乱闘開始の合図となり、残り五体となった“黒蜘蛛”どもが、それぞれ違う方向から俺に攻撃を開始する。

ナイフを構え直しながら、ふと、最初に会った時に鈴が言っていた言葉を思い出した。

――『空中に飛び上がるのは、敵に料理してくれと言っているのと、同義です』。

紅い軌跡の動きを頼りに、再び右腕を振り上げる。

同時に、丁度こちらの懐に飛び込んで来ていた“黒蜘蛛”が一体、身体を分断されて地面に落ちた。

その遺骸が黒い塵になって空中に霧散していくのを確認し、続いて、横から飛びかかってきたもう一体を蹴り上げる。

……あと、四体。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5986s/>

Lost Days

2012年1月15日01時56分発行